

の作品を不快には思はぬかと尋ねられた。夫人の、作者の妻としてではなく、全集出版者として御許しを願ふといふ意味の答へは、皇帝の意を得たのであつたらう。皇帝はトルストイが秘密の印刷機械を所有してゐないといふことを確かめられた上で、遂にこの作をロシア文の全集に収めることを許された。但し、この作だけを單行本として賣り出したり、また全集中の第十三巻だけを引き離して賣つたりすることは禁ずるといふ條件の下に。

しかし一年ほど経つて、トルストイは、千八百八十一年以後の自己の著述の一切の著作権を抛棄することを世間に發表した。そこで世間の出版者は争うてこの作品を單行本として出版した。夫人もこの場合どうすることも出来なかつたであらう。しかし、アリェクサーンドル三世はこの事を耳にして、機嫌を損ぜられ、「あの婦人が自分を欺いたとすれば、自分は何人を信じてよいかを知らない！」と言はれたと傳へられる。

神主人 千八百九十年の作。コルネイ・ワシーリエフ 新編 嬰果 いづれも千九百五年の作。何の爲めに？

千九百六年の作。いづれもトルストイ晩年の宗教上社會上の問題に關する思想を取り扱つた物語である。

闇の力 千八百八十六年の夏、トルストイは丹毒のために重體に陥つた。そのために九週間を病床にすてし、一箇月間は全く文筆を執ることを禁ぜられた。この病中に成つた戯曲が「闇の力」であつた。彼は最初夫人に口授して筆記せしめ、後には安樂椅子に倚つて自から書いた。この戯曲の材料となつた事件はトォーラの法廷で取り扱はれたのであつた。トルストイはこの作に就いて、ファイナーマンに向つて、「小説を書いてゐるときは畫を描いてゐるやうである。畫筆を執つてゐるやうで、自由である。うまく行かない時は變へられる、色を足したり加へたりすることが出来る。しかし戯曲はさうは行かぬ。戯曲は彫刻家の仕事であ

る。陰影とかぼかしとかいふものがない。凡てハッキリと強く浮き上らせなければならぬ。中の出来事は十分に熟して用意されてゐなければならぬ。全體の作は、これ等の成熟した時機、これ等の成熟した人物の氣分を表現するところに在る。この事は非常に困難なことである。殊に農民生活を取り扱ふ場合に於いてさうである、それは自分にとつては異境である、別の半球である！」と言つたと傳へられる。

この作の出版は許されたが、上演は禁ぜられた。アリェクサーンドル三世在位中はそのままになつて、ニコライ二世の世になつて、千八百九十五年初めてロシアでの上演が許された。尤もロシアでも、私人の邸宅などで演ぜられたことはそれまでにもあつた。この作が初めて公演せられたのは、千八百八十八年二月二十二日、パリのアントワヌの自由劇場に於いてであつた。ゾラは殊に熱心にこの上演に助力し應援した。「一場と雖も一句と雖も省くな、成功するかしないかなどと氣遣ふな。」と言つて、その稽古を勵ましたといふ。その折の出演者は皆素人であつた。しかし全力を注いだ上演は成功して、忽ちパリの諸劇場で演ぜられるやうになつた。千八百八十九年から千八百九十年へかけての冬の季節にはベルリンの自由劇場で演ぜられ、イブセンの「幽霊」とひとしく、ドイツの自然主義運動に深大の影響を與へた。ロシアでは千八百九十五年十月十六日、ペティエールブルグのストーリーリンの劇場で初めて演ぜられ、それに次いでモスクワの小劇場でも演ぜられた。イギリスとアメリカとは、それから殆ど十年の後に漸く上演せられた。千八百九十六年モスクワで初めて上演せられた後、大學生の群はモスクワのトルストイ邸宅まで押し寄せて、作者を歡呼喝采した。トルストイは平生から特に青年の思想を重んじてゐたので、この場合も非常に感動した。しかしいつもの通り、かういふ場合にはまた非常に間が悪く、何と言つて挨拶をしてよいか殆ど困つたと傳へられる。

この作はトルストイの戯曲の中でも、最も力強いすぐれたものである。トルストイの信仰も愛の福音も彼をして醜惡な殘忍な戰慄すべき現實に盲目ならしめなかつたのである。而してこの赤裸々な地獄の如き農民生活の暗黒のうちに、殘忍醜惡な戰慄すべき現實のうちに、やはり消すことの出来ない人間の本性の光りのあることを見た。トルストイの現實を見る目の透徹せることを示すに足ると言つてよい。

この作でトルストイの晩年の思想の一面と照應せしめて目立つのは、女性を大體に於いて道德的に劣惡と見る傾きである。彼の禁慾的宗教的的人生觀、絶對清淨の考へ（『クロイツェル・ソナータ』に見えるやうな）と、そこにおのづから相通ふところがある。

文明の果實 千八百八十九年の作。この作の材料乃至背景となつたのは、トルストイと生前交りのあつた降神術の信者リヲフ及びその一家であるといふ。この作はヤースナヤ・ボリャーナで十二月三十日の夜、新年の祝節に内々の人々で演ずるために書かれた。その演出者のうちにはトルストイの子等もあつた。この作は容易に検閲局で公演を許された。最初の公演はトウラの素人の團體によつてせられた。またツァールスコエ・セロの離宮でも演ぜられた。アリクサーンドル三世も觀客の一人であつたといふ。勿論皇帝を初めその演出者も觀客の大公や貴族たちも、この作の有する社會的諷刺の意味はよく分らなかつたのである。千八百九十一年の九月には、ベチエールブルグのアリクサーンドリンスキー劇場で演ぜられた。この作は一面宗教が迷信的な超自然的なもの——たとへば降神術のたぐひのもの——と全く無關係であるといふトルストイの宗教上の見地から、殊に當時の俗見に對する批評の意を含めたものであるとともに、また他面、謂はゆる教養ある社會の空虚な無用な贅澤な消閑の遊戯と農民の眞面目な興味との對照、輕浮な富める地主と貧

しい農民との對照によつて、生活の虚偽と眞實とを鋭く批判しようとしたものとも見られる。

ラメネ ビョートル・ヘリチーツキー バスカル 何れも千九百六年に書かれたものである。これ等の三人は、トルストイが教權と戦ひ政權と戦つて來た間に見出した思想上生活上の同感者であり味方である。

石地獄の廢滅とその復興 前者は千九百三年に、後者は千九百九年に書かれた一般民人のための宗教上の訓話である。

アツシリヤエサルハドン 勞働と死と疾病と 三つの機關 モードのイギリス譯には、この三つの小話をまとめて、「虐げられたる猶太人のために書かれし話」としてある。第一のものは千九百四年に、第二のものは千九百三年に、第三のものは千九百四年に書かれた。千九百三年のキシニエフ及びゴーメルに於けるユデヤ人の虐殺に對して公けにした社會に對する公開狀の外に、トルストイはその際不幸を受けたユデヤ人を救済するための目的でこれ等の小話を贈つたのである。

最初の想ひ出 幼年時代の想ひ出 前者は千八百七十八年に、後者は千九百五年に書かれた。『幼年の頃』の他に、トルストイの早い頃の自傳の一断片として興味がある。

村の三日 村の唱歌隊 旅人との對話 第一のものは千九百十年に、あとの二つは何れも千九百九年に書かれた。

吹雪 ホルストメール 前者は千八百五十六年に、後者は千八百六十一年に書かれた。但し後者の世間へ出たのは千八百八十八年であつた。『吹雪』はトルストイが初期の作中、軍隊生活の間に得た題材を取り扱つたもの、『ホルストメール』もまた自傳的な要素を多く有つてゐるものである。

殊に「ホルストメール」は馬の生活、心理を描いたものとしても知られてゐる。クーパーの短篇「イズムルード」も同じく馬の生活を描いたものであるが、その文章の初めには、「比類なき斑の駿馬ホルストメールの記念に捧ぐ」といふ題詞が記してある。トルストイが馬の心理に通じてゐたことは有名な話である。かつてトゥルゲーニエフとの散歩中、寂しい野に餘生を保つてゐる一匹の廢馬を見て、トルストイは馬の心理を細かく生き生きとトゥルゲーニエフに向つて話し出した。トゥルゲーニエフは驚いて、當時の新思想としてよく持ち出されたダーキニズムに觸れ、「レフ・ニコラーエキツチ、君の先祖の中にはきつと馬があつたに相違ない！」と言つたといふ話がある。

## 五

私の懺悔 春秋社版全集の譯で「私の懺悔」となつてゐるのは、イギリス譯によつたので、もとの標題は「懺悔」とある。千八百七十九年に書かれたもので、トルストイの宗教上思想上の告白のうちで、恐らく最も重要な意味を有するものであり、また最も興味の多いものである。この一篇には過去五十年に亙るトルストイの生活の忌憚なき、ある點に於いては寧ろやや誇張せられたとさへ見えるほどの告白がある。この一篇はかやうな宗教的告白としては理智の克つたものといふ感じもあるが、それはトルストイの感情が微薄であるといふためでは勿論なく、彼の理智の力が更にそれにまさつて逞ましいからである。それにトルストイの

心の轉機は急激に來ないで徐々に來たといふこともある。とにかくこの一篇には所論の正否などを尋ね究めるよりは、トルストイの生活を見るべきである。トルストイの生活の解放解脱の努力が、どれ程命がけな力強いものであつたかを感じすべきである。彼の心の轉機はこの「懺悔」によつて劃せられるといふが、しかしこの「懺悔」に見える苦しみと解放の願ひとは、已にはやく「幼き頃」を書いた頃から見えてゐたといふことが出来ないでもない。何れにしても彼の生活に含まれ宿されてゐたさまざまな危険な不安な萌芽が、この時代に至つて悉く眞の解脱轉換を迫るに至つたものと見てよい。この一篇はひとりトルストイの述作の中に在つて重要なものであるばかりでなく、昔からの三四の懺悔告白の書と相並んで永く人間に讀まれるべきものであらう。

我が宗教 この標題もイギリス譯によつたので、もとの題は「わが信仰は何に在りや」とある。千八百八十四年に公にせられた。この前年已に殆ど出来上つてゐたのを携へて、十月頃一週間程トルストイはモスクワからヤースナヤ・ポリャーナの方へ休みに行つた。その歸途ステーションから自邸へ着く間に持つてゐた手籠を櫛から落して、その中に入れてあつたこの文章の幾章かの草稿をも失つた。しかしトルストイの心はこの中に書いた思想で充實し切つてゐたので、そこだけを直ぐ書き直した。そして全部出来上つたのが千八百八十四年の一月二十二日であつた。惡への無抵抗や、さばく勿れの思想を説き、新約聖書の精神の新らしい自由な解釋などを眼目とするこの述作が、當時の宗教上の檢閲を無事に通過しさうでないかと考へたので、彼は最初五十冊だけの特製版を作らうとした。それは、已に印刷せられた書物を通過させるか全然禁止するかといへば、一般に普及させないための少數の印刷物なら、寧ろ往々檢閲官も見のがすことがあつたからで

ある。しかし宗務省側の検閲は寧ろ無事であつたのに、當時の高壓的政治家ボビエドノスツエーフはこれを禁じた。禁ぜられたこの書は、そのために一層人々の興味を刺激して、先づ已に印刷せられたものは焼かれず、有司官僚の間に内々争うて讀まれ、やがて廣く謄寫版、寫真版で世間に流布するに至り、先づジュネヴで印刷せられ、やがてヨーロッパ各國の言葉に翻譯せられて行はれるやうになつた。ロシアで刊行を許されたのは大分それから後のことである。

**宗教は何ぞや** 千九百二年、彼が一家とともに南の方ガイスバラに病を養ふ間に書かれたもの。原語での標題は「宗教とは何ぞや、及びその本體は何にありや」とある。トルストイの晩年の述作中、恐らくは重要なものの最後のものであるといつてよい。宗教、信仰、教會等に關する彼の思想を知るために最も重要なものの一つである。眞の宗教の敵としての教會に對するトルストイの非難攻撃は、ひとりロシアに於いて一般の反感を招いたばかりでなく、西ヨーロッパに於いてもさまざまの方面にトルストイを非難するものを生ずるに至つた。ドイツでは、千九百二年七月九日、ライプツヒの出版者ディーデリックス及びトルストイの宗教論の翻譯者ロウエンフェルド博士は、宗教上の罪に問はれて起訴せられた。けれどもそれは幸ひに無罪の判決を受けた。トルストイの思想の力がやはりここで重きをなしたのである。

**基督教** 千八百九十七年に公にせられたもの。トルストイのキリスト教に對する見解を、つとめて簡單に明瞭に秩序立てて説かうとしたものである。しかし、その説き方が冷やかで教訓的なところの多いため、彼の考への普及のために書かれたものであるに拘らず、わりあひに一般に流布しなかつたものである。

**我等何を爲すべきか** ルカ福音書の中の「さらばわれ等何をなすべきか」といふ言葉を取つたので、原文に

はその通りの標題になつてをり、ルカ福音書の三章十節、十一節が文章のはじめに引いてある。千八百八十六年の二月に書き上げられたもので、トルストイがモスクワ在住時代の生活、殊にモスクワの最も有名な貧民窟——寧ろ社會のあぶれものの自然に落ちて來る集合所、ゴリキキーの謂はゆる「どん底」であるヒートロフカを訪問して得た見聞から、貧乏の問題に就いて専ら説いてあり、また、人間を束縛する道具としての金錢に就いて説いてある。トルストイの社會問題殊に經濟問題に關する文章として重要なものであるばかりでなく、また一面その自傳とも見るべきところが多い。この中に説かれた貧乏に就いての考へは、現代焦眉の實際問題を取り扱つたものとして、多くの大膽率直なる眞理を含んでゐる。社會生活の不自然を指摘した點は、その矯正の手段方法に就いては異見があるとしても、何人も強き刺激を感じずにはゐられない。

**宗教と道徳** 理性と宗教 前者は千八百九十四年、後者は千九百一年に書かれたものである。「宗教と道徳」は或る倫理學會の一會員からの、宗教とは何を意味するか、道徳は宗教から獨立して成り立ち得るかといふ意味の質問に對する答へとして書かれたものである。「理性と宗教」とに就いてヤースナヤ・ポリャーナ學校の教師であつたファイナーマンの記すところによると、この一篇はある男爵夫人からトルストイにあてて信仰に於ける理性の價値に就いて尋ねて來たのに對し、數日熟考の後に書かれた返書である。その時トルストイはファイナーマンに向つて「私は非難せられることは分つてゐるけれど、やはり理性性と繰り返さざるを得ない。それより他に眞理に達する道はない。私たちが口を通してのみ肉體を養ふことが出来るやうに、理性を通してのみ私たちの心を養ふことが出来る」といふ意味の事を話した。この一篇は、トルストイが神祕家であるといふ見解を全く否定するものである。この書簡が當時のトルストイ教徒の間に傳へられた時に

は、教徒の間にはさまざまな議論を生じた。蓋し當時のトルストイ教徒の間には、神祕的獨斷思想が強く流れてゐたからである。従つてこの一書簡は、彼等の間に分裂を生ずるに至つた。彼等の多くは再び正教會へ還り、その中には修道僧となつたり尼となるものさへあつて、トルストイはその理性偏重を以て甚だしく非難を受けた。トルストイがこれ等のことを耳にした時に、彼は「さうであらう、しかし私はやはり繰り返して言はねばならない。理性、理性、理性！」と言つたといふ。

神についての考察　トルストイのさまざまの述作、書簡、日記などから、神に就いての思想、宗教上の思想に關する部分を抜萃したもの。千八百九十四年編。

神の國は汝等の中にあり　千八百九十一年から千八百九十三年の春へかけて、最も熱心に、萬事を忘れるほどの勢ひで書かれたものである。前に書かれた「わが信仰は何に在りや」で説いたところの、暴力に對する否定、暴力に對する無抵抗の主張をば、更に説きすすめたものと見てよい。「わが信仰は何に在りや」の反響として、アメリカのクエーカー宗徒からトルストイに宛てて送られたところの、千八百三十八年ボストンでハリソンによつて書かれた無抵抗主義の主張と、「無抵抗の訓戒問答」とは、トルストイ及びその同志をよろこばしめた。トルストイの「神の國は汝等の中に在り」は、この二つの文獻を基礎としたものである。最初トルストイは、彼の新人生觀の基調たる、教會の欺罔と國家の欺罔との二方面に互つて書くつもりであつたが、だんだん筆をすすめて行くうちに、殊にその方面の材料の豊富であつた第二の問題、即ち國家の欺罔に就いて主として書くやうになつたのである。つまり暴力否定の思想を主として政府の用ひる力の方面へ向けたのである。この書は勿論ロシアでは禁ぜられてゐたが、それでも事實は寫本となつてひろがり、讀ま

れてゐた。しかも、この書の中に、職權を濫用して罪なき農民どもを管刑に處した知事のことを書いてあつたために、その知事が罷免せられたといふ皮肉な挿話さへある。

## 六

人生論　千八百八十七年に書かれたものうちで、重要な意義を有するこの哲學上の論文は、それがトルストイの人生觀を表白したものととして極めて重大視すべき性質のものであるに拘らず、良い翻譯のなかつたために、ヨーロッパでもわりあひに廣く知られてゐなかつたものである。トルストイは千八百八十七年の六月に、ある人へ送つた手紙で、「私は自分の著述『生と死とに就いて』(即ちこの所謂人生論)にかかりきつてゐます。それが出來上つてしまふまでは手を放す事が出來ません。私はその中に生きてゐます。私はそれが間違つてゐるかどうかわからない、しかしそれから離れる事が出來ない。」と言つてゐる。彼が如何に心力を籠めてこの一篇を書いたかはこれによつて十分窺ひ知る事が出來るであらう。彼はこの中で似非の科學や似非の宗教を難じ、人生の幸福の意義を探求し、自己犠牲を論じ、眞の愛の意義を高調し、生活の意義を説き、自我の觀念を闡明し、人生の意義が結局肉體的私慾的動物的幸福以外にある事を諄々として力説してゐる。この一篇は、キリスト教に關する忌憚なき批評考察を含むの故を以て、最初ロシア本國では刊行を禁ぜられた。元來トルストイの原稿の續く分りにくいのは評判のことで、それをいつでも印刷に附して後に、

幾度となく繰り返して熱心に綿密丹念に校訂するのがいつもの習慣のやうになつてゐた。しかしこの一篇は前述のやうな事情でロシア本國で印刷することが出来なかつたため、トルストイはその校正刷を繰り返して訂正するの機会を得なかつた。殊に、この一篇は、トルストイが平生からやや取り扱ひなれてゐない哲學上の題目を取り扱つたものであつたので、尙更表現の不十分不明確なところなども多く、當然校正の際に訂正を要すべきところが多かつたのである。しかも前記の事情から、この一篇は最初スキップルのジュネヅァで印刷に附せられ、更にまた筆寫せられて世間へ弘まり傳はるやうになつた。随つて、この一篇の眞意を明確に把むためには、普通の讀者にとつては相當の辛抱と考察とを要する次第である。殊に最初のイギリシ譯の如きはその最も甚しきもの一つであるといはれる。トルストイはこの一篇がロシアでの公刊を禁ぜられたため、その後モスクワの心理學會でこの一篇に書いたと同じ趣旨で「人生の意義」と題して講演を試みたことがある。トルストイのこの講筵に集つたものは夥しき數であつたといふが、その當時のロシアの有識階級には唯物論の思想が一般に瀰蔓してゐたので、トルストイの講演の眞意はよく理解せられなかつたと傳へられる。この「人生論」が、トルストイの心血を注いで書いたものであることは上に述べたが、これを讀んでその以後の生涯に深大なる影響を受けたものも少くなつた。ローズヴェルトと共に共和黨の政治家として知られてゐた故アーネスト・エイチ・クロースビーの如きも、その著しき一人である。彼はたまたまトルストイ夫人のフランス語に譯した「人生論」を讀んで、人生の意義乃至價值に關する在來の考へ方を一變した人である。彼が後親しくトルストイを訪問したとき、トルストイはクロースビーに向つて、あなたのやうに、若くて健康で富んでゐる三つの不便を持つてゐる人には、善良であることは至難の業であらう。しか

しそれがために思ひ止まつてはならないと告げた。クロースビーはアメリカへ歸り、政治や法律の方面の仕事を一擲して、トルストイの人生觀を表白した二卷の詩集を公にした。その中には可なりすぐれたものも少くないといふ。彼はまたトルストイの教へを普及するために講演をも諸所に行つた。キリスト教的アナキストの立ち場から、ある選舉の際には投票を差し控へたこともあつた。しかし次の機會には、自分がまだ全く政治上の興味から超越してゐないこと、随つて投票そのことはよくないにしても、その自己の心境に従つて行動することが却つて正直であると感じて、ブライヤンに投票したことがあつた。これ等の點の考へかたは不十分であるにしても、クロースビーがトルストイの「人生論」から受けた人生觀上思想上の影響感化の深大なりしことは、以上の事實によつてもほぼ察せられる。

續雜に關する論文 千八百九十一年から千八百九十二年へかけてのトゥーラ及びサマラの二縣に互つた饑饉に對して政府の態度は極めて冷淡不親切であつた。それに對するトルストイ一家の奔走盡力は特筆するに足るものがあつた。トルストイの二人の長子はトゥーラ縣で、トルストイの三子レフはサマラ縣で、トルストイ及びタチヤナ等はベジューチエフカ(トゥーラ縣及びリヤザン縣の南方)で、その健康を損するに至るまでも救済のために立ち働いた。健康が恢復すると、また再び救済の仕事に歸つて行つた。夫人は四人の幼少な子女とともにモスクワに止まつて、物資供給の本營となつて働いた。春秋社版全集第六卷に收められた論文のうち、「不作に苦しむ國民の救助手段に就いて」、「饑饉か非饑饉か」の二篇だけは千八百九十八年に書かれたものであるが、その他はすべて千八百九十一—二年の間に書かれたものである。そのうちのあるものはやや短縮せられてロシア本國で公けにせられ、あるものはロンドンの「デイリー・テレグラフ」に現は

れた。これ等に於いてトルストイは農民等の悲惨な状態を敘し、その救済のためにとられた手段方法を敘し、社会の非キリスト教的組織を難し、富者と権者との特権を棄却すべき所以を力説した。しかし饑饉に對して教會や政府を初め一般の世間の冷淡を難じたものは、ロシアでは公刊を禁ぜられたのであつた。

兒童のために説かれたキリストの教へ 原名はただ「キリストの教へ」とのみある。特に兒童のために書かれたもの。トルストイの福音書研究の一つである。トルストイはその晩年に及んで更にヤースナヤ・ポリャーナの兒童のために學級を編み、いろいろの物語や傳説を読み聞かせ語り聞かせ、人生の意義乃至義務に就いて説き聞かせた。それ等の物語の中から、千九百八年になつて取りまとめられたのがこれである。

十二使徒によりて傳へられたる王の教へ 福音書は如何に讀むべきか、並びにその本質如何 前者は千八百九十五年、後者は千八百九十六年に書かれたもの。千八百九十四年頃から書かれた宗教上の諸論文のうちで、トルストイの轉機後直ちに書かれた諸論文よりも一層廣く且つ熟した見解を示してゐるものである。

簡易聖書 公刊せられなかつた四福音書に關するトルストイの研究を、トルストイ家の家庭教師が自分のために寫し取つて置かうとして、いろいろの章の要點だけを書き取つて置いた。それが集まつたものがこの「簡易四福音書」もしくは一般に「簡易聖書」として知られてゐるものである。この書の序はトルストイ自から新たに筆を執つて書いた。千八百八十一年に書かれたものである。

シエークスピヤ及び戲曲に就いて 藝術とは何ぞや 前者は千九百六年に書かれ、後者は千八百九十七年に書かれたものである。トルストイのシエークスピヤ論が、多くの偏辭を有することは一般に知られてゐるところである。彼がシエークスピヤざらひであつたことは有名であるが、しかしまたかういふ話もある。人間と

しても作者としても彼の愛し好んだチエーホフが、あるときトルストイを訪問して辭するとき、トルストイは例のユーモアのある口調で、チエーホフに向ひ「君はまことに善い人です。私は君が大變好きです。ところで君も知つてをられる通り、私はシエークスピヤは辛抱が出来ない方ですが、それでも君の脚本よりはよいと思ひますよ！」と言つて、チエーホフを笑はせたといふことである。藝術論は前後十五年にも互つたトルストイが考察の餘に成つたもので、彼の論文のうちでも恐らく最も熟考の上に成つたものであらうと謂はれる。彼はこれを書くために屢々劇場に行き、さまざまの國語で書かれた夥しい數の通俗小説を讀み、また千八百九十六年には、わざわざある繪畫展覽會を見るために、ベティエルブルグまで行つたりした。彼の簡潔、單純、誠實といふ藝術上の三標準の意義に就いてはいろいろの議論があつても、この藝術論が一つの新しい藝術に對する觀方を大膽に力説したところに力がある。シエークスピヤ論とあはせてトルストイの藝術上の考へを知るために重大なものたるは勿論である。

## 七

復 活 は千八百九十九年に公にせられた。トルストイはこの時既に齡七十を過ぎて、漸く健康の衰へを感じ、脱稿を取り急いだ氣味がある。彼はアメリカへ移住する反國教徒たるドゥホポール宗徒を援助する財源を得るために、彼が年來企ててゐたこの作を書くことを思ひ立つたのである。彼はこの作の初版の發行權

をベティエルブルグの雑誌「ニール」へ一萬二千ルーブリで賣つた。しかし検閲官が随分無遠慮な削除を加へ、ところどころ全く一章を削つてしまふやうなことをさへあつたに拘らず、例の如くトルストイ流の校正をしてゐる間に、——校正の折に書きかへたり書き直したりしてゐる間に、却つて最初の原稿よりは長くなつて、その「ニール」の發行者マルクスでは、トルストイの申出を待たないで別に一萬ルーブリを支拂うた程であつた。かやうにしてロシア原文の最初の版に對して、凡そ二萬三千五百ルーブリの原稿料が支拂はれたといふ。尤もトルストイがかねて一切の版權を棄却してゐるといふところから、「ニール」以外のロシアの雑誌などでこの「復活」を「ニール」から無断で轉載するやうになつた。「ニール」では勿論抗議を申し出た。トルストイも仕方なしにこれ等の雑誌新聞に向つて、「ニール」に載せてしまはないよりは轉載しないやうに頼んだ。これのイギリス譯は、チュルトコフやモードの間にいろいろの面倒ないきさつがあつた末で、結局トルストイの頼みで、モード夫人が翻譯することになつた。復活のイギリス譯本はその後もいろいろ出てゐるが、恐らくはこのモード夫人の最も信用の置けるものであらう。この作に就いてはモードも言つてゐるやうに、恐らくこれまでに書かれたその種の小説の中で、最も緊張した道徳的な小説と謂へるであらう。しかし情事を聖書の如くあからさまに取り扱つてゐるといふ點から、イギリスのある貸出圖書館や書肆では、これを不道徳な書物として目錄の中から削除したことがあると傳へられる。イギリスやアメリカで讀まれたトルストイの作中、これは恐らく最もひろく讀まれ且つ賣られたもので、いろいろの翻譯が出たのに拘らず、モード夫人の譯本からの収入だけでも、三千ポンドに達する額であつたといふ。この作の題材は實際法廷に起つた事件を傳へ聞いたもので、久しく筆を着けかけたままにして置いたのであつた。この作にはトルスト

イの老齡を思はせるところがある。やや性急な、まごちないところがある。初期の藝術上の作品と違つて、作者の主觀が少し慌だしく滲み出てゐるところがある。しかしながら、その人間の内に對する同感の深さに於いて、眞實さに於いて、依然としてトルストイの魄力を感じしめる。ロマン・ローランの言つてゐるやうに、この作のページを通じて「トルストイの輝ける眼、蒼灰色の鋭くつきさすやうな眼、人の心を直ちに見ぬき、しかしあつちゆる人の心にその神を見る眼」を見ることが出来る。この作がまたイギリスのヒズ・マジュスティー座をはじめ、ヨーロッパ各國は勿論、日本にまでもひろく舞臺の上で演ぜられたことは、世間熟知の事實である。

**教義神學の批評** 千八百八十年、「懺悔」を書いて後直ちに筆を取つて書かれたものであつた。この前後はトルストイが専ら宗教上の諸論文に全力を注いだ時期である。この論文はここでは教義神學の批評となつてゐるが、或はまた獨斷神學の批評とも譯する。この論文の如きは、勿論到底ロシア本國では出版公表の見込みのなかつたもので、ギリシヤ正教に對する大膽熱切なる、忌憚なき批評が、無事に世間の光りを見ることは勿論豫期すべきことではなかつたのである。また何等筆者に物質上の利益をも持ち來たす見込みはなかつたものである。トルストイはただ一心に、己むに己まれずして、内から迸り出づるものを抑へ切れずして書いた。彼がこの論文に心を集め、誠實熱心を集めたことは明らかである。また彼によつてこの論文の説くところが如何に重要なものであつたかといふことも察せられる。この論文の書き了へられたのは千八百八十年であつたが、千八百九十一年に至つて、スキツルのジュネヴでロシア文で初めて公刊せられた。この初版は不十分不完全なところが多く、千九百三年クライストチャーチでチュルトコフの出版したものが正本と



せられてゐる。この論文はトルストイの數多い述作の中でも、恐らくは最も讀まれてゐないものであらう。イギリス譯としては唯一つハーブードのキーナー教授があるが、モードに據るとその譯はあまりよくないものらしい。春秋社版の全集に收められたものは、トルストイ夫人の出版にかかる現在のロシア語の最も信用すべき全集の中から原文によつて譯されたものである。この論文は一見煩瑣で無興味のやうではあるが、ボビエドノスツェフ支配下の宗務省によつて統轄せられ、憲兵によつて保護せられてゐたギリシャ正教會に對する大膽熱切にして忌憚なき攻撃の如きは、たしかに興味深き讀みものたるを失はない。教會の教義が如何にキリストの本來の教へから人を迷はしめるものであるかといふトルストイの論證は、彼の眞理に對する熱烈な誠實な敬虔な心を具さに語つてゐるものと見るべきであらう。

## 八

世の終り 我等は何のために生きるや 第一階段 神へか悪魔へか 何故人々は自かからを麻酔させるか  
一月二十四日の文藝祭 反省せよ 愛の要求 惡を以て惡に報いず 意志の自由に就いて 現在の社會組織に就いて 汝殺す勿れ 恥ぢよ 自己完成に關する意義 精神的本源の意義 人生の意義に就いて 自己を信ぜよ 自殺に就いて トルストイ教に反對して ゴーゴリに就いて 唯一の教訓 政治家へ 露國の社會運動に就いて 露國民に向つて 大罪 勞働者諸君に 愛國心 何をすべきか アナーキズムに就

いて 眞正の自由 ハリソンと暴力に對する無抵抗 避け難き革命 ストックホルム平和會議草案 新聞紙一枚 眞正の手段(最後の論文) 悔い改めよ 海牙の平和會議草案 二つの戦 カルタゴ破壊せざる可らず 現代の奴隸制度 黙する能はず 死刑と基督教 互に愛せよ 露西亞革命の意義

上記の諸論文は、春秋社版全集の第八卷に收められてゐる。その一卷に收められたトルストイの諸論文に就いては、その一つ一つに就いて解説する煩を避けて、一括して二三の點に就いて述べて置くことにしよう。先づトルストイの革命に對する態度に就いて見ると、世間には——ロシア本國に於いてすら随分誤つた解釋を持つてゐる人があるやうである。トルストイの革命に對する考へは、彼が千九百五十六年の頃に發表した種々の論文によつて知ることが出来る。彼の考へによると、革命はいつでも殺人、刑罰、武裝せる内亂に歸着し、結局人間を惡化し動物化する。革命は國民から食を奪ひ、國民の生活を重くする。革命家の謂はゆる改革は、不自然な人爲的な生活を意味し、國民のために幸福を招來すると稱するところのものが、實は國民自身にとつて風馬牛なことである。國民は革命家よりも自己の行くべき道を深く知つてゐる。革命家は生活を公正にするに稱するが、彼等は公正ならざる生活状態に於いて僅かに存在の可能を有するものであつて、一旦公正な生活の秩序が樹立せられると、即ち他人の勤勞によつて徒食する徒が、その徒食を安全に懶惰に寄生的に持續して行くことが出来なくなると、民衆の勤勞に衣食する種類の人々とともに飢餓のために死ななければならなくなる。革命家にとつては、人間が勤勞を以て人間に有益に働かなければならぬ生活の秩序こそは、最も危険なものと謂ふべきである。革命家は國民のためといふ美名の下に自かから欺いてはならぬ。革命といふ暴力を以ての戦ひのうちには、何等萬民のために有益善良なものがないばかりでなく、その

戦ひは、眞に愚かなる、有害なる、殊にまた無道德的なものである。

トルストイの考へに従ふと、革命家が民衆の生活状態を改善することを以て目的とするのはよいとしても、その目的を達する手段方法に於いて彼等の採るところは誤つてゐる。一般民衆の生活状態がよくなるためには、第一人々自身がよくなるなければならない。器に盛られた水が沸くためには、其のうちに含まれたすべての水の滴が沸かねばならない。人々がよくなるためには、人々が一層深く自己の内部の生活に心を注がなければならぬ。外部的の、社会的の活動、就中社会的の争闘は、いつでも人間の注意を内部の生活から引き離す。随つていつでも人間を墮落せしめて、社会道德の水準を低める。これは事實が證明してゐる。而して社会道德の水準の低下は、社会の最も無道德的な分子が、いよいよますます社会の上層表面に浮び出て、没道德的な社会の輿論が立てられるといふ結果を生み出だす。而してその輿論は、偷盗、姦淫、甚だしきに至つては殺人をさへ許し且つ是認するに至るのである。かやうにして、世界の道德は低下し、時代の英雄は没道德的な人物となる。この點に就いては殊に青年の反省を要する。青年は自己の善良にして眞實なる生活に就いて考へなければならぬ。それがためには先づ自己の私慾私利に身を任せて、それを以て国民のために盡すなどと考へるやうな自己欺瞞に陥ることを避けなければならない。即ち先づ自己を省察し、自己を矯正し、而して自己をよくすることを努めなければならない。若し人々が、社会的生活に就いて考へたいと思ふならば、先づ何よりも国民の前に、自己が罪があるものであることを思はなければならない。而して能ふ限り国民の勤勞を少く消費することを努め、国民を助けることが出来ないまでも、せめて國民を驚かせたり苦しめたりしないやうにするがよい。而して多くの人々が犯してゐる恐ろしい罪を犯さないやうにするがよ

い。欺いたり、激昂させたり、盗みや一揆内亂を勧めたりして、結局非常な苦しみと、前よりも甚だしい束縛とに陥らしめないやうにするがよい。國民の眞の解放、眞の向上を妨げないやうにするがよい。自己に、自己の生活に、公明な嚴肅な態度を以て臨むといふことが最も必要である。自己の生活こそは我々の左右し得る唯一のものである。自己の生活のみよく自己が支配することが出来る。また自己の生活の改善のみが、唯一ひとり萬人の生活の改善を能くするものである。

これによつて見ても、トルストイが個人の内部生活、魂の生活の改善を重要とし、これによつてはじめて集團生活の改善も亦行はれると信じてゐたことは明白である。個人々の内部生活の改善の實現されない限り、一切の外部的改革は、有害でこそはあつても、何等の利益を一般民衆の生活に招來する所以の道でないといふトルストイの考へは、その革命否定論の根據として、トルストイの宗教、道德方面の考へから推して當然のことである。

尙またトルストイの非戦説絶對平和説が、今のロシアのポリシエキ一派の戦争反對と同一視せられることがあるのは、この考への根據理由を不問にして、結論だけを不十分に輕率に比較するところから生ずる誤謬である。ポリシエキの戦争反對は、現代の戦争がすべて資本家階級の利益のために營まれるものであると見て、その理由を以て反對するのである。しかしながら、彼等はその自己の階級的敵者たる資本家を倒すためには、戦争——もしくはひろく暴力を用ひることを敢て否定してゐない。この事は既に言ふまでもなく世間周知の事實である。而してトルストイの戦争否定説は、彼の「暴力を以て惡に抵抗する勿れ」といふ謂はゆる無抵抗主義の思想に基くものであつて、その戦争反對といふところだけは相似てゐるが、その理由根

據に至つては全く別種のものである。しかもその戦争反対さへ、トルストイのは絶對的平和思想による絶對反対説であり、ポリシエキキ一派のは必ずしも暴力を否定しないといふ點で、程度ではなくして本質的の相違がある。トルストイの言ふところによると、革命の目的は或る種の暴力からの解放にある。随つて一般民衆が受けつつある暴力からの解放のために行はれる實現の手段が、暴力以外のものではあらねばならぬといふこと。勿論である。然るに在來の革命は、その目的を實現するために暴力を用ひた。しかも暴力はそれ自身甚だしき不平均の表現である。かくの如き暴力によつて平等平均を得ようとすることは迷妄である。自由は到底暴力を以ては達し得ない。暴力を以てする革命が、人々に與へ得るところのものは、すでに悉く與へられ盡した。またそれとともに、暴力を以てする革命が何もをも與へ得ないことも明白になつた。自由とは魂の自由を意味する。自由とは、人間が自己の神性を意識し、他人の生存を愛するために障礙となるところのものから、人間の魂を自由に解放することを意味する。魂の結合即ち眞の人間の結合は、かくの如き解放によつて初めて行はれる。神の掟、愛の法によつて生活するもののみ自由である。自己との戦ひに打ち克つことによつて、人は初めて魂の束縛から解放せられる。自由は人間が他の人間から與へられたり受けたりする事の出來ないものである。内心の信による自由、内心の信による結合、これ等は凡て外的のものでもなく、強制的のものでもない。この意味に於ける自由解放には、何よりも人間の個々の内心の變化が第一である。人間内心の變化からこそ、外的の變化は自から導き出される——トルストイの革命に對する、また暴力に對する考へかたは、これ等の思想から明白に了解することが出來るであらう。

トルストイはやはりあくまでも求心的である。非我から我へ徹底しようとする、トルストイは普通の言葉

の意味では反革命家に屬する。しかし、人間の心の不斷の誕生を主張する意味では、永久の革命家である。

## 九

戦争と平和 トルストイは最初「十二月黨員」といふ作品のためにさまざまな史料の調査に着手した。その結果更に以前に溯つて、十九世紀の初めナポレオン戦争の時代を主題として、雄大な規模の歴史小説を書くことになつた。これがこの「戦争と平和」である。彼がモスクワのルミャンツェーフスキー博物館内の圖書館での歴史的研究や、彼自からナポレオン戦争のあつたところ、たとへばポロディノなどへ、自分の義弟（即ち追憶記を書いたベルス）を伴つての遺跡探求や、またトルストイの一家に傳はる古文書記録言ひ傳へや、彼自からクリミヤの戦役での経験や、さういふものがこの作の材料となり基礎となつたことは言ふまでもない。彼は千八百六十四年の十一月頃友人フェットに與へた手紙に、その異常の大作に關する異常の苦心と抱負とを告げてゐる。しかしその前、同じ年の九月に、トルストイは狩に出て落馬し、そのために一時は氣絶をした程で、腕を挫折して、最初はヤースナヤ・ポリャーナで治療に従事したが、十分に恢復しなかつたので、更に夫人の父で侍醫であつた老ベルスのすすめでモスクワへ出で、遂に手術を受けた。手術後元氣を恢復するとともに彼は自分の手ではまだ書けないので、夫人の妹タチヤーナ・アンドリエエヴナ（「戦争と平和」のナターシャのモデル）に口授して筆記して貰つた。それから間もなく雑誌「ロシアの報知者」の

カトコフとの間に約束が成り立つて、一巻即ち十六ページに對し三百ルーブリ（モードの傳には五百ルーブリとあるが、ここではビリュコフの詳傳の記すところに従つておく）の原稿料を受けることになつた。彼がこの作のために費した前後七年の間に、即ち千八百六十二年から千八百六十九年の間に、彼の歴史的研究のための苦心の甚大であつたことは勿論であるが、また夫人のソフィヤ・アンドリエエヴナが、彼のために、あの讀みにくい原稿を八回も清書したといふことも記さないわけには行かぬ。トルストイはこの作を書いてゐる間はずも元気で、この作に着手した頃には第二子で長女のタチヤーナが生れたばかりであつたが、この作を了へる頃には第五子レフ（先年日本へ来た人）が生れてゐた。執筆中、思ふやうに書けた日には、夕方の食卓に出て來ても殊に機嫌がよく、今日は人生の一斷片をインキ壺へ殘して來たなどと快活さうに笑ひながら言つたりした。しかしこの作を書き了へた後は、さすがに甚だしく疲勞を感じて、「馬鹿のやうになつて」狩獵などに日を過したともいはれる。

この作は千八百五十六年の一月號から「ロシヤの報知者」に現はれ始めた。最初この誌上に公けにせられて、後別に小冊子として纏めて出版せられた最初の二巻には、「千八百五十五年」といふ標題がついてゐた。「戦争と平和」といふ題は完結して後に附けられたといふ。書物の形で出版せられたのは、第一巻第二巻が千八百六十六年に、第三巻第四巻第五巻が千八百六十八年に、最後の第六巻は千八百六十九年に、誌上の完結後間もなくであつた。ビリュコフの詳傳によると、この作は最初の出版以來千九百八年頃迄の間に、ロシヤだけで十五種の版が出来てをり、その中のある版は一版に一萬五千部を刷つたといふ。西ヨーロッパでは、一般にこの作よりも「アンナ・カリーニナ」の方が廣く讀まれてゐるやうであるが、併しこの作の完結後、千

八百七十年代の終りから西ヨーロッパの諸國で翻譯が出るやうになつた。この作に就いては、その當時のロシヤの世評はもとよりまぢまぢであつた。トルゲーニエフが、トルストイと親友であつたフェット（ロシヤ詩人）に、千八百六十六年三月及び六月に書き送つた手紙などにも、この作を随分手ひどく難じてゐる處がある。しかもそのトルゲーニエフも、第四巻の出る頃には、この作のうち未だロシヤの何人によつても書かれなかつた所があると云ひ、殊にその第三巻を傑作として推賞してゐる。また千八百六十八年にトルゲーニエフが批評家アンニェンコフに送つた手紙の中には、この作中のある部分は、トルストイを除いて全ヨーロッパの何人も書けないところであると言つてゐる。尙またこの作を非難した世評の中には、これの掲げられた雑誌「ロシヤの報知者」が保守的傾向のものであつたために、トルストイをもその主張思想に於いてその一派であるかの如くに見て、一種の反感を懷いたものもあつたのである。また、この作を愛する一派の讀者は、作中の人物の運命に就いてしきりに作者に注文を出したりした。たとへば何故ローストフとソーニヤとを結婚させなかつたか、といふやうな、よくある一般的讀者の注文である。その他軍事上の専門家の立ち場から、これにさまざまな批評が加へられもしたのである。

この作の書かれたのは、丁度トルストイの結婚生活——幸福な、待ち望んでゐた結婚生活の始まつてから間もなくであつた。一體トルストイのやうに、その内面生活がとかく激しい情熱のために亂されがちな性情の人にあつては、その激情のやや落ち着き静まつて、内に燃え立つ激情をある一事一點に集注することの出来るやうな氣分になり得たときに、はじめて藝術上の創作に従事することが出来る。彼の結婚がこの内に燃え立つ激しい力を集注せしめ得たことは勿論である。

この作が、トルストイ自身も言つた如く、精細忠實な記録史實に基くことは明らかである。作中のローストフ家はトルストイの父系の人々を、ボルコンスキー家の人々はトルストイの母方ブルコンスキー家の人々を、いづれもモデルにしたものであるといふ。即ちマリーヤはトルストイの母を、ニコライ・ローストフはトルストイの父をモデルにしたといはれる。勿論家の記録や、人の話や、トルストイのかすかな記憶などが、それ等の場合に於いて基礎となつてゐるわけである。

この作の生活内容をなすものは、ロシアの生活組織に於ける二つの階級である。一つは一般民衆であつて、今一つは貴族である。この二つは、トルストイの何れも最もよく接近し熟知するところであつて、この二つの階級の精神を表現するに、最も適當な事實は、即ちナポレオン戦争時代のロシアであつた。この作はいふまでもなく、その規模の雄大なることに於いて、その表現せられたる生活の多様にして複雑紛糾せることに於いて、ひろき限りなき時代の生活の殆ど全面に互る俯瞰圖とも見られる。しかしながら、モードも言つてゐる如く、この作には中流社會は描かれてゐない。或はこの作に描かれた時代のロシアに於いては、中流社會といふものが、未ださほど有力な要素になつてゐなかつたからであらうといふモードの説明も尤ものやうである。しかしまた、ロシアの小説家コロレンコが、そのトルストイ論で言つてゐるやうに、彼は中流社會を理解することもその生活に同感することも出来なかつたのだといふ説にも、根據がないとは言へないであらう。

この作に於いて、トルストイは明らかに、個人の力が到底歴史の運命を左右し得ざる意を説いてゐる。何百萬の人が互にころしあひ、五十萬人もの人を殺すといふことが、ただの一人の人間の意志に因由するとは

思はれない、一人の人が山を掘り崩すことの出来ないやうに、一人の人が五十萬の人を死なせることは出来ないことであると言つてゐる。ナポレオンに對するトルストイの見かたにも、クト・ゾフに對するトルストイの見かたにも、いづれもこの意があらはれてゐる。一人は運命を自から作らうとして、彼自身の一人の意志でどうすることも出来ない力の前にたふれ、今一人は靜かに萬民の心の奥の聲に聽いて、その抗ふべからざる力の前に従順であつた。——これがトルストイの歴史觀である。

トルストイも、この作を書いた當時は、まだ戦争を絶対に否定すべきものとして考へてはゐなかつた。彼が千八百六十八年に書いた「戦争と平和」に就いて數言」と題する一文の中でも、戦争はやはり避け難いもの、動物學の知識が教へるやうに必要なものとして考へてゐる。しかも、この作の正直な忠實な戦争の描寫は、戦争を否定する思想に、多大の刺激を與へるに至つた。千八百七十七年から八年へかけての露土戦争以來、「四日間」の作者ガルシンや旅順で戦死した畫家のウエリッシュチャーギンなどが、戦争否定の思想を藝術に盛るに至つたのも、その端緒をここに發するとさへ言はれる。

まことにこの作は、ひとりトルストイの作中最大の作品であるばかりでなく、ロシア文學中、また恐らくヨーロッパの近代文學中、最大の作品として傳へらるべきものであらう。即ちロマン・ロランの謂はゆる「十九世紀の小説界に君臨する巨大なる記念塔」であり、「近代のイリヤッド」である。

アンナ・カレニナ ビョートル大帝を中心としてあの時代のロシアを主題とした小説を書かうといふ考へは、トルストイが久しく抱いてゐたところであつて、そのためにはいろいろの材料を蒐集したり研究調査をしたりしたのである。しかし、千八百七十三年の春になつて、彼は遂にその一切の計畫を断念した。ビョートル大帝の性格に対するトルストイの考へかたが世間の尊崇と全く相反するものがあつたといふことも、この歴史小説を書く計畫を中止するに至つた一原因であるといはれる。要するにビョートル大帝を取扱ふことに藝術上の感興を失つたわけである。而してこの計畫を止めると殆ど同時に、取りかかつたのが「アンナ・カレニナ」である。

千八百七十三年には、トルストイの最も愛してゐた、そして母を失つて以来事實上第二の母としてトルストイを養育した、叔母のタチヤーナ・アリエクサンドロヴナ（エルゴリスカヤ）は病床に横はつてゐた。ビリュコフのトルストイ詳傳（第三巻まで既刊、第四巻未刊）によると、叔母は自分の室の長椅子に寝てゐた。トルストイの長男で、その頃やつと十歳になつたセルゲイが、大叔母にブーシュキンの物語を讀んで聞かせてゐた。トルストイ夫人ソフィーヤ・アンドリュエヴナもそばにゐて編み物か何かをしてゐた。ブーシュキンを聽きながら老婦人はうとうと眠りに落ちた。セルゲイは讀むのを止めて、その書物を開けたま

までその机の上へ置いた。丁度そこへトルストイが来た。何気なくその書物を取り上げて見ると、丁度開いてゐたのはブーシュキンの散文の中のある未完の断片で、「客人は村莊へと集り來りぬ」といふ書き出しのところであつた。それを見てトルストイは、書き出しはこの通りでなくてはならぬ、ブーシュキンこそ吾の教師である。行きなり讀者を事件の中心興味へ誘うて行く。他の作者なら一人一人の客のことや、室の事などを細々と先づ書くのだが、ブーシュキンは單刀直入に事件の中心へ入つて行くと言つた。それを聞いて、そこにゐ合はせた誰かが、それぢやあなたもさういふ風にして一つ小説を書いてごらんになつてはどうですかと言つた。トルストイは直ぐ自分の室へ閉ぢ籠つて、即刻「アンナ・カレニナ」の最初のところを書き出した。その時に書かれた最初の書き出しは、「オプロンスキー家の家の中は何もかも騒ぎであつた。」とあつたが、後になつて、いまのやうに、「凡ての幸福な家庭は互に相似てゐるが、どの不幸な家庭もそれぞれ別々に不幸である。」といふ一句を前へ書き足したのである。而してこの出来事は千八百七十三年の三月十九日（舊ロシア曆）であつた。その翌日トルストイ夫人が自分の姉に書いた手紙には、「昨日、レーヲチュカ（レフの愛稱）は突然思ひがけなく現代生活の小説を書き始めました。小説の主題は不貞の妻及びそれから起るあらゆる悲劇です。」とある。

この小説の主題となつたアンナといふ婦人の自殺のことは、事實あつた出来事である。トルストイの所領地ヤースナヤ・ポリャーナから程遠くないヤーセンキの所領地に住むビービコフといふ地主の夫人アンナ・ステパーノヴナは、その夫アリエクサンドル・ニコラーエキッチと家庭女教師との間を嫉妬し、遂に激しい夫婦喧嘩の末、夫人は夫のもとを去つてト・ーラの町へ行つてしまつた。それから三日して夕方の五時頃

彼女はヤーセンキの停車場へ姿を現はし、馬車屋に手紙を持たせて夫のビービコフを連れて来て貰ふやうに頼んだ。夫の方ではその手紙をさへ受け取らうとしなかつた。馬車屋は空しくまたもとの停車場へ返つて来た。その時には夫人はもう懺死してゐた。夫にあてたその手紙には、「あなたは私の下手人です。殺人犯人が幸福に暮らせ得るものなら、あの女と幸福にお暮らしなさい。もし私に逢はうと思はれるなら、ヤーセンキのレールの上で私の屍體を御覧になることが出来ませう。」とあつた。トルストイは一人の伯父と一緒に屍體解剖を見に行つた。この事件のあつたのは前年の千八百七十二年の一月六七日頃で、トルストイ夫人が自分の姉へあてた、一月十八日附の手紙に詳しく書いてある。

アンナとウロンスキーとの戀と並んで對照してゐる、牧歌的なキャッティとレーキンとの戀の物語にも、實在のモデルがあつた。レーキンが作者トルストイの面影として、この作全體に自傳的色彩を濃厚にしてゐるといはれるのは、既に世間周知の事實である。その精神生活の苦悶争闘、民衆の信仰のうちに眞理を求め、心など、いづれもトルストイの面影でないものはないのである。その他アンナ、オブロンスキーなども、皆トルストイの親戚や知人から、その外形や性格を描いたものであるといはれる。就中レーキンの兄ニコライ及びその死の描寫は、作者の兄ドミートリー及びその死をそのままに描いたものであるといふ。

千八百七十四年の春、トルストイは漸くこの作の最初の部分をモスクワから出てゐた「ロシヤの報知者」といふ雑誌へ送つた。しかし例の如く彼は校正で幾度も訂正を重ね、誌上に初めたのはその翌千八百七十五年の一月からで、その年の四月號までに最初の部分を、その翌千八百七十六年の一月から四月までに第二の部分を、またその翌千八百七十七年の一月から四月までに第三の部分を掲載し、最後の第八篇だけは事情

あつて「ロシヤの報知者」誌上に掲載せず、直ちに書物となつて全部として世に出たのである。かやうに飛び飛びに誌上に掲載せられるやうになつたのは、色々の原因があつた。第一に、トルストイは夏の間は殆ど筆を執ることが出来なかつた。そして秋の間に書き溜めたものは、漸く翌年の最初の四箇月間の誌上に掲げる分にしか足りなかつた。第二に、丁度「アンナ・カレニナ」の書かれてゐた間、千八百七十四年から千八百七十五年へかけて、トルストイの家庭には、生後一年半の幼児ベーチヤ（ピートル）の死、叔母クチャーナの死、生後十箇月の幼児ニコルシユカ（ニコライ）の死、その他を合せて近親に五回の不幸があつた。これ等の事情がトルストイの執筆を断続不定ならしめたのである。而して最後の部分が「ロシヤの報知者」誌上に發表せられなかつた理由は、トルストイとその雑誌の主宰カトコフとの不和にある。この作中でウロンスキーは義勇兵としてセルビヤへ出立する。當時のトルコとの戦争はスラヴ民族の救済解放の戦ひとして、ロシヤの社會は義勇軍に身を投ずることを英雄的の行動なりとしたのである。しかもこの作中でレーキンはこの義勇軍を冷嘲の態度を以て見てゐる。誠實のない上流社會の無爲からの好奇心、一種の遊びの現はれとして見てゐる。而してレーキンの見地はやがてまたトルストイの見地で、所謂英雄的な愛國心の内容に就いて、スラヴ民族救済の理想の實質に就いて、レーキンは明らかに冷嘲と疑惑との意を表明してゐるのである。而してカトコフは實に當時の義勇軍の壯舉を賛成鼓吹して、トルコとの戦争を主唱した人であつた。そこでその最後の第八篇を誌上に掲げるばかりになつてから、トルストイに右の點に就いて多少の手加減を求めた。しかしトルストイは、千八百七十七年五月二十二日、友人ストラホフに與へた手紙の中で、一行も變更する事の出来ない事を述べてゐる。しかしその手紙の中で、未掲載の分を如何やうな方法で公け

にしようか、如何にして検閲の面倒な干渉を（内容が内容であるから）避けて無事に發表しようかといふ點に就いて、ストラホフに相談を持ちかけてゐる。而して結局このストラホフの忠告に従つて、第八篇だけは別の小冊子にして、公にすることに決したのである。ベルスの記すところによると、「一雑誌記者（カトコフを指す）のくせに自分の原稿に手を入れようなどは」と言つてトルストイは激怒したといふ。トルストイのストラホフへの手紙にも、それくらゐの意氣込みは見られる。しかし、またその一面、どうかしてカトコフと話しあひをつけて、そのまま掲載させたいといふ事も言つてある。そして大變その事を氣にしてゐる様子が見られる。そこにトルストイの氣持が感ぜられるやうに思はれる。しかも雑誌編輯者のカトコフは、この小説掲載中止の顛末をありのままに讀者に報告すればよいことを、一時第八篇の原稿が編輯者たる彼の手にあつて校正刷まで出たのを利用して、千八百七十七年の「ロシアの報知者」の五月號に次のやうな文章を掲げたのである――

編輯局より。前號掲載の小説「アンナ・カレリーニナ」の終りに未完として置きましたが、女主人公の死とともに實は小説も終つたのです。作者の計畫では、尙短かい終末篇が三十ページ内外もあつて、ウロンスキーがアンナの死後苦悶と悲痛の中に義勇兵となつてセルビヤへ出發すること、その他の人物は凡て無事で健康であるが、ただレーキンは自分の村に止つて、スラヴ民族委員會や義勇兵に對し憤激してゐるといふことなどを、讀者が知られる筈であつたのです。作者は或はこの小説の單行本にそれ等の數章を添加するであります。

「アンナ・カレリーニナ」がロシアの反動的な社會即ち保守的な社會からは歡迎せられ、進歩的な社會から

は冷やかに受け容れられたといふことは、クロポトキンの「ロシア文學の理想と現實」の中にも書いてある。凡そ結婚後の男女が、眞の愛のない結婚を繼續することを以て、當事者二人のためばかりでなく、二人の間の小兒のためにも正當としたい場合のあることは明らかである。ロシアの進んだ社會では、眞の愛のない夫婦關係の繼續を否定する思想が可なり明白に表現せられてゐる。この場合、アンナがこれまで自分の愛しなかつた夫を捨てて、眞に相愛するウロンスキーに往くことは、虚偽を排する本性から見れば唯一の道である。随つてアンナの悲惨な死は彼女の所業に對する至上法の裁きによるのではなくして、ウロンスキー及びアンナ自身の勇氣の終始一貫してゐなかつたためである。俗世間の批評を無視して夫を捨てたアンナが再びそのつまらない俗世間の批評のために氣迷ひをするに至つたからであつた。それが神の掟のために死を與へられたのではないことは明らかである。トルストイは、さすがにこの間の消息を描いてゐるのであるが、新しい眞の愛が否定せられ罰せられたかの如く見たところに、この作に對する進歩せる社會の冷淡な態度が生じたのであつたらう。トルゲエフが詩人ボロンスキーに送つた手紙で、この小説が何となくモスクワくさく、聖膏くさく、老嬢くさく、スラヴ國粹派くさく、貴族くさいと言つてゐるのも、要するにこの愛と結婚との問題に關してこの作を保守的傾向のものを見たからであつたらう。

モードの記すところによつても、この作は、ロシア以外に於いては、「戦争と平和」などよりさへ一般に知られてゐるといふことである。この作が「戦争と平和」よりも一般の小説の様式を多く具備してゐることもその一つの理由であらう。アンナといふ女主人公の外に、トルストイの面影を彼の作中で最もよく現はしてゐると言はれるレーキンといふ特殊の人物の描出といふことも、この作の著しい特色を成してゐること勿



論である。イギリスの批評家マッシュュー・アーノルドの有名なこの作の批評は、夙にイギリスにトルストイを紹介してゐる。またアメリカの批評家ホウエルズの批評も、トルストイをアメリカに紹介する先聲であつたばかりでなく、この作の批評中アーノルドのと並んですぐれたものである。この作全體を通じての「驚くべき豊富」さ、さまざまの人物の潤澤に描かれてゐること、しかもそのいづれもが的確なること、これ等に就いてはロマン・ロランも言つてゐる。その最後の第八章に就いて、やや露骨に、後の時期に於いてトルストイの力説主張した思想が現はれてゐることなどもあるが、とにかく所謂彼の三大小説の一たるを失はない大作である。

—

トルストイの死後に出版せられた文藝上の作品三巻　トルストイの遺稿と稱せられて普通世間に傳はつてゐるものは、正しくは「その死後に公けにせられたトルストイの文藝上の作品」三巻の事である。その中第一巻と第二巻とは千九百十一年に、第三巻は千九百十二年に出版せられた。これが編纂の責任者はトルストイの友人であり弟子であつたチュルトコフで、出版の責任者はトルストイの末女アリクサーンドラ・リラヴナである。これはすべてトルストイの遺言によつたのである。最初の版は豫約出版の方法によつて發行せられ、出版發賣に就いてはモスクワの大書肆スティンが商賣氣を離れた非常な好意を以て面倒を引き受けたので

あつた。

この謂はゆる「遺稿」の原稿の第一巻を見ると、その扉の裏側に、この書の翻刻出版乃至この中に收められた戯曲の上演がすべて無報償で許される旨が最初に掲げ記してある。而してその次に、この書の出版が亡父トルストイの意志によつてアリクサーンドラ・リラヴナによつてなされたこと、その出版からの純益はトルストイの意志に従つて使用せらるべきこと、出版者は翻刻出版の自由を禁ずる権利は保有してゐないけれども、この出版から得られる特別の使途のための純益の能ふかぎり多からんがために、この書の内容の翻刻乃至上演に就いてこの書を利用せんとせられる出版者その他の人々に向つて、この書の原稿の完結即ち第三巻の出版せらるべき千九百十二年六月五日から計算して半年の間だけは、翻刻出版を遠慮し猶豫して欲しいといふことなどが、アリクサーンドラ・リラヴナの名によつて記されてある。

第三巻の末尾にチュルトコフの書いてゐるところによつて見ると、この書の出版後多くの出版者は右の出版者の希望によつて翻刻を控へてゐたやうであるが、それでもだんだんこの原稿（豫約出版であつただけに、用紙もよく、大形で、珍らしいトルストイの寫眞なども二十面ばかり挿入してある）よりもずつと廉價な縮刷版ともいふべきものが出来来るやうになつたので、原出版者の方でもやがて縮刷廉價版を出す事になつた。それにはたしか編纂者の解説や寫眞などは省いてあつたと記憶する。原出版の世話を引き受けたスティンでは、勿論自分の店から翻刻版を出すことは全然見合せたのであつた。

チュルトコフ第一巻の序、第三巻末尾の文などを見るものは、この謂はゆる「遺稿」がトルストイの遺して行つた藝術上の作品としても全部ではなく、またこの版の中に收められたものだけに就いて見ても十分な

校訂を経ることの出来なかつたもののあることを知るであらう。トルストイは、その晩年の二十五年間といふもの、一切の自己の述作は、その出版に就いても、その原稿の保存に就いても、すべてこれを前記のチュルトコフに委託して来たのである。チュルトコフがイギリスにゐるときには、わざわざイギリスまでその原稿を郵送してまでも、その保存かたを託してゐたのである。而して前にも言つた通り、トルストイはその遺言に於いて、すべて自分の書いたもの——已に出版せられたものもまだ出版せられないものも、藝術上の作品も論文も、断片も手記も、日記も書簡も、一切の心覚えの手帳も、未完のものも下書きも、而して又それ等の書かれたものが現在何人の手に保存せられてゐようとも、それ等に拘らず、一切をあげてその所有出版の全權を末女アリ・クサーンドラに委託し、またそれ等一切の編纂校訂に就いては、すべて、これを前記のチュルトコフに委託したのである。而もトルストイ夫人ソフヤ・アンドリ・ヴナは、このトルストイの遺言に反いて、たまたま自分の保管の下にあつた多くの書簡を、アリ・クサーンドラに引き渡すことを承知しなかつた。たとへば千九百年にいたるまでのトルストイの日記なども、どうしてもアリ・クサーンドラへ引き渡さないもの一つである。この間の消息に就いては、トルストイの晩年の生活に少しく通ずる人の大抵想像し得るところであらうが、トルストイ死後今日に至るまで、唯一の譽りをトルストイに近しい人々の上に投げてゐる有名な事實である。この謂はゆる「遺稿」が不十分なものであるといふチュルトコフの言葉のうちにも、未亡人に對する感情が覗はれる。彼は勿論夫人の名前を記してゐないけれど、トルストイの遺志を實行すべき筈の人がそれを實行しないために、これ等の不満足不便が生じてゐると言つて、明らかに夫人を難するの意を洩らしてゐる。而してまた、夫人の立場から言へば、トルストイを晩年自分から奪ひ去

つたものは他ならぬこのチュルトコフであつて、彼こそ即ち夫人の謂はゆる悪魔である。この邊の消息に就いては、この中に收められた「光りは闇にも耀く」に作者の自傳的要素が多く含まれてゐて、讀者をしておのづから思ひ當らしめるものがあるであらう。而してこの謂はゆる「遺稿」に收められた作品が、何故トルストイの生前に公けにせられなかつたかといふ點は、もとより今日では明らかではないが、そのあるものは檢閲の關係から、またトルストイ自身の都合から、發表を憚つてゐたものもあるであらう。而して未完の断片などが公けにせられなかつたのはもとより説明を要しないところであらう。

原版では、「悪魔」から「生ける屍」までの七種がその第一巻に收められ、「神父セールギー」から「光りは闇にも耀く」までの七種が第二巻に、「ハチ・ムラート」から「思ひがけなく」までの十二種が第三巻に收められてあつた。

譯 覽 千八百八十九年の作で、トルストイ自から「一氣呵成の作」と稱したものである。その後自から多少の訂正を加へ、またその物語の末尾を書き改めたりした。

譯 覽 千九百三年から千九百四年にかけて書かれたもの。最初は悪魔がむやみに度々出て来たのであつたが、それが却つてこの作を軽く不眞面目なものにするところから、すべてさういふ場所を削除してしまつた。

舞臺會の後 千九百三年の六月の初め頃に思ひついた作で、有名なキシニユフのユヂヤ人虐殺の慘害を救済慰問するための文集へ收めるためであつたのであるが、その文集へはこれと殆ど同時に書かれた「三つのお話」が與へられ、この作はそのまま筆に上せられず、その年の八月八日か九日かになつて、一日で書き上

げられたのであつた。最初の標題は「娘と父」となつて居り、それから幾度も書き改められて、中程では、「あなたのお話しでは」となり、最後に「舞踏會の後」となつたのである。

『夢のアリヨシヤ』 千九百四年の作である。極めて短い小話に過ぎないが、恐らくこの「遺稿」の中でも最もすぐれたものの一つであらう。トルストイの晩年に至つて殊に圓熟した簡潔素朴にして味ひの豊富な作風の結晶であるともいへよう。ロシアの現代の批評家アイヘンワリド氏がトルストイの「遺稿」を批評した小冊子の中で、「自然の事實、この世の生ける現實」と言つてゐるのはこの一品である。トルストイの作風が簡素な力に特色を有することはこの作に限らぬところであるが、殊にこの小品は味へば味ふほど人間味の豊かなものである。

わが夢に見しこゝ 千九百六年の作。この物語の中には少しも夢のことは書いてない、しかし、作者が實際夢に見たことを書いたのがこの物語の内容で、夢からさめて急いで書いたものであるといふ。

凡ての悪性は酒から 千九百十年の春ティューリヤーティエンキのチュルトコフの村莊で、チュルトコフの子息や村の若い衆たちが一緒になつて、素人芝居を催したことがある。その時、トルストイが前に書いた「最初の醜造者」が上演せられた。トルストイはこの素人芝居に興味を感じて、新たにこのティューリヤーティエンキの芝居のために一篇の戯曲を書く氣になつた。そしてこの作が出来た。

生ける屍 千九百年の作。最初はモスクワで、次ぎには、トルストイの兄弟セルゲイ・ニコラーエキツチの村莊ピロゴフで、最後にはヤースナヤ・ポリャーナで書かれた。この作の原本は四種類あつて、チュルトコフ編纂の原版には、この四種を比較して校訂したものが收められてある。第一はトルストイの自筆の最初

の原稿、第二はそれによつて淨寫したものにトルストイが更に筆を加へたもの、第三は右の第二のもの後、更に別にトルストイの訂正改竄、乃至多くの書き足しなどのあるもの、第四は右の第三のものから淨寫したもの。最初の原稿ではこの作は單に「屍」といふ標題になつてゐるが、右のうち第三のものから始めて「生ける屍」となつてゐる。チュルトコフの記すところによると、この新しい標題は何れもトルストイの二人の令嬢マリヤ及びタチヤーナの筆で書いてあるので、この人たちがトルストイの作品に對する平生の態度から考へても、この新しい標題は勿論トルストイ自身の意に出たものであることは疑ひない。この作の主題となつたのは、當時のモスクワ區裁判所長ダウイドフがトルストイに話した一つの事件である。この事に就いては、前記のダウイドフが書いたトルストイの戯曲に就いての追憶記（千九百十一年一月二十三日トルストイ記念會の際モスクワ文藝俱樂部に於いて朗讀したもの）の中の「生ける屍」に關する一節が最も詳細に説明してゐる。（『トルストイ追憶記集』ツラトツウエート出版）その要點を記してみると、

ある町に何某といふ夫妻が住んでゐた。知識階級の家庭で、夫は何かの職務に就いて居り、妻は家事に専心してゐて、その間にたしか一人の息子があつた。元來夫は善良な物靜かな謙遜な細君思ひの人であつたが、ふとした事から飲酒の癖に陥り、遂に病的にさへなつて、その職務にも離れるに至つた。もとより多くの貯へもないので、一時一家は苦境に瀕したが、細君はしつかりもので、自からすすんで鐵道の書記か何かになり、官宅を給せられて息子と共に移り住むことになつた。夫はその以前既に家出をしてゐたのである。勿論妻子を愛せぬためではなく、自分のゐることは妻子の爲めに何の役にも立たぬばかりか却つて不利益と考へて、自から決心して姿を晦まし、全く世間のどん底へ沈んで行つた。そこで僅かばかりの

頼まれ仕事などをしながら、饑と飲酒との生活を送つてゐた。かうして何年か久しく経るうちに、もの靜かなやさしい氣だての細君は、自分の役所の同僚の一人と親しくなり、相手はこの細君を寡婦とばかり思ひ込んで結婚を申し込んで来るに至つた。細君の方でも勿論戀はあつたのであるが、自分が實際は有夫の婦である實情を打ちあけて心ならずもこの申込みを一應はことわつた。そこでこの二人の間には家出した夫との離婚の相談が持ち上り、その最初の夫とも話し合ひの上、ロシアの離婚法が要求する通りに、この離婚に就いての一切の曲はその最初の夫が一身に引き受けることにきまつた。離婚訴訟は宗務事務局へ提出せられた。しかしいろいろ故障が起つて、事件は捗らず殆ど正式の許可の見込はなさうになつた。その場合誰が思ひついた考へであつたか、その最初の夫が事實上ではなく法律上存在しない人間といふことにさへなれば、右の婦人の第二の結婚は故障なく正式に行はれるであらうといふことが言ひ出された。最初の夫はもとより既にこの問題の起るに先だつて自から水底の死人となつてゐたのであるから、この考へに異存のあらうわけもなく、細君に向つて永訣の手紙を認め、過去の罪を謝し、川に投身して果てるといふ意味を書き添へた。細君はこの手紙を持つて警察へ訴へた。もとより夫の所在は久しく分らないといふことにして。警察では先づこの町の近傍を搜索してその近くを流れてゐる深い川の岸に、何者のとも知れない男子の衣服が脱ぎ棄ててあるのを発見した。その外套のポケットには件の最初の夫の身元保証書（ロシアでは丁度外國旅行免狀のやうに、國內居住者も各人すべて常に身元保証書を所有してゐて、國內旅行の宿屋に泊つたときでも、人の雇入の場合でも、すべて必要な場合にそれを提出し、これに官憲の證明などを書き入れることになつてゐる）があつた。これによつて愈々最初の夫の投身自殺といふことは信ぜら

れるやうになつた。そこへ偶然にも、間もなくその同じ川から衣服を着けてゐない男子の屍體が引き上げられ、細君等によつて最初の夫に相違ないといふことが確められるに至つた。しかしその際、その屍體の発見せられたのが、脱ぎ棄てた衣服の発見せられた場所よりは上流の方であつたといふことは、何人も氣が附かなかつたのであつた。第二の結婚は許され、細君には新しい身元保証書が下附せられた。鐵道の方の勤務は二人とも前の如くで、新家庭は幸福であつた。最初の夫はその様子をひそかに知つて、自分の前の妻がやつと幸福な落ち着いた生活に入つたことを心から喜んだ。しかし最初の夫の飲酒癖から、はからずもこの幸福は破られるやうになつた。ある時彼はその家なしの仲間としたたかに飲んだ末、何かの事の人々は彼を嘲笑した。彼は酔つたまぎれに己を誰だと思ふ、馬鹿にするなといふやうなことを言つた。仲間のもの等は、フン、何でもない、飲んだくれさと言ひ返した。彼はその調子に激せられて、平生隠しに隠してゐた自分の秘密を自分からぶちまけてしまつた。お前がたは知るまい、己れは屍體だ、溺死人だ、とうくに葬式をして貰つた人間だぞと叫んだ、そこにゐ合はせたある男が、萬一さういふことなら捨てて置けないといふので、ゐ合はせた酔つばらひの仲間が皆で彼をその場から警察へ引き摺つて行つた。そして、彼は溺死を偽つた脱獄者であると言ひ立てた。彼には前の溺死を偽つた時から身元保証書がなくなつてゐた。忽ち彼は拘禁せられた。彼はそれでもまだ醉がさめきらないで、自分が屍になつた筋道を喚きちらした。彼は告訴せられた。彼は自分の妻をして他人に嫁せしめた廉で、細君は夫の生存中に別に結婚をした廉で、二人とも一切の特権を剝奪せられ、四年乃至五年の刑罰を受けねばならないかと思はれたが、結局裁判官から皇帝への哀願などさへあつて、二人は刑罰を免ぜられることになつた。

この事件の顛末は大略以上に盡きる。以上の事實は一面飲酒が如何に多くの禍を生ずるかといふことを示すとともに、他面現行の一切の裁判制度が如何に不十分で不自然でまた不必要でさへあつて、その制度の目的を達しがたいものであるかといふことを示してゐる。ダウイドフは自からこれ等の點に感ずるところあつて、この事件を詳しくトルストイに物語り、トルストイは非常な興味を以てこの事件を主題として戯曲を作つたのがこの「生ける屍」である。而してこの戯曲の原稿を淨寫する人の口から、トルストイが現にこの事を主題とした戯曲の執筆中であることが新聞によつて傳へられた。その結果として一人の未知の人がトルストイを訪問して來た。二人きりになると、彼は自分がその「屍」の本人であることを名のり、自分のこれまでの生活に就いて詳しくトルストイに語り且つ懇へたのである。トルストイがこの「屍」の本人の物語によつて深く感動したことはいふまでもない。それによつてトルストイは、今まで書き上げた戯曲に少からぬ改竄を加へた。この會見の結果「屍」の本人は、今後全く酒を禁ずる旨をトルストイに誓つた。トルストイもこの氣の毒な善人のために、自分の友人たちの力をかりてある職業を見つけてやつた。そこで彼はそれから後永年の間無事に勤め、またその死に至るまで遂に誓を守つて酒を用ひなかつたといふことである。

この作が初めてモスクワの藝術座の舞臺に上つたのは、千九百十一年の秋から千九百十二年の春へかけての季節の最初に於いてであつた。この作及びその他のトルストイの未刊の戯曲の上演の権利は、アリ・クチャ・インドラ・リフヴナによつてモスクワ藝術座に與へられ、藝術座は各回の上演から得る收入の一刻をトルストイの志を成すための財團に向つて拂ふ事になつた。尙別に藝術座は一萬ルーブリをその財團に寄附した。この事に關しては、出版上演の自由を許した筈のものをモスクワ藝術座が獨占するといふので、新聞などの

非難が甚しくなり、藝術座の當事者ニ・ミロウ・イチ・ダンチュ・ニコ、スタニスラウスキの二人は勿論、トルストイの原稿の相續人即ちアリ・クチャ・インドラ・リフヴナ及びチュ・ルトコフまでも世間の非難的となつた。その實、モスクワの藝術座が一定の期限以前に於いて先づこの戯曲を上演するといふ義務を負ひ、その期限以後に於いては「生ける屍」が公刊せられる事になるので、勿論上に述べて置いた通りどこの劇場で上演しても差支へないといふことに過ぎなかつたのである。即ち「遺稿」の公刊に於いて、道義上世間一般の矚目を一定の期限後半年を経てからにして貰ひたいと言つたことを、戯曲の上演に適用した次第に過ぎなかつたのである。その後一年を経て、更に次の季節のために藝術座がこの戯曲の上演の準備をしてゐる折、またもやこの戯曲の標題をモスクワ藝術座が濫りに改めたといふので新聞の非難が起つた。即ち原作にはたゞ「屍」とあるのを、勝手に「生ける屍」と改めたといふのであつた。この非難の不當なことは既に述べたところによつて明らかであらう。而してまた最後に、トルストイ自身が、この戯曲の内容に就いて、他人の構想を私したものであるといふやうな非難を公表したソロキ・フといふ人が出て來たりした。そしてまたこの言ひがかりを信じて、とやかく言ふものも世間にはあつたのである。メレジュ・コーフスキーが、ロシヤ文學がいかにこの種の穢さから察られることの少いかを歎じたのもこのためであつた。しかしこの種の穢さ醜さは遺憾ながらロシヤばかりのことではない。モスクワ藝術座は、これ等の非難に答へることを以て自から卑しくする所以であるとして敢て答へなかつた。モスクワ藝術座がいかにトルストイを愛し且つ尊敬してゐるかは、その舞臺によつて如實に示された。「トルストイは死んだ、しかも彼は生きてゐる」といふのが世評を一貫する心持ちであつた。

神父セールギー 千八百九十年の春から夏の頃の事である。チュルトコフがトルストイを訪問した際に、トルストイは一人の修道僧の生活を題材にして書くつもりだと話した。チュルトコフはトルストイが藝術上の創作に興味を持つことを常に喜んでいたので、今度もトルストイが自分の藝術上の創作をつまらぬことと思つたりしないやうに、いろいろ言葉をつくして勧めた。チュルトコフは、かねてトルストイが自分の腹案を人に話してしまふと、もう筆を執つて書く興味を失ふ癖のあるのをよく知つていたので、さういふことからこの題材をそのままにするやうなことをないために、その話を今後は人に話さぬやうに、そして今後自分にくれる最初の手紙にその物語を書いてよこしてくるやうにトルストイに頼んだ。かうすれば自然トルストイがこの題材を筆にするやうになるであらうと、チュルトコフは考へたのである。このチュルトコフの希望は實現せられて、トルストイは果してそれから最初の手紙に於いて、後に「神父セールギー」と名付けられたこの物語のあらましを書いてよこした。チュルトコフはそれを丁寧に淨寫した。そしていつも彼がトルストイの淨寫の折にするやうに、あとで更に書き入れたり削つたりすることの出来るやうに、行間を出来るだけあけて書いた。そしてそれをトルストイ自筆のものと一緒にトルストイに送り返した。尤も今一つ別に控へを取つて自分の手許に残して置いた。トルストイは淨寫せられた梗概を受け取つて更にこの題材に新しい興味を感じ、千八百九十年六月十一日チュルトコフ宛てた手紙に、「神父セールギーの物語は私の心を牽く。アリ・クセーフの序文を書き了へたから、これからのあの物語にかかります。大變おもしろいかも知れません。」と言つてゐる。しかし丁度その頃無抵抗主義思想に就いてアメリカのハリソンなどの書いたものに驚喜の情を寄せるやうなことがあつて、一心になつてこの物語にかかるところまでは行かなかつた。その

七月、チュルトコフは更にあらかたでもこの物語を書き了へてしまふやうに懇願の手紙を出した。トルストイは七月二十八日附の返書で、後に「神の王國は汝等のうちにあり」となつた一論文（即ちハリソンなどの著書の序文）のために、その物語を書くことを怠つてゐたのであるが、或はその論文は長くなりさうであるから後廻しにして、先づあの物語を書き上げたいと言つてゐる。しかしやはり一心にそれにかかりはしなかつた。しかしこの間中も絶えずその事は考へてゐたと見えて、散歩の前にも離さなかつた手帳にも、八月五日のところ細い様々の點に關する腹案が書いてある。しかし千八百九十年から千八百九十一年へかけての冬の間は、トルストイ自身藝術上の創作よりも重大必要と考へた別の諸論文のために、物語の方が出来上らなかつた。千八百九十一年二月十七日チュルトコフへの手紙には、「私のあの物語をのびのびにして來たのは、あれが私にとつては大變大事なものであるからだ。」ともある。千八百九十一年の處になつて、初めてトルストイはこの創作に専心取りかかつた。最初の下書きの廣くあけられた行間には大分書き入れられた。それから年を経て、千八百九十八年、例のド・ホポール宗徒を外國へ移住させる爲の資金を助ける目的で、先づ「復活」が書かれたが、尙何か他にその爲に出版してもよいものはないかと考へた末、先に未完のまま置いてあつた「神父セールギー」の事を想ひ起し、千八百九十八年六月十二日、この物語の終りを書き初めた。それから約一箇月の間は一心にこれにかかつた。その頃の日記には隨處にその勞作のさまが見られる。千八百九十八年七月十七日の日記には「復活」と「神父セールギー」とをド・ホポール宗徒救済のために出版する事に決した旨が書いてあるが、實際は「復活」だけが公にせられた。この頃の覺え書きの中には、「人間に交つて俗世間的の目的の爲に生活するものに安心はない。精神的の目的の爲にただ一人生活するものに

も安心はない。安心は、人が人間に交りながら神の奉仕の爲に生活するときのみある。」とも書いてある。この作の題材の出所に就いてはかういふ事實を語る事が出来る。千八百七十七年の夏、トルストイはストラホフとともに、初めてカールガ縣の有名なオーブティン修道院を訪問した。そこで知りあひになつた修道僧のうちに、以前近衛の士官であつた人がゐた。その後幾度か繰り返されたトルストイのオーブティン修道院訪問は、やがて数年後に書かれたこの作に、多くの材料を供給したにちがひない、とはモードもまた記してゐるところである。

子供の智慧 この小話のうちには、トルストイがほんの心覚えのために書いて置いた下書きに止まるものもある。その頃トルストイの秘書であつたニコライ・グセフの書いた「トルストイの二年」といふ書の、千九百九年一月十五日の條下に記すところによると、キーンで發行せられる「アールスタンド・フェール・アル」といふ新聞に、小兒と父との問答の形に眞面目な思想を託してゐる對話が出てゐたが、トルストイはこれを翻譯し、更に自らその形式を用ひて人生に關する眞理を表現してみようといふ氣になつた。そのためいろいろな豫定の題目が書き出された。即ち一、宗教に就いて。二、戦争に就いて。三、祖國——國家に就いて。四、租税に就いて。五、飲酒に就いて。六、善に就いて。七、勤勞の報酬に就いて。八、牢獄に就いて。九、刑罰に就いて。十、富者に就いて。十一、裁判に就いて。十二、新聞紙に就いて。十三、藝術に就いて。十四、科學に就いて。十五、民法に就いて。十六、刑法に就いて。十七、調育に就いて。十八、勞働者に就いて。十九、狩獵に就いて。二十、肉食に就いて。二十一、都會に就いて。二十二、教會に就いて。二十三、聖者の遺骸に就いて。二十四、七つの聖禮に就いて。二十五、古代を崇敬することに就いて。二十

六、遊戲に就いて。二十七、教育に就いて。二十八、權威の壓迫に就いて。二十九、土地に就いて。三十、無職者に就いて。三十一、神に就いて。

世界に譯あるものはなし 千九百八年頃から腹案はあつたが、千九百九年、千九百十年と續いて書き、遂に未完のままに残つたものである。千九百十年九月二十四日の日記にもこの作のことが書いてある。この作の第四章の終りにイ・ゴールに送つた父親の手紙があるが、この手紙はトルストイが偶然手に入れた實際の手紙であるといふ。異本がある。

兒童のための物語 千九百十年の八月、スホーティン家に嫁した娘のタチャーナのところに客となつてゐる時、孫たちに話してきかされた即興の童話である。そこにゐ合はせたアリ・クサーンドラ・リヲヅナが即座に速記して、トルストイがただの一度だけ手を入れたもの。

デーホンシマニヤ イデイリヤ 内容から見るとまじめに見るべきもの。千八百六十二年以前に書かれたといふ以外確な事は分らない。アリ・クサーンドラ・リヲヅナの手に入つたのも、トルストイ自筆の原稿ではなく淨寫したもので、誤寫の有無も不確かであるといふ。この二種何れにも異本がある。イディリヤは牧歌の意である。

光は闇にも輝く 八十年代に書き始められて、未完のまま久しく打ち捨てて置かれ、千九百年代になつて漸く再び続けられた。千九百年から千九百二年の間のことである。第五幕はほんの簡単な筋書きしかのこつてゐない。眞にトルストイの仕上げをしたのは第一幕だけであらう。ロシア原語版では檢閲による多くの削除がある。全體の分量から言つて三分の一以上も削除せられたといふ。第三幕に於いて殊にそれが甚しい。つ

まり第五幕は全く書かれてゐないわけである。トルストイの筋書によると、第五幕は三場から成り立つ筈であるが、ロシア原版には第三場の筋だけを書いてある。それをそのままに引いてみると、

マリーヤ・イワンナ醫者と病氣の話をする。彼は變つた。親切になつた。しかし意氣沮喪してゐる。ニコライ・イワヌィッチが入つて来る。醫者と話す。醫者は無益、靈感こそ尊けれ。しかし妻のために承諾する。ドゥーニャはステューバと、リュューバはスタルコフスキーとはひつて来る。土地の話、彼は嘲侮すまいとつとめる。皆去る。彼はリーザンカと残る。「よくしたかどうかいつまでも迷ふ。何もしなかつた。そしてボリスは失つてしまつた。ワシーリー・ニコノロキッチは歸つて来た。私は——弱さの適例だ。神は私がその下部であることを欲せられないに違ひない。神には多くの他の下部がある。私になければ彼等がするであらう。これがはつきり分つてしまへば——安心する。」彼女は去る。彼は祈る。公爵夫人が躍り込んで来て彼を殺さうとする。皆驅けつけて来る。彼は、それを自分がつい何氣なくしてしまつたのだと言ふ。皇帝に哀願書を書く。ワシーリー・ニコラエキッチ、ド・ホポール宗徒を伴ひ来る。欺罔は破れ、彼の生活の意味が自分に分つて来たことを喜んで死ぬる。

「遺稿」のうち第一巻よりも第二巻に於いて一層多くトルストイの心の奥に觸れることが出来るといふ批評がある。トルストイの日記とともに、それにもまさつて彼の生活を説明するものがこの第二巻に多いといふ。就中「神父セールギー」と、この「光りは闇にも耀く」とがそれである。前者が人間の心の奥底を深く透察した作品として見られるとするなら、後者は未完の作でもあり、藝術品としては大分前者に劣るものであらうが、トルストイの生活そのものを解する一つの鍵として意味深き作品であるといはねばなるまい。前者に

於けるカサツキ即ち後の神父セールギーは、直ちにトルストイの面影を描いたものとはいへないが、殊にセールギーが自分の姿を隠してしまはうとして、いろいろ工夫したり躊躇したりするあたりの敘寫は、トルストイ自身の告白の如き感じさへある。俗世間の生活を脱しようとする心持とその煩悶とは「世界に罪あるものはなし」にも見られるが、「光りは闇にも耀く」のサルインツェフの心持は、家出のトルストイの心持ではないか。それを歎き恨む妻はトルストイ夫人であり、サルインツェフの道づれは、トルストイ夫人が夫と自分との仲を離間した悪魔とまで憎み恨むチュルトコフではないか。

ハチ・ムラート 千八百九十六年七月十九日、トルストイの兄弟セルゲイ・ニコラエキッチのピロゴフの村莊に客となつてゐる時の日記に、散歩の折に見た、路傍に生えてゐる埃まみれの蘇の花の事が書いてある。三本の残り咲きの中の二本までは折れて汚れて枯れかかつてゐる。唯一本の花だけは埃に汚れて傾いてゐながらも生きてゐて、花の心が赤らんでゐる。それを見てトルストイはハチ・ムラートのことを想ひ起し、せめて彼を主題として物語を書かうと思ひ立つた。「最後まで生命を固持してゐる。野原一面の中でただ一つであるが、どうなりかうなりして、やはり生命を固持して来た。」トルストイは書いてゐる。ハチ・ムラートに對するトルストイの興味は先づそこにあつたのである。ヤースナヤ・ポリャーナへ歸ると、彼は千八百五十年代の自分のカフカズ地方に於ける記憶を新たにし、ハチ・ムラートに關する物語と關係のある出来事を知ることの出来るさまさまの書物を読み始めた。

その八月、彼の妹のマリーヤ・ニコラエツナのゐるシャマルディンスキー修道院へ赴き、そこで最初のざつとした下書を了へた。それから千八百九十七年の春頃は熱心に必要な記録史料などを人に頼んで集め始



めた。ハチ・ムラートの特色として信念の欺罔といふ點を重大と視るべき事などが日記に書いてある。同四年十月十四日の日記には、この作の色々の場面に描くべき細かい點の心覚えが書いてある。即ち一、山の急坂を鷲の影が走ること。二、川原の砂上に野獸、馬、人間などの足跡。三、森の中へはひりながら馬が勇ましく鼻息を吹く事。四、道ばたの木立の中から山羊が跳ね出す事、などとある。千八百九十八年の春頃もやはりこの作のことを考へたり、少し書いたりしてゐた。それから暫く間を置いて、千九百一年の初めに再びこの作に取りかかった。千九百二年病をクリミヤに養ひつつ、この作のことを考へてゐた。その年の八月頃から、この作中にニコライ一世のことを書くために、ニコライ一世に關してさまざまの方面の人々に尋ね合せたり資料を送つて貰つたりし始めた。ニコライ一世の平生、周囲との關係、性格などに就いて、彼が叔母のアリ・クサーンドラと取りかはした數通の手紙は、スリ・ーズニ・フスキー及びベム共編のトルストイ雜纂に收めてある。またハチ・ムラートに就いて詳細な多くの史料をあつめることに如何に執拗な努力を惜しまなかつたかの事實は、自から資料の蒐集筆寫等に盡力したシ・ル・ギンの追憶記に明らかである。これ等の熱心な根氣のよい研究が、すべて作中の極めて微細な二三の箇所のためであつたのを思へば、トルストイの苦心の非凡なりしことが察知せられるのである。かやうにしてこの作から全く手を放したのは、千九百四年の夏頃であつた。その年の七月、この作の淨寫原稿が當時イギリスにゐたチェルトコフに送られた。この稿本と今一つの淨寫本とによつて現行の本文は編纂せられたのである。

二人の遺づれ 千八百七十年代の作である。原稿には標題がなかつたので、「遺稿」編纂者チェルトコフが假りに附けたのである。

狂人の日記 千八百八十四年の作。

裁判所に就いて 千八百九十一年の作。

母の物語のはしがき 千八百九十年代の作。

母の手控へ 最初は若い娘の日記風に書いてその結婚の取定めるところまで書き、原稿にトルストイ自ら「だめなり。自分の心から書かねばならず」と記し、標題を「母」としてまた別の形で書き直し、或は物語風に、或は女主人公の日記風になつてゐる。勿論未定稿として見るべきもの。千八百九十一年の作。

神父ワシリー 千九百六年の作。

殺人者は誰 この標題は作者の附けたものではない。最初物語風に書き出し、中途でところどころ戯曲風の形に書き直した。作者自から原稿に記した章の分け方の様子から見ても、戯曲風に書き直したところも後に更に物語風に書き改めるつもりであつたらうといふ。チェルトコフ編纂の「遺稿」に收めたものは、十六章を含む原稿の僅かな一部分に過ぎない。千九百八年から千九百九年へかけての作。

正修道僧イシオドル 作者の原稿には全體で十二章に互る大體の筋が書いてある。千九百九年の作。

ハドインカ 千九百十年二月二十五日の作。

思ひがけなく 千九百十年六月二十日の作。

トルストイの書簡及び日記は、今日に至るまで、まだその全部を出版せられてゐない。書簡のはうはセルゲ・ンコの編輯に係る書簡集が三冊（第一集は千九百十年、第二集は千九百十一年、第三集即ちトルストイ新書簡集と題するのは千九百十二年の出版）と、『トルストイ博物館』と題する別の書簡集が二冊、トルストイ夫人にあてた手紙計りを集めたものが一冊、すべて六冊で、細字約二千三四百ページに上り、その手紙の数は概算千五百もある。その他、トルストイ博物館の年報（千九百十一年から千九百十三年まで）その他に折々発見せられるに従つて採録せられた別の手紙をも加へたなら、既に世間に出てゐるだけでも夥しい数である。日記は既刊の分すべて二冊、一つは千八百九十五年から千八百九十九年に至る日記、今一つは千八百四十七年から千八百五十二年に至る日記で、後者は特に「トルストイの青年時代の日記」と題してあり、その第一冊である。これ等の日記はすべてチュルトコフの編纂校訂に成り、前者は千九百十六年、後者は千九百十七年の出版である。

日記と書簡とがトルストイを知る上に極めて貴重な資料であることは言ふまでもない。讀者はこれ等に於いて最も親しくトルストイの生活の内部に觸れるであらう。メレジュコフスキーの論文「日傭人としてのトルストイ」は、トルストイの日記の批評として出色の文字とせられてゐる。



### 第三編

### ドストイェフスキーに就いて

どんな人間でもその性格に皆多少の矛盾を有つてゐる。そしてその矛盾のために多少とも苦しみ悩んでゐる。そしてその矛盾の苦しみの烈しければ烈しいほどその求めてゐる統一に達することの困難であるのは勿論だが、同時にその大いなる矛盾は大いなる統一を豫想するものであるといへる。人の一生の幸不幸は、性格の矛盾の大小によつてきまるわけではなくてその矛盾がどれだけ統一せられつつ進んで行つたかといふことによつてきまる。また人の大小は、その矛盾の奥にそれを統一する人格の力がどれだけ力強く潜んでゐたかによつてきまる。トルストイのやうな人はこの意味で不幸な人であつたとは言へるが、しかし彼は大きな人であつた。あれだけの永い強い悩みに持ちこたへた力といふものは、彼の一生のあらゆる事業や著述や、一切の表に現はれたもの以外によつて、彼の大きさを最もよく語つてゐる。

ドストイェフスキーはその點では寧ろ幸福な人であつた。彼の一生は随分不幸と災厄と貧困と疾病とのために苦しんだ一生であつたといふものの、それ等は彼にとつて本當の不幸とするに足らぬものであつた。

彼の疾病や貧苦やは、自分以外の事情から来たところもあつたが、しかし殆ど凡て彼自身が自ら招いたものであつたと言つてよい。大方彼自身の性格が自ら惹き起したところであると言つてよい。彼は随分不規律な放縱な惑溺の生活を送つた人である。彼はその性格にどこか大きな底の知れないやうな缺陷を有つてゐた人である。彼の性格にはどこかに底の抜けたやうな空罅があつて、一旦そこに觸れると何もかも吸ひ込まれ巻き込まれてしまふやうなところがあつた。彼の一生の不幸困難といふものも、多くはこの性格が招いたところである。

しかし彼はその性格にかういふ「底知れぬ」闇を有つてゐたとともに、それよりも深い強い光りを有つてゐた。彼はその自分の光りに頼つて安心することの出来る人であつた。その闇が深ければ深いほど、その光りは益々明かに光りを放つた。彼の最も深い性格の根柢は、その光りの中に在つた。そしてこの光りは、彼の性格の闇黒を相手にして闘ふに及ばぬ程に強い強いものであつた。そこがドストイェフスキーの強みである。彼の性格の缺陷は随分人並外れたものである。彼は随分いゝんな意味で底抜けである。その爲に随分苦しんだり困つたりしてゐる。それでゐて彼はその苦しみや、それを招いた自分の性格の缺陷を眞向から相手取つて闘つてはゐない。彼には自分の性格の矛盾といふやうなことを問題にして心を苦しめてゐるやうなところがない。特別にその矛盾や缺陷をどうかしようとしたりしてゐるところがない。少くともさういふ様子が見えない。何だかさういふ點では平氣のやうにも見える。トルストイの惱みに比べてみると尙更さういふ感じがある。トルストイは随分氣の毒な不幸な人である。彼は「底知れぬ」闇を有つてゐる。トルストイはその點では非常に強みのある、幸福な人であると思はれる。自然が一切の矛盾を包んでしかも日光の中に生き

てゐるやうに、彼も亦その性格の強烈な日光によつて、あらゆる缺陷や矛盾に深く傷けられる事なく生き得た人である。ドストイェフスキーは實にどういふ意味に於いても「猫のやうなエナジー」を有つた人であつた。トルストイは不幸な人と言へるが、ドストイェフスキーは不幸な人とは言へない。彼は寧ろ珍らしく幸福な人だと言はねばならぬ。彼の性格の複雑深刻を一貫するシムプリシティーの力を解する人ならば、必ず彼を幸福だといふことに同意するであらう。

彼の矛盾は晝と夜との如く、東と西との如くであると、あるドイツの批評家は言つてゐる。しかもその意味は、晝と夜とが相反する性質を有つてゐるに拘らず相闘ふことなく循環する如くに、彼はその矛盾に拘らず人間の生活を信愛する點に於いて一つであつたといふことでなくてはならぬ。彼は自分の性格に缺陷を有つてゐるが故に缺陷ある人生に専ら共鳴を感じた。しかも彼はその缺陷ある人生を信愛する事が出来た故に、彼の人生の表現はただの上つらのリアリズムに止まらなかつた。彼の作が與へる特殊の魅力はその點から來てゐるのである。しかしここでは彼のリアリズムの特色に就いては言ふ餘裕がないから省いて置く。

彼の疾病や貧苦やは、自分以外の事情から来たところもあつたが、しかし殆ど凡て彼自身が自ら招いたものであつたと言つてよい。大方彼自身の性格が自ら惹き起したところであると云つてよい。彼は随分不規律な放縱な感傷の生活を送つた人である。彼はその性格にどこか大きな底の知れないやうな缺陷を有つてゐた人である。彼の性格にはどこかに底の抜けたやうな空癖があつて、一旦そこに觸れると何もかも吸ひ込まれ巻き込まれてしまふやうなところがあつた。彼の一生の不幸困難といふものも、多くはこの性格が招いたところである。

しかし彼はその性格にかういふ「底知れぬ」闇を有つてゐたとともに、それよりも深い強い光りを有つてゐた。彼はその自分の光りに頼つて安心することの出来る人であつた。その闇が深ければ深いほど、その光りは益々明かに光りを放つた。彼の最も深い性格の裏面には、その光りの中に在つた。そしてこの光りは、彼の性格の闇黒を相手にして闘ふに及ばぬ程に強い強いものであつた。そこがドストイェフスキーの強みである。彼の性格の缺陷は随分人並外れたものである。彼は随分いろんな意味で底抜けである。その爲に随分苦しんだり困つたりしてゐる。それでゐて彼はその苦しみや、それを招いた自分の性格の缺陷を眞向から相手取つて闘つてはゐない。彼には自分の性格の矛盾といふやうなことを問題にして心を苦しめてゐるやうなところがない。特別にその矛盾や缺陷をどうかしようとしたりしてゐるところがない。少くともさういふ様子が見えない。何だかさういふ點では平氣のやうにも見える。トルストイの憫みに比べてみると尙更さういふ感じがある。トルストイは随分氣の毒な不幸な人であつた。しかし、彼はそれよりも、トルストイはその點では非常に強みのある、幸福な人であつたと思はれる。自然が一切の矛盾を包んでしかも日光の中に生き

てゐるやうに、彼も亦その性格の強烈な日光によつて、あらゆる缺陷や矛盾に深く傷けられる事なく生き得た人である。ドストイェフスキーは實にどういふ意味に於いても「猫のやうなエナジー」を有つた人であつた。トルストイは不幸な人と言へるが、ドストイェフスキーは不幸な人とは言へない。彼は寧ろ珍らしく幸福な人だと言はねばならぬ。彼の性格の複雑深刻を一貫するシムプリシティーの力を解する人ならば、必ず彼を幸福だといふことに同意するであらう。

彼の矛盾は晝と夜との如く、東と西との如くであると、あるドイツの批評家は言つてゐる。しかもその意味は、晝と夜とが相反する性質を有つてゐるに拘らず相闘ふことなく循環する如くに、彼はその矛盾に拘らず人間の生活を信愛する點に於いて一つであつたといふことでなくてはならぬ。彼は自分の性格に缺陷を有つてゐるが故に缺陷ある人生に専ら共鳴を感じた。しかも彼はその缺陷ある人生を信愛する事が出来た故に、彼の人生の表現はただの上つらのリアリズムに止まらなかつた。彼の作が與へる特殊の魅力はその點から來てゐるのである。しかしここでは彼のリアリズムの特色に就いては言ふ餘裕がないから省いて置く。

## 「死人の家」

千八百四十九年四月二十三日の早朝に、ドストイェフスキーは革命家としての嫌疑を受けて、その友人や同志の人たち三十二人とともに捕へられてペテルブルグの獄に下された。八箇月の間そこをゐた。十二月の二十二日になつて、朝の七時に皆と一緒に廣場へ連れ出された。囚人は三列に並ばせられた。そして死刑の宣告を読み聞かせられた。宣告はただ「銃殺の刑に處す」といふだけであつた。士官はそれを申し渡して、書附けを摺んでポケットへ入れた。丁度この時、朝日の光りが雲間から洩れた。ドストイェフスキーは、隣りにゐる男に「吾々を殺すつもりなのか」と囁いた。するとその男が黙つて向うを指した。見ると大きな布や筵を掛けた棺がづらりとそこに並んでゐた。ドストイェフスキーは、非常に驚いたが強ひて平氣を装うた。僧が來た。同志の中三人だけ先づ凭れる棒に身體を縛りつけられ、袋で頭を包まれた。兵士は銃を構へた。その時向うの教會堂の金碧の圓屋根がピカピカと朝日に光つた。それを見て、やがて自分の行くべき國の光りのやうに思つた。すると急にあたりがざわめいた。彼は近眼なので初めのうちはよく分らなかつたが、

ちつと見てゐると、一人の士官が白ハンケチを振つてゐることが分つた。

彼等は皆皇帝の特旨によつて死刑を許され、シベリヤへ流刑にせられることになり、そこから直ぐ出立すべき旨を申し渡された。

ドストイェフスキーのオムスクでの監獄生活はかやうにして始まつた。彼がそこで過した四年間の経験に基いて、千八百六十一年、許されて再びペテルブルグに歸つた後に出した、彼の第二の長篇の作が即ち「死人の家」である。

死人の家もしくは死の家といふのは、病院などで屍體を置く隔離した特別の室のことである。屍室である。作者は監獄を死人の家と見たのである。この作は、嫉妬のために自分の妻を殺した或る貴族の死後に違つてゐた日記——追憶記——を編纂したものといふ事になつてゐる。しかし必ずしも日記體に順序を追うて書いてあるのではなく、大體の順序こそはあるが、思ひ出し思ひ出しいろいろの方面から監獄生活を書いたものである。随つて普通の小説に見るやうな筋といふものはない。ドストイェフスキーの他の長篇では、なかなか複雑な、一方からは探偵小説的であるとさへ謂はれる程の筋があるのが多いのに、この作は全然普通の意味での筋といふものはない。各章がそれぞれ一つの短篇になつてゐるやうな形である。監獄内のクリスマスの祝ひとか、その折に囚人たちの催す芝居興行だとか、獄内にゐるいろいろの動物だとか、さういふ一つ一つの話しの他に、全體に互つて出て來るいろいろの囚人の性格の描寫研究、心理的解剖、それ等がこの作全體の最も著しい主要な部分を占めてゐる。この作中の第二篇の「アタールカの亭主」といふ一章なども、ある囚人自らの話しの聞き書きになつてゐて、それで立派な一つの短篇小説としても見ることが出来るも

のである。

要するにこの作には謂はゆる全體を一貫する筋——事件の變化の脈絡といふものはない。しかもそれで決て決てばらばらの短篇やスケッチを寄せ集めたといふやうなものでもない。原文では細字で三百六十ページ以上になるが、強い明らかなあるものが、この作全體を貫いて流れてゐる。それは監獄生活といふ特別な生活の空氣、心持ちであるとも謂へる。またそれを觀察し描寫し解剖してゐる筆者（作中のある貴族）即ちドストイェフスキー自身の、作者として——寧ろ人間としての態度心持ち、即ち性格そのものであるともいへる。即ちこの作には外面に現はれた事件の變化の脈絡といふものはないかも知れぬが、監獄生活といふ特殊の生活の空氣と、ドストイェフスキーの特殊の性格とが結び付き融け合つて、そこに一種の強い明らかなこの作特有の氣分を醸し成してゐる。そしてその特殊の氣分が、この作全體を貫く内側の脊骨に成つてゐる。そしてこの内側の脊骨は外面事件の變化の脈絡のないことを補うてあまりあるものである。この作は小説として一つの特殊な形式のものである。

囚人、しかもシベリヤの囚人と聞けば、吾々は直ちに吾々の知らない特別な人間の特別な生活を豫想する。單に外部に見えるだけの生活を考へてみても、監獄生活は一種のストレンヂな未知の世界として吾々の好奇心を刺激する。殊にシベリヤの監獄には、全ロシアの各地方から集まつて來た、いろいろの人種といろいろの階級との人間が、少くともドストイェフスキー時代には同居してゐた。犯罪の種類によつても必ずしも監房を區別してなかつた。さういふ雑多の囚人の共同生活を營んでゐる有様、また殊にさういふ囚人個々の心理狀態、特別の共同生活に伴ふそれ等の囚人の特別心理狀態、それ等は更に更に吾々にとつてはストレンヂ

な未知の世界である。吾々はただ、さぞ暗い、寂しい、恐ろしい、亂雑な、寒い貧しい生活であらうといふやうな聯想を懐くに過ぎない。勿論さうである。しかし「死人の家」を読んで、私はこの特別の世界に住む特別の人間の生活狀態を知り得たばかりではなく、この特別の世界に住む特別の人間の心の隈々まで、底の底までもわたらんぬところなく知り盡し得たやうな感じがした。今ではシベリヤの囚人生活もドストイェフスキー時代とは大分違つてゐるといふことだ。この作に書いてある様子とは勿論違つてゐるであらう。しかし、シベリヤであると日本であるとを問はず、すべてこの特別の世界に住む特別の人間の心理狀態にいたつては、この作が殆ど十分に徹底的に精細に闡明し穿鑿し盡してゐるやうに思はれる。この、ドストイェフスキーの精細な徹底した穿鑿的な心理解剖は、彼の作の凡てを通じての著しい特色であるが、殊にこの囚人生活の表現に於いて、——又その體裁が自敘體であるがために一層自由に一層精細に一層直接に出來てゐる。この心理解剖が囚人生活の眞髓を細やかに剩すところなく捉へ來るとともに、一面では作者の現實を見る心——囚人生活の間に在つて共に生活してゐる作者その人の心持ち乃至性格をおのづから示すことになつてゐる。監獄生活の空氣と作者の性格とが結び附いて、一種の強い明らかなこの作の生命を作つてゐるといふのはそのことである。

ドストイェフスキーは實にその深刻徹底せる觀察と解剖との力によつて囚人生活を書いてゐる。しかも彼の心理的解剖は、深刻ではあり精細ではあるが、ただ解剖し分析して、謂はゆる「事實」をまざまざしく知り究めようとする解剖ではない。好奇心本位、知識本位の解剖ではない。深刻徹底した心理的解剖によつて、深く細やかに究めて行くと、そこに見出だし得た人間内心の事實は、囚人の心にも吾々と同じく眞に人間ら

しい、軟らかなやさしい愛すべき純な性情の濃み流れてゐることを教へてくれるのである。囚人も決して特別な人間ではない。寧ろ特別の生活をしてゐるやうに思はれてゐる囚人生活の中に、却つて多くの純な、公正な、強い心を見出すくらゐである。どんなに暗い汚れた騒み踊られた人間にでも、その心の底には、やはり盛り返して伸びて行く事の出来る尊い限りない生命の力が、消え失せずにあるのだといふ事を感じざるを得ない。徹底したリアリズム、精細な観察と深刻な心理解剖との行きつくしたところに、おのづから生命の無限の力の盡きざる泉が流れてゐることを示してゐる點に於いて、ドストイェフスキーのこの作の如きは、明らかに近代文學の將來を豫想してゐるものである。近き將來に於いて最も生命ある文學は、たしかにこの方面を指すものでなければならぬと信ずる。

しかもドストイェフスキーは又、近代人の暗黒な戰慄するやうな刺激的の興味を十分に了解した作家である。例へばダヌンチオの『死の勝利』の主人公の海角の死の刹那の心持ちの如きも、明らかに『死人の家』の中に書かれてゐる。要するに彼は殆どあらゆる人間の——生活に悩む恐ろしい心持ちを知り究めて、しかも尙その底に光る生命の力を見失はなかつた人である。この意味で彼は最も人間らしい人間であると共に、最も強い人間の一人である。

### 『虐げられし人々』

昇氏の譯されたドストイェフスキーの『虐げられし人々』が作者の自傳的要素を多分に含んでゐる事は昇氏の譯本の序にもあつたが、殊にこの作の主人公のワーニヤが、自分の愛してゐるナターシャのために、ナターシャの愛してゐる他の男アリオシヤとナターシャとの間に立つて心からの好意を盡すといふ事實は、この作中でも最も著しい自傳的要素である。この點に就いては、ワーニヤの心持ちが如何にも不自然であるといふ非難が、既にロシヤのいろいろの批評家によつて繰り返されてゐるさうである。即ちワーニヤが自分を犠牲とするのがあまりに馬鹿馬鹿しいことで、そんなことは實際あり得ないことだといふのださうである。そんなことは單に頭のアから起り得ることに過ぎないといふのださうである。それに對してホフマンといふ傳記家は、しかしこれは實際あり得ないことであるどころか、ドストイェフスキーの傳記が、到底打ち消すことの出来ない程に證明してゐる事實であるのだと言つてゐる。

私はこの點に就いてはどちらの説も問題にするに及ばぬと思ふ。ただこの作がその點に弱みを持つてゐる



事とすれば、ロシアのある批評家が言つたといふやうに、それ程重大な關係に立つてゐるワーニヤが、この話の全體の説明者であつて随つてワーニヤがこの作中の生活に對して一個の傍觀者以上に出てゐないやうなところのある點でもあらう。つまりワーニヤをしてこの物語を語らしめたのが作者の手落ちであつたといふことにもなるであらう。それがためにワーニヤがあつた立場になつてどんな心持ちでゐるかといふ事——ワーニヤの生活——を描くことがどうかすると忘れられてゐる氣味のあることでもあらう。勿論ワーニヤは全然傍觀者以上に出てゐないと言へないが、どうかすると讀んでゐる方でもワーニヤ自身のことには忘れてしまつて、ワーニヤがいろいろの人々のために苦勞苦心をしてゐる、そのいろいろの人々の事の方に氣を取られてしまひさうになる。それだけに、ワーニヤ自身は一體どうしてゐるのだ、どんな氣持ちでゐるのだ、ワーニヤは傍觀者としてしか現はれてゐないかといふ疑ひが起つて來るのもあらう。

しかしワーニヤの性格は、自分自身の事に關はつてばかりで、自分の愛する人々のために自分を忘れてしまつてゐる程に見えるところに、その特色が在る。讀者がワーニヤ自身の事を心配しないで、ワーニヤを楔子にしていろいろに繋がり合つてゐる周囲の人々の上に氣を取られて行くくらゐに、ワーニヤの自身の心の苦しみがあらはに想へられてゐないところに、ワーニヤの性格の特色がある。殊にこの作がワーニヤの口から出た話の體になつてゐるだけに、そのワーニヤが自分の心もちをあらはに想へるやうな素振りのないのが、尙更ワーニヤの性格を語つてゐるわけである。ワーニヤが説明者であるために傍觀者以上に出てゐないといふ批評は、一方から言へばワーニヤ自身の苦しみがつこの作の上に出てゐるやうなものだといふ理想に基いてゐるわけである。自己犠牲がワーニヤに與へた苦痛がこの作に出てゐるだけでは足りないといふ

ふ意味を含んでゐる。随つて、一步を進めて言へば、ワーニヤがあれだけの自己犠牲を行ひながらあれだけの心持ちでゐるといふことは受け取れないといふことになる。

ワーニヤがただの傍觀者以上に出てゐないといふ批評の不當なことは、ワーニヤの性格に多少の理解を有つてこの作を讀んだ人なら直ぐ分る筈である。自分よりも強くアリョーシヤの方を愛するナターシヤに對し、またそのアリョーシヤに對し、ワーニヤは随分苦しい立ち場にゐる。しかし、ワーニヤの方から言へばこの二人の幸福を圖つてやるといふことより他に、ナターシヤを最も強く深く愛する道はないのである。ワーニヤの心はそれ程に軟らかく、テンダーであると同時に、それ程に強く深く貫徹する力を有つてゐる、少くともそれまでに成長してゐる。表面から見ても常識で判断すると、随分ワーニヤは意氣地なしに見える、お人好しに見える、馬鹿のやうにさへも見える。しかしワーニヤの心にもさすがにどこか寂しいつらいやうな心持ちが流れてはゐる。しかしそれはこの作ではほんの僅かしか現はれてゐない。そこが傍觀者以上に出てゐないといふ批評の出たりする點であらうが、ワーニヤの心持ちはそれ以上にテンダーに、それ以上に、あくまでも深く愛し貫く力を有つてゐる。少くともそれまでに成長してゐる。しかもその力を自分で意識して、自己批評を加へて安心したりするところが殆ど見えない。ワーニヤの性格には、ドストイェフスキーの大抵の作に在る特色的な性格と同じやうに、意識しないで所有してゐる一種の愛の力がその基調となつてゐる、この性格の基調に多少の理解を有つてこの作を見れば、ワーニヤの自己犠牲に對する上のやうな批評の當否は、自ら分ることと思ふ。

それから又一方から言へば、ナターシヤの熱烈な性情とアリョーシヤのシンプルな性質とが、ワーニヤを

して自己を犠牲にしてこの二人のために盡さしめる一つの誘因となつてゐるとも見られる。ナターシャは聰明で神経質で、人の心持がよく分る。作中にも書いてあるやうに透視力を有つてゐるやうなところがある。その一方で中々忍ぶ力も強い。しつかりしたところがある。熱情的であつて而も自分の愛するものに對しては随分寛大である。昇氏はその譯本の序で、ナターシャのことを「うら若い、晴々とした、近代的の、強い、勝氣な」女だと評して居られたが、晴々としたといふ點はどうかと思ふが、強い勝氣な女といふことはその通りであると思ふ。この勝氣な女のアリ・ーシャに對する戀は狂熱的である。自分がアリ・ーシャの側にさへゐる事が出来れば他人がアリ・ーシャを愛してもよいくらゐにまで思ふ。勝氣な聰明なナターシャから見ればアリ・ーシャの氣の弱い動かされ易い性質が危なかくて仕方がない。初めからナターシャはアリ・ーシャに不安を感じてゐる。それでもナターシャはますます一心に熱烈にアリ・ーシャを愛した。丁度母か姉かが子供か弟を愛するやうな心持で熱愛した。それに對して、アリ・ーシャはまるで子供のやうな意志の力の弱い、他人に動かされ易い、お人好しの、どこか少し足りないやうな感じさへする青年である。この人の好い、憎みやうのないアリ・ーシャと、それを庇ふやうな心持で熱愛してゐるナターシャの強い愛とに對しては、ワニーヤのテンダーな心は、自分の犠牲を比較的多く忘れて、二人のためにしてやりたいやうな氣分にならせたらうと思はれる。ナターシャはその熱烈な愛の力で、アリ・ーシャはそのシムブルな性情で、却つてワニーヤの心を動かしたらうと思はれる。

ただ、たとひワニーヤが自己を犠牲にしてゐることそれ自身は不自然でも不可能でもないにしても、また、この作の第一編第十四章以下に、ワニーヤが自分の心の苦しみを想へてゐるところが殆ど無いといふことも

必ずしも傍觀的であるとは言へないにしても、それ程の自己犠牲の愛は心の打撃を受けたときに、直ぐ何の造作もなく生ずるものではない。ワニーヤの愛が強く深いとは言つても、受けた心の打撃に即座に應じて自己を犠牲にして悔い悲しまないといふ事ではない。その打撃の下から成長して行くだけの力を有つてゐるといふ意味に於いて、しかしてまたその成長した愛が彼をして馬鹿のやうに意氣地なしのやうに見える程の事をさへ行はしめてゐるといふ意味に於いてである。随つてこの作には、「私の幸福の歴史はこれだけであつた」と言つてゐる彼の受けた打撃から（第一篇第九章）、如何にして彼の心が、彼の愛が成長して行つたかの徑路を示さねばならない筈である。またそれによつてこそワニーヤの自己犠牲が極めて自然な必然なものであることを十分に是認せしめることが出来るわけである。この作がその成長の徑路を省いてゐることは、この作に對する第一の物足りなさである。しかしてその點からワニーヤの自己犠牲に對するいろいろの非難も生じてゐることと思ふ。

この作の筋は随分込み入つてゐて、世評の通りメロドラマティックなところも可なり多いし、敘述の繁雜な感じを與へる事も否みがない。しかしこの作はたださういふ目さきの筋の變化で人を牽きつけてゐるのではない。この作にはおのづから一つのポイントを求めることが出来る。それは愛の悲劇であるといふことである。いろいろ種類のちがつた愛の悲劇が、複雑な脈絡とは言ふものの、どの愛の悲劇も皆ワニーヤの愛の悲劇を楔子にして、そこで互に繋がらあつてゐる。ソニーヤの愛、ナターシャのアリ・ーシャに對する愛、ネリーのワニーヤに對する愛、イフメニエフ老人のナターシャに對し、スミス老人がネリーの母に對する父親の愛、これ等は何れも皆いろいろの意味で悲劇的色彩を帯びてゐる。これ等の愛の悲劇が互に圈を交へて

渦巻いてゐるのがこの作である、この作が人を牽きつけるのは、この渦巻が讀者を吸ひ寄せ巻き込むからである。ここでは詳しいことを言ふ餘裕がないが、かりにこの渦巻があまり澤山に一時に圈を交へて渦巻いてゐるのが不都合だといふ非難は許すとしても、その一つ一つの渦巻は決して無理やりにこしらへたものではなく、自然な、又必然なものであるといふことは明らかに言つて差支へない。即ちこの作が幾多の愛の悲劇の渦巻から出来てゐるといふことは、同時にこの作が幾多の性格悲劇から出来てゐるといふことである。一つの渦巻は皆性格の悲劇である。性格から来る愛情の悲劇である。(ドストイェフスキーの作が何等かの意味で性格悲劇を成してゐること、そこに彼の作の強い魅力のあることはここで詳しく云ふ違がない)

その多くの渦巻の中で、最も著しい一つ、即ちナターシャとアリ・ローシヤとの愛の悲劇を見ても、それが深い性格の根本から生れてゐることは明かである。ナターシャが一旦愛してゐたワニヤを忘れて、アリ・ローシヤに牽きつけられて行つたのも、ナターシャがその熱烈で勝気で聰明な性格から、アリ・ローシヤのうぶな、氣の弱い、頼りない覺束ない性格に對して、殆ど本能的にそれを庇護せずには居られないやうな心持ちになつたためである。ナターシャがアリ・ローシヤに對する愛はナターシャの性情からは自然狂熱的になつて行かずに居られない。アリ・ローシヤの心が周囲の誘惑に逢つてぐらつけばぐらつくと、益々ナターシャは狂熱的に愛するやうになる。しかもその狂熱的な愛は、母のやうな姉のやうな庇つてくれるやうな愛は、却つてアリ・ローシヤの心をカーテイヤの方へ向けることになつてゐる。そこにナターシの愛の悲劇——性格から來てゐる愛の悲劇がある。カーテイヤは齡よりも聰明で *thinking child* ではあるが、やはりまだ世間を知らない娘で、異性の間の愛といふものすら本當に分つてゐるかわないか怪しいくらいである。ナターシヤと

アリ・ローシヤとの間は姉と弟といふやうな關係になつてゐるが、カーテイヤとアリ・ローシヤとは同じ世間知らずの若い者同志といふやうな關係に立つてゐる。そこがアリ・ローシヤには、カーテイヤの方がなんだかナターシヤよりも氣樂でチャーミングな點である。カーテイヤは別に顔に特色のある娘でもないが、アリ・ローシヤの心は段々その方へ牽き寄せられて行く。ナターシヤに對しては、その寛大な美しい心に對して氣の毒なすまないといふ心持が克つて來る。ナターシヤが子供臭くなければならぬ程、彼の女はアリ・ローシヤを熱愛するやうになる。しかもそれは一種のあはれみの情からであつたといふのが當つてゐる。この三人の性情が働き合つて、だんだんアリ・ローシヤはナターシヤから隔たつて行く。

尤もナターシヤとアリ・ローシヤとは共に幸福になり得ない外部の原因を有つてゐた。イフメニエフと公爵との關係や、カーテイヤの財産に對する公爵の欲望やが、二人の間を邪魔する力になつてゐる。しかし當事者の間の結合が強固なら外部の事情を征服することは必ずしも不可能ではない。しかしこの二人は前に言ふやうな性格からだんだん分れて行つた。アリ・ローシヤと雖も全く無情な不誠實な馬鹿では決してない。ただこの二人はどうしてもしつくりしないと互の性格の中にも有つてゐた。殊にそれがナターシヤの方から働きかけて行つた。ナターシヤはアリ・ローシヤがぐらつけばぐらつくと、まじめに熱烈に愛するやうになつた。さうなればなる程アリ・ローシヤは子供らしい氣樂なカーテイヤの方へ離れて行つた。三人とも誰が悪いといふことは勿論言へるものでない。ここに三人の性格があり運命があつた。殊にナターシヤの愛は、「パッシシンのことであり、運命のことであつた。」渦巻の表面はメロドラマティックかも知れないが、その渦巻はあくまでも自然な必然な性格の悲劇である。

ドストイェーフスキーに對する一部の人の貶罵は随分亂暴なまた臆病なものである。センチメンタルだとか甘いとかいふのは言ふ人の勝手としても、それがこの作物の全部であるかどうかは問題である。無理に辛からんとして力んだり、センチメンタルな匂ひに恐れて逃げ出してしまふ前に、もつとよく讀んで見るべきではあるまいか。疵のあるといふ點から言へばドストイェーフスキーなどは随分疵の多い方であらう。しかしその疵に拘らず強い力を有つてゐるといふのが、彼の強みである。吾々はその疵のためにその強みを見のがしてはならぬと思ふ。

### ロシア精神の發露としてのボリシエキーズム

千九百十七年十一月の謂はゆる第二革命以後、ロシアの中央政權を握つたリューニン一派即ちボリシエキに對しては、日本に於いてもさまざまな批評があるやうである。少數識者の間には、リューニン一派の爲すところに對して、少くともその意圖その抱負の如何なるものであるかに就き、正しい親切な解釋を下してゐる人々もあるやうに見受けるが、一般の世間は、かの一派が日本に於いて與へられた過激派といふ一種のニック・ネームによつても察せられる如く、單に過激なるアヴンチュリストの一群にのみ過ぎないかの如く考へてゐるかと思はれる。しかしながら、これは日本ではまた已むを得ない次第であらう。リューニン一派に對する批評は、ロシア本國に於いても随分手きびしいのが多いやうである。獨探であるとか賣國奴であるとかいふ批評を、然るべき大學教授などの署名した新聞紙上の論説に見出すことも珍らしくはない。およそリューニン一派の新聞紙でない限り、爾餘の社會黨の機關に於いてすら、自分の知る限りでは、折にふれ

事につけてポリシキキを非難し攻撃し悪罵し嘲笑してゐるやうである。ひとり新聞雑誌などの上のみではなく、自分の逢つた中流階級知識階級のロシア人で、程度の多少こそあれ、ポリシキキを非難し罵らないものはなかつたと言つてもよい、たまたまポリシキキ一派の人などと、どこか客などに行つて同席するやうな場合があると、お合せた人たちの間に必ず激しい論戦が始まる。そしてしまひには座が白ける、といふやうな有様であつた。平民階級は別として、ロシア本國に於ける中流以上の社會、乃至知識階級は、殆ど大部分ポリシキキ反對であるといつても間違ひではない。

しかし、いかにロシア本國に於ける中流以上の社會や知識階級の間には反對があるにしても、既に約半年に亘つてその政權を維持し、ともかくも着々としてその爲さんと欲するところを行ひつつある以上、これを以て全く一時的のアヴンチュリストであるといふ風には見られまい。ポリシキキの主義理想に對する贊否は如何にあらうとも、またポリシキキの實際上の仕事に對する批評は如何にあらうとも、今日に於いては、もはや何人もポリシキキがロシア革命運動の重大なる役目を演じつつあることを否定するわけには行かぬ。また彼等の出現及びその勢力の増進が、たとひ無知にもせよ、何等かの點に於いてロシア民衆の多數の心に根柢を置くものであることを打ち消すわけには行かぬ。しかしまた、更に進んでは、ポリシキキの爲すところが、外面上内面上さまざまの意味に於いて、ひろく世界の生活に重大なる刺激を與へつつあることを否定するわけには到底行かない。この意味に於いて、ポリシキキの何でありポリシキキの何人であるかは、少くともロシア革命運動の経過に興味を有するものにとつて、更にまた謎の如きロシア國民の本性を知らんとするものにとつて、頗る興味ある問題であらねばならぬ。自分はもとより社會主義の最硬

派としてのポリシキキに對する批評を試みようとするものではない。またもとよりポリシキキの實際の仕事に對する批評を試みようとするものでもない。もとより謂はゆるポリシキキのうちには、少くとも自からポリシキキと稱するものの中には、單なるアヴンチュリストもあるであらう、純然たるドイツの犬もあるであらう、一身の私利私慾のために仲間入りをしてゐるものもあるであらう、しかしまた、狂熱的な空想家、純然たるユートピアンもあるであらう。しかしこの雑多な分子を引つくるめて、一つのポリシキキの運動乃至意力となつて發顯するとき、そこに一種の精神乃至氣分ともいふべきもの存することを感ずる。ポリシキキの主義綱領は、所詮社會主義の最も強硬なる主張に過ぎないにしても、それが現在のロシアに於いて、世界の大戦のただ中に立てるロシアに於いて、着々として實行に移されて行くのを見るとき、そこに一種言ひ現はしがたきロシア特殊の氣分を感ずる。そこに微妙なる不思議なるスラヴの魂の匂ひがするやうに思はれる。自分はこのポリシキキに見られるロシア特殊の氣分に就いて、ほんのさしあたりの思ひつきを書いてみよう。多少纏まつたことは、何れも少し落ち着いてから別に書く折もあらうと思ふ。

ロシアには昔から僧稱者乃至それに類するものが随分多く出現してゐる。宗教方面といはず、政治方面といはず、さまざまの機会に乗じてさまざまの僧稱者が出現してゐる。十七世紀乃至十八世紀の間に於いて、偽つて自から帝王の血統を受けたものであると稱し、邊境の武勇を従へて社會政治上の革命運動を起したものは少くない。十七世紀の初めに於ける似非ドミートリーの出現、十八世紀に於けるブガチーフの僧稱などは、その最も著しいものである。また宗教方面の僧稱者としては、ラスプーチンの如きを、その最近に於ける最も著しい例としてあげることが出来る。殊に宗教方面に於いては、いろいろの小さい僧稱者が随分多いやうである。しかしてこれ等のさまざまの方面に於ける僧稱者が、いづれも各々歸依者追隨者尊崇者を得て、それぞれの時に於いて侮り難き勢力を有してゐたのである。ブガチーフ、ドミートリーに對する民衆や武人の信望、ラスプーチンに對する歸依、これ等はロシアの政治史上乃至社會史上に決して輕からざる意味を有してゐる事實である。この僧稱者の多く出現するといふことは、勿論民衆の無知にして迷信的なことから、土地のあまりに廣大なことから、或はその他さまざまの理由からも説明することが出来るであらう。しかしそれ等の詳しいことは別として、ここにロシア國民の宗教心に特有な事實がある。それはロシア國民が反キリストを信じやすいといふことである。更に言葉を換へて言へば、「善」の假面を被れる「惡」を信じ易

いといふことである。また更に言ひかへれば、ロシア國民にとつては、「善」と「惡」との境界が、黒と白との如く明割でないとも言へる。キリストと反キリスト、天使と惡魔との區割が截然としてゐない。彼等はキリストを見て心酔し歸依することく、反キリストを見てもまた心酔し歸依する。本來ロシア國民の精神は、あらゆる場合に於いてあらゆるものに絶對無上のものを求めてやまない。しかし絶對の神聖に憧れて、相對の生活を支配する男性的實際的能力に於いては著しく乏しい。相對的の生活に於いては極めて容易に外からの男性的實際的の力に身を任かす。それ故に彼等は地上の穢れと卑しさとの中に在つて、温もりある地上の罪の生活を甘んじ楽しむ。「神聖」に酔ふとともに「罪」に酔ふ。「神聖」の前にへり下り素直であるやうに、「罪」の前にも素直である。随つて「惡」をも「罪」をも絶對の「惡」とし絶對の「罪」として嚴かに審くことをしない。「惡」に於いて純然たる「惡」を見ず、「罪」に於いて徹頭徹尾の「罪」を見る事をしてない。反キリストに於いて徹頭徹尾の「罪」と「惡」とを見ない。ロシア國民が自から「神聖なるロシア」と稱しながら、その實際に於いて可なり獸の如きロシアを有する所以もそこに在る。ラスプーチンの魅力がともかくも一部の人々の歸依を勝ち得た所以もそこにある。

しかしてこの反キリストを信じやすいといふ、ロシア國民の宗教心に特有な一つの事實を、今のポリシキイズムと結びつけて考へてみると、そこにポリシキイズムの宗教的根據ともいふべきものがある。これがポリシキイズムの放散するロシア特殊の氣分に對する解釋の一つである。

思ふに今のポリシキイズムは、一つの反キリスト的表現ではなからうか。しかしてポリシキイズムの勢力は、民衆がこの新しき反キリスト的表現に魅せられてゐるところにあるとは見られまいか。もとより社

會主義としてのポリシキーズムは、今日の世界の社會黨中最も強硬なる主張であるといふに過ぎない。その主張は必ずしもロシア特有のものではない。しかし、今日のロシアに於けるポリシキーズムの如く、その主張するところを奮進的に實現しようとし、また實現しつつあるものは他にその例を見ない。ポリシキーズムはその主義を實行する態度意気込みから見て、その活動の時期及び手段などから見て、どうしてもロシアに特有なあるものを有してゐるといはねばならぬ。而してまた、それが一般民衆の間に侮りがたき勢力を有する點に於いても、何等かロシア特有のあるものがある。そもそもポリシキーズムの綱領たる平和主義は勿論、その共產主義の如きも、人間究極の理想としては即ち絶對的「善」である、少くとも絶對的「善」の面影を鮮やかに有つてゐるものである。而してリューニン、トローツキ等のポリシキーズムは、或る意味でたしかに僭稱者である。革命後のロシアに於ける政權の掌握者は、いづれも何等かの意味で多少僭稱者の性質を帯びないものはないともいへるであらうが、殊にリューニン等がドイツの領土を経て歸國して以來ドイツの犬であるといふ噂があり、そのため一時捕へられんばかりであつたやうな事情から、またその政權を握るために武力を濫用したやうな點から、殊に彼等が一種の僭稱者であるが如き印象を與へる。即ち彼等の標榜するところは絶對的（随つて抽象的）の「善」もしくはそれに類似のものであつて、その標榜するところを實現するために取り來つた手段方法には、多分の僭稱者の臭味がある。第一彼等はその標榜するところを悉く實現するだけの力を有して居らぬ。またかりに力があつたとしても、彼等の標榜するところには尙重大な缺陷がある。しかも彼等は敢てそれを實現しようとして、着々としてその爲さんと欲するところを爲しつつある。彼等の爲すところが果してロシア國民にとつて、眞に幸福を招來するの道であるか否かは疑問であるが、さ

ればとて悉く不幸を招來するものであるとばかりいへないやうなところがある。ともかくも標榜するところは絶對的「善」乃至それに酷似のものであつて、それを實現するために豫言者の如く墓地に進みつつある。彼等は決してキリストのものではないであらう、しかし少くともキリストに似て強き魅力をもてる反キリストの面影を有してゐる。ポリシキーズムがロシア民衆を魅する所以の一つはそこに在るとも考へられる。

## 三

ポリシキーズムがロシア的である點は、更に謂はゆるストラキヤノフイリストラ（文字通りにはストラヴを愛する主義主張の意、ロシア國粹主義）を想ひ起さしめる點に在る。ストラキヤノフイリストラは、千八百四十年代のロシアの文學者思想家の一部によつて唱へられた一種の宗教的神祕的國粹主義である。謂はゆる西歐派の人々が、ロシアは一切の文明の範を西歐に取らねばならぬ、ロシア國民が他邦の國民に比べて特殊の天分と使命とを有すると思ふが如きは迷妄に過ぎぬと説いたのに對して、ロシア國民の特殊の天分と使命とを信じ、その特殊性を高唱したものがストラキヤノフイールの一派である。彼等の言ふところに従へば、西ヨーロッパの文明はローマ文明に源を發し、その基礎を「權利」に置いてゐる、これを保證するものは、「理知」である、即ち「科學」である。その往くところの道は「分解」の道であつて、隨つて内面の分裂に到達する。これに反して東方即ちロシアの文明はサザンチヤにその源を發し、その基礎を「宗教」に置いて

なる、これを保證するものは「感情」である。その往くところの道は「綜合」であつて隨つて信仰の峯に到達する。かくの如きロシアは、自から新しき綜合的文明を提げ、分解分裂に疲れたる西ヨーロッパに代つて、やがて世界の文明に新生命を與ふべき特殊の使命と天分とを有してゐるといふのである。

ポリシキイズムは、その主義主張の内容に於いては、ストラキヤノフイリストフとは勿論全く別のものである。その極端なマルクシズムの主張に於いて、寧ろストラキヤノフイリストフに對立する西歐派の主張に従ふものとも見られる。彼等はロシア獨得のキザンチヤの文明を高唱するものでもなければ、宗教を尊重して科學を蔑視するものでもない。寧ろその點に於いては全く相反する傾向の下にあるといつてよい。しかしながら、自家の特殊の能力もしくは權能を信ずることの深きことに於いて、またその主張の態度意氣込みに於いて、ポリシキキとストラキヤノフイリストフとは、頗る似通うてゐるところがある。その主義主張の内容に於いては、ストラキヤノフイリストフは、ロシア獨得の歴史に起源を有するものであるに反し、ポリシキイズムは西ヨーロッパ傳來のものであるに拘らず、その各々みづから持つところの遠大なる理想を提げて、これが實現を信ずる點に於いては一である。而してまた、一はその大理想實現の使命乃至天分が、特にロシアの民衆に賦與せられたものであると考へ、他はその大理想實現のためには現在のロシアは最も自由にして適當なる國であると考へてゐる點に於いても、この兩者は頗る類似せる心理状態に在る。而して更にその思想の起源乃至内容の相異なるに拘らず、ロシアの民衆が自から起つて懷抱するところの大理想を世界に唱へ、且つそれを行ふことによつてはじめて世界の民衆を救ふに足ると信じて疑はざる點に至つては、ストラキヤノフイリストフとポリシキキ一派との何れにも、ひとしく著しき特色である。

ポリシキイズムを以て直ちに往年のストラキヤノフイリストフに比べることはもとより不當である。しかしながらその氣分に於いて、抱負の高遠壯大なることに於いて、この二つは頗る相似てゐる。而してまた頗るロシア的である。ストラキヤノフイリストフの神祕的使命を信ずる點と、ポリシキイズムが一切の周圍の事情に拘らず結局の理想の實現——少くとも今のところ不可能と見えることを可能と信じてゐるらしい點と、そこに何れにも超現實の匂ひがある。いつまでも到達し難き地平線のかなたに、何ものか絶對に眞に絶對に美に絶對に善なるものの在ることを確信して、遠く限りなき曠野のはてを追うて已まないやうな神祕的心醉と狂熱とを、この二つの思想的表現にひとしく見ることが出来る。その思想の起源に於いて、一つは内に發し一つは外來のものである點から見ても、ポリシキイズムは着物を裏がへしに着たストラキヤノフイリストフとも言ふことが出来る。これもまたポリシキイズムに對する見かたの一つである。

## 四

ロシアのインテリゲンツィヤの思想上の特色は、先づその抽象的なことである。何故にロシアのインテリゲンツィヤの思想が概して抽象的であるかに就いては、別に説くことを要するが、それはここには省いて、とにかく彼等の考へかたがとかく抽象的であることは蔽ひがたき事實である。今度の革命の後、多年民衆のために心血を瀧いだインテリゲンツィヤの影が何となく薄くなり、昨年十一月の第二革命後は



殆ど全く民衆から敵視せられるやうにさへなつたのも、その主なる原因の一つは彼等が抽象的であつたといふことである。殆ど凡てのインテリゲンツィヤは、抽象的であるとともにロマンティックであつて、思ふことは限りなく、行ふことは殆ど少い。しかしてこの抽象的な、純理論的な、而してまたロマンティックなインテリゲンツィヤの著しい一例は、トルストイである。

ここでトルストイの思想方面を一々説く餘裕はないが、彼の思想の抽象的であり、純理論的でありロマンティックである一例は、あの有名な無抵抗主義、トルストイ自身の言葉でいへば「暴力を以て惡に抵抗せざる事」の思想である。この思想に就いては、ドストイェーフスキーがその日記の中に書いた有名な批評がある。それは即ち「暴力を以て惡に抵抗しない」といふことは、結局暴力を是認することになる、——暴力を以て立ち向うて来るものに抵抗しないといふことは、つまりその暴力を是認する形になるといふ意味を、諷刺的に批評したものである。さてその批評はとにかく、もの考へかたの抽象的になりやすく、純理論的になりやすく、ロマンティックになりやすく、随つて極端までつき詰めたところへ趨りやすいのが、ロシアのインテリゲンツィヤの思想の著しい一つの特色である。「一切か無か」といふブランド風の考へかたが、(ブランドのとは違つた心持ちから來てゐるが)しばしばそれ等のインテリゲンツィヤの思想に見出だされる。

トルストイの一生の苦しみにも、「限りなき夢想の破産」ともいふべきところがある。またひろくインテリゲンツィヤ全體の失敗に、同じく「限りなき夢想の破産」ともいふべきところがある。

既に抽象的であり純理論的であるが故に、その夢みるところ思ふところは、直ちに究極の結論を見出だし、

直ちに最後の理想を立て來たる。而してそれは速かに容易になされる。既に究極の理想が立てば、即ち直ちにこれを實行に移さうとする。その間に殆ど何等の方策もなく、何等の實際上の顧慮もなく、何等の周到なる用意料といふべきものもない。性急である。随つて破綻が百出する。しかし容易にその夢は破れない。少くとも一生を夢想と破綻との連続のうちに過す。トルストイの一生にさういふところがある。その他のインテリゲンツィヤにもまた概してさういふ面影がある。しかしてこれはあくまでもロシア的である。ロシア人は實に大なる夢想家である。絶對なるもの、限りなきはてに在るものを、つねに夢みてやまない民である。

而してこの抽象的である事、純理論的であること、性急に理想を實現しようとすることは、やがてまた今のポリシキキに見られる特色ではないか。彼等が複雑な曲折せる在來の外交政策を用ひず、その他殆ど一切の方策政策といふべきものを無視し、もしくは寧ろ侮蔑して、單刀直入に、驕進的に自己の究極の理想を實現しようとするところは、而してそれに伴つてさまざまの破綻を生じつつあるにも拘らず依然としてその思ふところを行ひつつあるのは、在來のロシアのインテリゲンツィヤ、殊にトルストイを想ひ起さしめるものがある。ロシアのインテリゲンツィヤの心理状態に、ポリシキキ風の要素の含まれてゐる事は打ち消しがたい事實であるといはねばならぬ。(トルストイの非戰論とポリシキキの戰爭反對論との間には、その考への根據に於いて著しい相違のある事勿論である。随つてまたその實際の行動に於いても、非戰を主張するトルストイ教徒とポリシキキとの間には著しい相違がある。しかしそれはここには説かぬ。)

これを要するに、少くとも、反キリスト的な點に於いて、一種變態のストラキヤノフ派の面影を有

する點に於いて、またその心理状態のインテリゲンツィヤのそれに似てゐる點に於いて、ポリシキキキはやはりロシア的である。これを單に社會主義の最硬派として見る以外に、ポリシキキキは、その放散するそれ等の一種の氣分に於いて、可なり濃厚な純ロシア的精神の發露と見ることが出来る。自分はこの意味に於いて、日本の社會が今少しく眞面目にポリシキキキ一派の研究觀察せんことを望むものである。

## ロシア魂の神祕

魂の生活は神祕である。いかにありふれた一人の人の生活でも、その營みには、容易に他の思議すること  
をゆるさぬものがある。それは一つの國民の生活に於いても同じである。その生活の複雑多面な營みの契機  
には、外國の觀察者などの容易に窺ひ知ることをゆるさないものがある。祖國を深く愛した詩人チュッチェ  
フが、ロシアを歌うた詩の中で、

異種族の傲慢な眼なごしは

汝の謙遜な赤裸々の中に

隠見したはひそかに輝くものを

會得せぬであらう、氣附かぬであらう。

と言つてゐるのも、必ずしも無理ではない。ロシアは昔から選ばれたる見えざる建築師によつて、彼等自身にも見えざる石を積み重ねて、聖丘の上に建てられた國であるなどとも謂はれてゐる。ロシアの魂は、果てしない大地の髓に潜んでゐるとも謂はれてゐる。不可思議な東方的の國として、昔から「異種族の傲慢な眼なざし」に映つて来た國である。傲慢な異種族、即ち西ヨーロッパの前には、ロシアは奇異なる「東」であり、秘密と野蠻との「東」であつた。ロシアは今でもなほ、エキゾティックな、異常な鋭いあたらしさを有つてゐる東方の國として見られがちである。現に、日本の眼もまたかういふ風に見てゐるではないか。エキゾティックであるとする限り、そこには世界的なものよりも、尙遙かに多くの地方的な特殊なものを保留してゐると豫想する。然もその一方で、ロシアは昔から、何か大いなる世界的の使命を帯びてゐる無二の國であるやうにも謂はれて来た。帝國としてのロシアが、世界の謎と思はれてゐたやうに、もしくはそれ以上にポリシキキのロシアは、白日に見る世界の不可思議であるかの如く思はれる。由來ロシアは、ひとり傲慢な異種族にとつてのみならず、ロシア人自身にとつても、容易にその本體を會得しがたい一つのスフィンクスであるかの如く見える。とにかく、ロシアの世界に於ける位地は、さまざまの方面から見てもまだ甚だしく不確定である。ロシアはある大いなる世界的な問題の前に立つてゐるらしいが、その問題の何であるかも、今のところ不確定であるといはねばならぬ。ラテン文明やゲルマン文明に代つて、スラヴの文明が將來の世界に光りを與へるかどうか、スラヴの魂の力が世界の内面生活に革命を喚び起すかどうか。それ等も容易に言ひがたい。何のかくすところなく、己れを世界の白日に暴露してゐる今のロシアこそ、「汝の謙遜な赤裸裸の中に、隠見したまはひそかに耀くもの」の、容易に會得しがたきことを、尙更に感ぜしめる。

アルツイバーシエフは、千九百十七年以來の革命のロシアを、悪い意味での「イワンの馬鹿」であると言つてゐる。實際今のロシアには、葬ひの場で踊つてゐるやうなところがある。現實を支配する能力の不足は、ロシア人自身をすら驚かしめる。個人的利害を忘れねばならぬ時に、利己的な社會階級戦のために一切を忘れ、ロシア本國の四分の一以上、フランスの三分の一以上、全ベルギヤ、全セルビヤ、ルーマニヤの占領せられてゐる中で、無併合無賠償の平和を説いたものは、この「イワンの馬鹿」ではないか。この「イワンの馬鹿」の唱へるところは、或は最も重大な且つ必要なことであるかも知れない。事そのものは善いことでもあらう。ただ、この「イワンの馬鹿」は、時と場所とをわきまへない。前後左右を顧みない。いつでも、何處でも自分の思ふままを直ぐ行はうとする。葬ひの場で踊らうとする。而して、この葬ひの場での踊りの、最も甚だしいもの一つは、國命を賭して相争ふ世界の大戦の中での戦争の絶對的否定である。絶對の眞理としてのインテルナチヨナリズムの主張である。

戦争の絶對的否定は、ロシア國民の心の髓から涌き上る聲である。葬ひの場での踊りと見える戦争の絶對的否定は、ロシア國民性の破壊しがたき秘密の暴露である。而してまた、戦争の否定は、この「イワンの馬鹿」の心の秘密であるといふよりも、寧ろ生理的の秘密である。暴力に對するロシア人の反感嫌惡が生理的

であるのは、丁度、吾々にとつて人間の肉が味覚の上で反感を起させるのと同じである。人肉を喰ふに堪へないといふことは、利害の打算や前後左右の顧慮からでなく、少くとも吾々人間にとつて、生理的本性に基いてゐる。人肉を喰ふことが絶対に出来ないことはないかも知れぬ。しかし人間にとつて、人肉はたとひ喰ふとも味がない。味がないばかりでなくて、強い本能的な嫌悪を感じしめられる。人肉の無味を感じるやうになつたのは、恐らく人間性に起つた最も後の變兆であらう。ロシア人にとつて、戦ふ事は「人肉を喰ふ」ことである。人肉の喰ふに堪へざるが如くに、喰ふ可からざるが如くに、戦ふに堪へず戦ふ可からずと思ふのが、ロシア魂の本能的生理的な發露である。

人肉は喰ふ可からず、戦ひは戦ふ可からず、しかも今は最も戦ふ可き時である。戦はねば生きられないかも知れぬ時である。「イワンの馬鹿」の悩みはそこに在る。而してまた現代の悲劇的苦惱はそこに在る。現代の重苦しさはそこから生ずる。「イワンの馬鹿」はこの重苦しさを、世界の何人にもまさつて最も深く本能的に感じてゐる。葬ひの場で踊る「イワンの馬鹿」は、自から明らかに意識する事の出来ない世界の苦しみ、一人で背負うて狂ひ踊つてゐるのかも知れない。とにかく、そこに「イワンの馬鹿」の魂の人知れぬ悩みがあり、スラヴ民族の魂の祕密がある。

しかし、「イワンの馬鹿」は、自分の國を愛しないのではない。國民的自負、國民的矜持を有たないのではない。「イワンの馬鹿」には、偉大なる國民的矜持がある。「イワンの馬鹿」は、深く自分の母國を愛する。「イワンの馬鹿」が母國を愛するのは、その母國の民が、人肉を喰ふことを、何人にもまさつて甚だしく厭ふが故である。内心のインテルナチヨナリズム、戦ひの絶對的否定、平和の絶對的確保、世界各國民

の友愛——何人にもまさつて、これ等を必要とし重大とするが故である。「イワンの馬鹿」がロシアを愛するのは、葬ひの場で踊る自分の姿を、同じ母なる廣野から生れた兄弟に於いて見るからである。

十九世紀の中葉に於ける世界の思潮は、ロマンティックな愛國的懐古的精神に色どられた。それがロシアではスラキヤノフ、イリストラとなつて現はれた。スラキヤノフ、イリストラは、スラヴを愛する主張で、いはばスラヴ國粹讚美である。このスラキヤノフ、イリ、即ちスラヴ國粹讚美者の一派が、ロシアを讚美したのは、ロシア國民に地方的一國的精神が少くて、全人類的精神が最も豊かに宿つてゐると信じたからである。スラヴ國粹讚美者の一派の矛盾も、そこに在るやうに謂はれてゐるが、しかしとにかく、ロシア國民が國民的褊狭の氣風に乏しくて、全人類の超地方的精神を豊富に有してゐる點を力めてあげたのである。

ドストイェフスキも、ロシア人は全人類的であると信じ、ロシアの魂は世界的であると信じた。人肉を喰ふことを最も嫌ひ怖れたのはトルストイである。トルストイは、自己の肉體の重さと束縛とから脱しようとしたばかりでなく、自己を圍繞する國家的肉體の重さから脱しようとした。これはトルストイにとつては、深い必至の倫理的要求であり、また實に宗教的要求であつた。彼は人肉を喰ふことを思ひ浮べるばかりでも、總身の彌立つのを感じ、身慄ひをとどめることが出来なかつた。彼は非凡な強い肉體を有ち、非凡な鋭い肉體の感受力を有つてゐた。随つて彼は人に幾倍して深く鋭く生理的嫌悪を感じた。生理上の解脱を欲した。いかなるロシア人にもまさつて、また随つていかなる世界の人々にもまさつて、肉體の重さに苦しみ悩んだのは、ロシア人中のロシア人であつたトルストイであらう。

ロシアの政治は、昔から外來の異種族の手で行はれて來た。スラヴ民族時代に、北方スキューデンから迎へたワリヤグのことは言ふまでもない。近世の政治は、獨裁帝政は、凡てドイツ傳來である。メレジュコーフスキーの言葉で言へば、ドイツのカリケチュアである。侵略主義はロシア國民本來の素質から來てゐるものではない。ロシア國民本來の素質は、生理的に人肉を喰ふことを嫌惡する。ミリュコーフはダーダネルスの海峽を思ひ切ることが出来なかつた。今でも恐らく思ひ切れずにあるであらう。しかし、ロシア國民の本性から言へば、萬人のミリュコーフよりも一人のトルストイである。ダーダネルスの海峽を思ひ切れないミリュコーフよりも、「暴力を以て惡に抵抗する勿れ」と教へたトルストイが、「イワンの馬鹿」の本性に合致する。

スラヴの心持ちから言へば、世界は即ち普遍一如であり、*Mir* (世界) は即ち *Mir* (平和) である。人肉に對する無嗜慾、強烈な反感嫌惡、ここから戰爭の絶對的否定が生じ、ここに「イワンの馬鹿」のロシア魂の秘密がある。

### 三

ロシアは平野の國である。眼路の行くかぎり、更にまたその限りを越えて、ひれふす波の如く、大和田の海<sup>の</sup>如く、大地は果てしも知らず天に連なる。ロシアにして、初めて限りなく闊き母なる大地のみところを

思ふ。母なる國である、女性の國である。

ロシアの國原を支配するものは「廣さ」である。「限りなき廣さ」である。「高さ」はいづこにもこれを見出すことが出来ない。野から野へ、丘から丘へ、森から森へと、果てしなく連なり互つて、そのところどころに人が住む。殆どいづこを限りとも知られない。

「廣さ」によつて支配されるロシアは、地理的にもアナルヒズムの國である。没國家的の國である。自分の領土を整へ治めることの出来にくい國である。政治の權威は、いつでも第一に「高さ」である。海原のやうなロシアの國には、本來の「高さ」がない。群を抜いて崛起する力がない。即ちアナルヒズムの國である。「高さ」に倚つて支配する本來性がない。「高さ」を中心として統一するべきがない。「廣さ」はどこまでもただ「廣さ」である。アナルヒズムはあくまでもロシアの本來の魂の姿である。

ロシアの自由思想家は、國家的であるよりも人道的であつた。ドストイェーフスキーがさうである。バクレーニンがさうである。クロボトキンがさうである。而してトルストイの宗教的アナルヒズムに於いて、その最も明らかな表現を見る。ロシアのインテリゲンツィヤは、表面は實證論的思想にかぶれてはゐても、心の底では没國家的であつた。彼等が求める自由と眞とは、没國家的であり、人道的であつた。

トルストイを初め、彼等の凡ては、地上の「高さ」を求めない。地上の權威を求めない。彼等は寧ろ地上の權威を求めない。彼等は寧ろ地上の權威を不淨として怖れ斥ける。彼等の求めるものは天來の權威である。彼等の前には、神、而して民衆、神、而して人間、ただこの二つがある。この二つの間に、何等相對的な地上の權威の介在を必要としない。ロシアの大野原が、遮り蔽ふものもなく、直ちに無窮の蒼空を仰ぐが如く、

直ちに至上の天の下にひれふし従ふが如く、彼等の心はまた直ちに絶対の神の前にひれふし、その權威に従ふことを欲する。この「絶対の高さ」の外には、彼等は一切の「高さ」を拒絶する。

ロシアに正教的君主獨裁政治の發達してゐたのも、國民が「絶対の高さ」の外に、一切の「高さ」を建てることを拒絶したことを意味する。正教的君主獨裁政治は、ともかくも形の上で「絶対の高さ」の形を取つたことになつてゐた。「絶対の高さ」の外に、一切の「高さ」を認めないロシア國民は、ある者はそれを生命のない抜け殻として無視しようとし、ある者はその形に歎かされて安心し満足してゐた。何れにしてもそれは國民の内心生活から超越してゐた。國民は自からの内から「高さ」を築き上げようとはしなかつたのである。ロシアを支配するものは、あくまでも「廣さ」であつた。限りも知らぬ「廣さ」に住んで、求めて已まぬものは「絶対の高さ」の外にはなかつた。

ニコライ・ベルチャエフは、ロシアの求めるものは、自から自由を得ることではなくて、己れを打ち任せ、一切の實際的活動から自由になることであると言つてゐる。また、國家に於ける自由、乃至自由なる國家よりも、寧ろ國家から自由になること、地上のことを整へる煩累から自由になることであると言つてゐる。また、ロシアは花婿を待ち、夫を待ち、支配者を持つ花嫁であるとも言つてゐる。實際「廣さ」の外に「高さ」の支配力を持たないロシアは、そして「絶対の高さ」をのみ求めて已まないロシアは、本來自からのものでない何等かの「高さ」によつて、地上の生活の支配を受けねばならなかつたわけである。正教的君主獨裁政治がそれである。「吾等の土地は洪大也、ただ吾等の土地には秩序なし」と言つて、北方の雄ワリヤグを招請した昔から、政權はいつも外來的であり、もしくはドイツ的であつた。

本來アナルヒズムの國であるが故に、ロシアには正教的君主獨裁政治が成り立ち得た。國民が己れ自身の内から「高さ」を築き建てることを拒絶したが故に、外來の「高さ」が來り臨んだ。

現實を支配する能力の不足は、現代の「イワンの馬鹿」のみに見る特徴ではない。アルツィバシエフは、現代のロシア國民の類には、いくら教育があつても、いくら賢くても、すべて「イワンの馬鹿」が宿つてゐると言つた。類に「イワンの馬鹿」を宿してゐるのは、現代のロシア人ばかりではない。ロシア人には昔から「イワンの馬鹿」が宿つてゐる。

ただ、「イワンの馬鹿」が、あらゆるものを失ひ、あらゆる不仕合せに逢ひながら、結局最も仕合せになつたといふ、あの有名なロシアの昔話の筋を忘れてはならぬ。吾々の考へてみなくてはならぬのは、この「イワンの馬鹿」が、今までも、またこの後も、どういふ仕合せを求めて來、求めて行かうとしてゐるかの點である。

#### 四

大地は抱愛の母である。大地の愛は、土が有する神祕な力で、人間の生活のぬくもりはそこから發する。相寄り相集まつて、何ものかの抱愛の中に居らうとする民衆の本能は、おのづから大地への執着となる。現世の暖かい居心地よさは、母なる大地の抱愛にあまへる樂しさである。

お初聖なる母の身に

全身を以てあまへかからう、

母なる大地を歌つたソログープの小詩集『生みの土地』一卷は、母のふところに抱かれる安らかさ楽しさ甘さを、思ふかぎり歌つた本能の愛の讃歌である。彼がその序の中で言つてゐるやうに「生みの土地、それが如何なるものであらうとも、それは自分のである。それが自分に懐かしいのは、それがよいからといふではなく、それが自分の、生みの、特別の、唯一のものである。またよしそれが貧しく、暗くとも、そこに生きるのが辛くとも、それが何ぞ！ それは自分等の苦しみであり、自分等の悩みである。」實にそれがよいからといふではなく、それが自分の、生みのものだからである。肉身のものだからである。

一つの巢の雛のやうに、暖かく、居心地よく、懐かしく、寄り添はうとする心、同じ大地の母のふところに融けあはうとする心、——この動物的な本能的なぬくもりを求める心が、『生みの土地』の詩人の心であり、同時にまたロシア國民の心である。

ロシアの宗教は、十字架を負ふ宗教ではなくして、服従と稽首と禮拜との宗教である。精神界の勇者の宗教ではなくして、聖者たちの前に、聖像の前に跪いて十字架を切る宗教である。十字架を負うたキリストの宗教といふよりは、寧ろ生神女マリヤの宗教である。大地なる、ぬくもりある、母の宗教である。

母なる大地はロシアである。ロシアは生神女マリヤに象徴せられる。産み殖やすことと、ぬくもりある居心地よさと、——肉の力の聖化である。母のふところに懐かれた安らかさ楽しさの至上である。

ロシアの宗教では、信仰の個性的基礎が可なり弱いやうに見える。祈りと禮拜と、あらゆる場合に集團的

である。ひとつの巢に巢くふ雛は、互に離れず寄り添うて、そこに集團のぬくもりと心強さを得來たる。彼等はその集團から離れることを怖れる。そこから離れてひとり冷たい枝から枝へ飛びわたることを怖れる。内心生活の冷熱と動搖とを凌いで、信仰の個性的基礎を堅めて來ようとはしない。

聖者たちの前に、聖像の前に跪いて十字は切る。しかし、その聖者たちの言行にならうとはしない。自から聖者の域に近づかうとするよりも、ただ聖者の前に禮拜し跪拜する。丁度、自己の内から支配する權威を生み出すことによつて、自ら支配する力を得ようとはせず、自己を外來の權威に打ち任せ、一切の負擔をそれに託さうとするのと同じである。

ロシアの宗教には、宗教上の向上心が甚だ乏しいやうである、十字架を負うて行く道は、峻険である。集團的禮拜と祈りととの道は、平坦である。ロシアの大野は波の如くひれふして連る。宗教もまた、平野的であつて山嶽的でない。大地のぬくもりを離れず、人里の氣を離れない。母なる大地の匂ひがあり、また獸の膚の匂ひがある。異教徒的である。「聖なる母の身に、全身を以てあまへかかろ」宗教である。

## 五

「神聖なロシア」がある。「罪に漬れた、神聖ならざるロシア」がある。どちらもロシアである。メレジュコフフスキーに従へば、「神聖なロシア」は過去のロシアであり、「罪に漬れた、神聖ならざるロシア」は未來

のロシアである。しかし、この二つのロシアは、過去に於いても常に存在し、現在に於いても存在する。この二つの両立はロシアが異教徒的キリスト教國であることを語るものである。

天に對する愛と地に對する愛、出世間的の愛と世間に對する愛、神聖なものと神聖ならざるものとの混交はつきりしない、神と悪魔との區別が曖昧である。ロシア人の顔の輪郭に切り離したやうな鋭さの少いやうに、ものの境界が截然としてゐない。西ヨーロッパでは悪魔が誘惑する。惡の權化である惡魔が誘惑する。しかし、善の假面を着た惡、即ち反キリストが誘惑するのはロシアである。惡魔主義、乃至惡魔主義の文藝は、西ヨーロッパ、殊に天主教國に榮えた。反キリストは昔から東方ギリシヤ以來正教の國に出た。純然たる惡魔の誘惑は、正教のロシアでは見られない。ロシアでは、反キリストに對する識別が容易に行はれない。あらゆるものを、それが水の形でさへあれば、海綿の如くに受容してしまふ。ロシアは謂はゆる「軟らかい五體」の有ち主で、海綿のやうに抵抗力が弱い。反キリストらしいところのあるポリシキキの勢力を得たのも、また、あらゆる最近の事變に反應する社會の抵抗力の弱いのも、輪郭の鋭くない、五體の軟らかい、ロシアだからである。

輪郭の鋭くない、ぶよぶよと軟らかい、人のよいロシアを、私はモスクワの藝術座の舞臺で見た。ドストイェーフスキーの「ステパンチコフ村」の中に出て来る休職大佐イェゴール・イリーチがそれである。あの人のよい、骨までも軟かさうな休職大佐を苛めながら、しかも自から苛められつつあるものの如く想像することに、一種の性的刺激を感じるやうに見える、かかり人のフマー・オビスキンの無法な意地悪さをロシアだからである。

見てみると、この二人は到底別々に引き離しては考へられなくなる。この二人によつて醸し出される、一種の幽深い重苦しい、何もかもごちやごちやになつてしまつたやうな、やや苛立たしい気分は、丁度また今のロシアからも、往々にして受け取らずにゐられない気分である。ゴリーキーの「幼き頃」を批評したメレジコフスキーの論文の中に、

小さなアリョーシヤにも、何かお婆さんに足りないところのあるのが感ぜられる。どうかすると「お婆さんが何か強い事を言ひ、何か大きな聲で叫べばよいの」といふ氣がする。けれども、一向何も言はない。しまひまで黙つて辛抱してゐる。それで、お婆さんが辛抱してゐるほど、お婆さんはよけいに怒りつぱくなつて、罪が分らなくなつて行く。お婆さんは神聖ではないが、しかし何だか神聖なやうである。お婆さんの主な罪は、罪にあるのではなくて神聖なところにある。彼女が神聖であればあるほど、その周囲はますます罪深いものとなつて行く。

といふ一節がある。お婆さんもロシアであり、お爺さんもロシアである。フマーもロシアであり、イェゴール・イリーチもロシアである。しかし、「一向何も言はない。しまひまで黙つてゐる」「大きく、軟ら身でぶよぶよしてゐて骨がない」お婆さんの方が、一層多くロシア的である。イェゴール・イリーチの方が一層多くロシア的である。少くとも、今までのロシアではさうであつた。

今までもロシアでは、「神聖」はややもすると無性格的善良を意味した。従順であり、奴隸的であるが故に、「永く耐へ忍んで來た生みの國」である故に「神聖」であるかの如く思はれがちであつた。

「ステパンチコフ村」の中で、イェゴール・イリーチの邸内に使はれてゐる少年のフアラレイは、丁度この無性格的善良そのもののやうである。その意味で、フアラレイは、「神聖」であり、「神聖なロシア」



である。フ、マーが冷やかし半分に、「フ、ラレイ、返事をしろよ！ お前はよい男か？」と言つて尋ねると、フ、ラレイはいつもの如く泣きじやくりをしながら「よい男」と答へて、また泣き出してしまふ。

フ、ラレイは善良である、「神聖」である。しかしこのフ、ラレイの善良、フ、ラレイの「神聖」は、どことなく不安心を感じしめる。イ、ゴール・イリー、チの善良もさうである。お婆さんの神聖もさうである。そこにはお爺さんが出て来て、「よけいに怒りつぽくなつて、譯が分らなくなつて行」かすにはゐられないやうなところがある。フ、マー・オビスキンがゐて、家中にのさばり、人を苛めながら自分で苛められてもゐるやうに想像して、一種の満足を感じずにはゐられないやうなところがある。それ等の人々が神聖であればあるほど、その周囲はますます罪深いものとなつて行くやうなところがある。

この不安を己れに感じたフ、ラレイ乃至イ、ゴール・イリー、チの、自己に對する叛逆が、即ちロシアの革命である。

革命は反抗であり、犠牲である。革命をつづけることは犠牲をつづけることである。革命はソログロブの言ふ如く雷電であつて、雷電は久しく續いてはならない。フ、ラレイやイ、ゴール・イリー、チは、この雷電に打たれて己れを亡ぼすかも知れない。しかし、いかにこの雷電が長く續かうとも、すべてのフ、ラレイ、すべてのイ、ゴール・イリー、チが死にはしない。無性格的善良のフ、ラレイはたとひ死んでしまつても、新しいまつたく違つたフ、ラレイが、新しい別の時代を始めるであらう。ともかくも革命は、フ、ラレイにとつて、自己の本性の價値の批評である。自己の本性の價値を批評し得る能力の自覺である。ロシアの革命は、今尙フ、ラレイの不安と自己に對する叛逆との、傳播と混亂と葛藤とを暴露しつつあるに外ならない。

## 六

ロシア魂は絶対究極を求める。あらゆるものに於いて絶対究極を求める。戦争の絶対的否定。神聖な絶対的權威の渴望。而してまた絶対的自由。

しかしながら、歴史の経過の上では、實際の生活の上では、相対的な中途半端なものが一切を支配する。相対的な中途半端なものしか得られない。随つて、戦争の絶対否定は、現に見る如く、國の内外に於ける戦争の連続となり、ドイツの武力に對する屈從となつた。また、絶対自由の要求は、屢々奴隸的服從となつた。而してまた、神聖な絶対的權威の渴望は、相対的な、しかしながら絶対的權威の形を取つた反キリストへの服從となつた。神の國は絶対である。求めるところは即ちこの絶対の神の國であるが故に、相対的な中途半端なものすべて打ち棄てて顧みない。しかも實際の生活は悉く相対的の連続であるから、つまり實際の生活を支配し制統することをしないことになる。即ちそれ等の實際的生活の支配には無頓着で、誰にやらせてもよいことになる。ロシア人の生活が、堅實な基礎を歩々に堅めて行くところのないのも、理想と實際との間に甚だしい距離のあるのも、その他いろいろの點で生活に矛盾のあるのも、すべてこの根本の魂のさせるわざである。

ロシア魂は絶対的なものを求めて、却つて常に相対的なものために隷從せしめられてゐる。しかも自か

らは、絶對的な究極なものに於いては自由であると信じて安んじてゐる。信仰の自由、思想の自由、精神の自由をさへ得れば、他の一切の生活は獨裁君主の支配に任してよいと考へた。十九世紀中葉のロシアの一部の思想家の心にも、やはりこのロシア魂が宿つてゐるのを見る。ロシア魂の求める國家は神聖な絶對的な權威の支配するものであるから、その得られない現世では、動物的な、暴壓的な穢れたものでも已むを得ないとする。「神聖なロシア」がいつでも「獸的なロシア」を半面に有つてゐるのも、一つはさういふところから來てゐる。心の上で絶對の境を描くばかりであつて、それを歩々に實現しようとするのでないから、その絶對の境はいよいよ實際の生活から離れた、遠い究極のものとなる。その一方で、實際の生活は他力に任せて打ち棄てて顧みないから、ますます自己の要求とは遠い淺ましいものとなる。これが少くとも今までのロシアの事實である。而してこの事實の一切を暴露したのが革命である。

「イワンの馬鹿」の葬ひの場での踊りは、己れの求める絶對究極のものを、直ちに立ちどころに實現しようとするものである。久しく心に描き求めてゐた絶對究極の境を、直ちに立ちどころに地上に實現しようとするものである。「イワンの馬鹿」は、すべてのロシア人の額に宿つてゐたかも知れない。革命は、その潛んでゐた「イワンの馬鹿」を跳り出さしめた。殆どすべてのロシア人が「イワンの馬鹿」になつた。

「イワンの馬鹿」の中でも、この絶對究極を求めてやまないロシア魂を、最も明らかに表現してゐるものはポリシキキである。その態度には一種の宗教的氣魄がある。少くとも、絶對性、究極性を帯びて、徹底と充實とを期するその態度の上に、一種の情熱的な力がある。彼等は全き人間を抱擁し、人間の一切の要求に應じ、その一切の苦惱に答へようと欲するが如くに見える。また彼等は、その主張するところを以て、單

に一つの政策としてではなく、世界觀人生觀、として提出するもの如くにさへ見える。また彼等は、部分であり、部分の中に在ることを欲せずして、全であり、唯一無二であらうとするもの如くに見える。

## 七

「イワンの馬鹿」は、何故にあの古いロシアの童話の終りで、二人の兄弟の誰よりも多くの幸福を得たか、それが不思議であるやうに、ロシア魂もまた一つの神祕であるとも言へよう。ただ葬ひの場で踊る「イワンの馬鹿」は持てあますとも、しかし何人も「イワンの馬鹿」を憎むことは出来まい。この憎むに憎まれないところが、「イワンの馬鹿」の力であり、彼の幸福の祕密の宿るところである。ロシア魂もまた、この「イワンの馬鹿」の如くではあるまいか。ロシア魂には病ひがあり、悩みがあり、呻きがある。しかし、そこには憎むことの出来ない、混沌に似たる偉大なる何ものかがある。魂は見ることも觸れることも出来ない。やはりまた、チリチリの歌つたやうに、

知識でロシアは會得されない、

ありふれの尺度では計られない、

ロシアには特別の姿がある――

ロシアはただ信ずることが出来る。

と言ふほかはないかも知れぬ。

## 現代ロシア文學の印象

### 1 現代文學の基調

千八百九十二年、メレジュコフスキーは、「現代ロシア文學の衰頹の原因及び新潮流に就いて」を書いた。この論文で取り扱つてゐる「現代ロシア文學」は最も新しいところでも、チエーホフとガルシンとに及んでゐるに過ぎない。丁度そのころは、三卷の短篇集を残して、三十三になつたばかりのガルシンが自殺してから、四年経つか経たぬ頃であつた。また、チエーホフは「決闘」を出したり「六號室」を書いたりしてゐる頃であつた。新詩壇の先驅者バリモントの處女詩集は既に出てはゐたが、まだ新機運の源となるだけの力を藏してゐなかつた。しかし、メレジュコフスキーのこの論文は、ロシア最近代の批評壇に現はれた第一の

新聲で、「丁度文壇全體が、この論文の出た頃を轉機として、吾々自身にとつての「現代文學」の時期を開いたことになつてゐる。この意味だけから言つても、メレジュコフスキーは現代文學の先驅者であり開拓者であつて、肉にも血にも魂にも、溢れるばかりに近代的な人間味と近代的な藝術味とを藏してゐる近代人であつた。

メレジュコフスキーが、あの論文で、當時の文學の衰頹のおもな原因としてあげたのは、功利的、傾向的乃至指導的な批評の暴威である。これがあるがために文壇の鑑識評價が酷しく低下して、價值の高下の判断がその據るところを誤るに至つたといふのである。實際今から三十年ばかり前のロシアの文壇では、文學はある一つの特殊の義務を負はされてゐた。この義務といふのは、社會的理想に奉仕することである。而してこの義務を全うするための表現の様式はリアリズムである。社會的理想への奉仕と寫實主義と、この二つが當時の文壇を支配した律法で、これが取りも直さず當時の批評の標準であつた。而して當時の批評家たちは、ミハイロフスキーを初めとして、單に文學の批評家であるといふばかりでなく、また直ちにひろく社會生活の批評家であり指導者であつて、しかもまた唯一の批評家指導者であつた。彼等は眞に時代の木鐸として仰がれ、その言論の權威はただならず重かつた。彼等の言論が文壇を壓したのは、一つはかやうな特殊の事情からも來てゐる。

かくの如き批評に威壓せられた文壇では、作家は多く自己の観るがままに人生を表現するの自由なる寫實主義に往かず、寫實主義ではあつても、それは社會を覺醒せしめる意圖を表現するための寫實主義で、つまり傾向的功利的である。奥深くひそめる内心の自己の聲を發するといふよりは、特殊の社會的目的に副ふための敘寫もしくは詠歌が尊ばれる。あらゆる個人的な独自の内生活はあと廻しにされ、閉却される。個人的な独自の主觀の湧沸はおさへられ、觀察の範圍は一定の社會理想に限られる。作家の個性は一面にのみ局限せられて、自由な多種多様の自己表現を許されない。これが千八百八十年代のロシア文壇に於ける謂はゆる「日常平凡な寫實主義」の跋扈であつて、メレジュコフスキーが指摘した功利的、傾向的乃至指導的批評の暴威はここに見られる。

しかしながら、かやうな個性に對する壓迫が、いつまでも堪へ得られる筈はない。功利的批評の威壓がまだその力を失つてしまはぬうちに、既にはやく反抗の芽を吹き出して來たものは、メレジュコフスキーがあの論文を書いた千八百九十年代の青年文學者である。彼等の反抗は、要するに個性の壓迫に對する自由な個性の反抗であつた。彼等は自分の内にある自由な心の生活の複雑と多様とに、自から驚き自から喜び、そのあるがままを、内心の生活の一切のあるがままを、何の憚るところなく表現するの權利を、始めて自から

認めた。その歌はんと欲するところを、何の憚るところなく、小鳥の歌ふが如くに歌ふことの權利を、始めて自から認めた。——藝術家が公衆に與へ得る最も價値あるものは、その魂の最も深き奥底に生れ、その個性の髓のうちに實る。藝術家の個性に獨得な、繰り返すことの出來ない、無類な、内心の消息こそ、最も貴きものである。何故かといふに、個性に獨得な内心の生活のどん底で、藝術家ははじめて眞に重大な獨創的な生命に接觸し、その魂の最も深い震動のうちに、はじめて眞の事物の本性は啓示されるからである。それであるから、藝術家の内心の生活の物語や歌は、ただ心耳を澄まして敬虔に聴くべきであつて、外からとかくの注文を出すべきではない。その魂の響きが如何に奇異であらうとも、それがまことの魂の響きである限り、そこには何等かの未來への啓示があり、物の本質の暗示がある。藝術家の個性のあがきには魂が沸き立ち、その底からは命のかけらが跳り上る。——かういふのが、自由な個性の反抗主張の聲である。

この主張が、今までの傾向的寫實主義と全くその根據を異にし、人生觀を異にしてゐることは明白である。功利的、實用的、制限的であつたのに對して、全的であり根本的であり直覺的であつて、明らかに藝術上の新しいロマンティズムである。メレジュコフスキーもミンスキーも、バリモントもブリューソフも、この意味ではひとしく新ロマンティズムの一族である。而してこの新ロマンティズムの由來するところが、ニーチェの思想であることを忘れてはならぬ。

ロシアの寫實主義は、西ヨーロッパ殊にフランスあたりの寫實主義と比べて、大分その趣きを異にしてゐると謂はれる。これをロシアの寫實主義に固有の病所の方面から見ると、ロシアの寫實主義には、社會的理想の實現のためにといふ一種の社會道德の傾向が、あまりに根深く附き纏うてゐる。これがまた一方から言へば、文學上の病所であるに拘らず、その種の寫實主義文學を社會に勢力あるものとならしめた根據でもある。しかしこの傾向的寫實主義が、ロシア文學に一種の特色を與へたとともに、またどの位ロシア文學の自由に深まり自由に伸び行くことを妨げたかも知れない。西ヨーロッパの寫實主義が一轉して自然主義となつたのは、褊狭な傾向的道德觀から開放された寫實主義へすんだものと言つてよい。ロシアでは西ヨーロッパのやうな自然主義の文學は生れて來なかつた。ロシアでは社會理想の實現のためといふ道德主義の中からそれを表現するに必要な、また都合のよい寫實主義が発生した形であつた。少くとも千八百八十年代までのロシアの批評家は、すべてかくの如き傾向的寫實主義の立ち場に在つて作品を評價した。チエーホフに對するミハイロフスキーはもとより、あの特色的な「ロシア最近文學史」を書いたスカビチーフスキー等の態度が、明らかにこの立場を示してゐるものである。

かくの如き批評家と、かくの如き批評家の言説に指導せられて來た一般の公衆とが、千八百九十年代に出

でた新文學の先驅者たちを如何に迎へたかは、多く言ふを要せぬ。抑もこの新ロマンティズム運動の特色は當然沒道德的（必ずしも反道德的ではない）であつた、また反社會的であつた。而してこの沒道德的、反社會的な新ロマンティズムの傾向は、單に創作の上ばかりでなく、批評の上にもまた、今までの反動として、著しい一つの運動となつて現はれて來た。

メレジュコフスキーは、功利的な批評家の暴威を揮ふ事を難じたが、全く當時に於いては、文壇の批評家は悉く社會的理想の宣傳者で、功利的な道德主義の立ち場から文學を評價した。帝政時代のロシアでは、政治上社會上の問題に就いての言論の自由は、筆の上でも舌の上でも殆ど全くなかつた。ただ僅かに文壇の批評によつて、政治上社會上の問題を論ずることが出來た。この意味で文學批評は唯一の言論の形であつた。唯一の許されたる、また民衆を惹きつける力ある言論の形であつた。

しかしながら、これを先きにしては九十年代から發生した個性の主張や、沒道德的反社會的傾向に伴つて、これを後にしては千九百五六年頃からの一般言論機關の自由の擴張とともに、この批評界の特殊の事情は著しく消滅して行つた。議會その他の公けの代議制度が、曲りなりにも一方に言論のはけ口を與へた。新聞雜誌の上でも、自然ある程度までは時事の評論が行はれるやうになつた。而してまた、個性の自由の主張は、批評の上でも、批評家の自由な鑑賞と作品の自由な享受とを主張せしめた。作品に、時代と社會との關係乃至影響といふ方面を見ることなく、ただひとへに作家の表現した内心生活の消息を味はひ知らうとせしめた。その結果、批評の上では、在來の社會理想を挿んでの批評に對して、純然たる心理的乃至美學的の鑑賞批評、さらに進んでは印象批評が起つた。この傾向の現代の代表者としては、ツルゲーニェフの社會的傾向を忌ん

で、その「狩獵家の覺え書き」をも傾向的な作品として、殆どそれに言及だにしなければならぬ。アイヘンワリドを挙げねばならぬ。チュコーフスキーもまた印象派の批評家として可なり知られてゐるが、しかし新批評壇の代表者としては先づアイヘンワリドに指を屈せねばならぬ。アイヘンワリドの代表作としては「ロシア文學者のシルーエツ」三巻があつて、散文詩のやうな文章は、丁度細く強く且つ光澤ある絹絲にも譬へようか。時々思ひ切つて大膽な、寧ろ無謀なほどの獨斷があるに拘らず、その自由な鑑賞、清新にして透徹せる識見には、批評の態度の上で反對の立ち場に在るものも敬服せしめられる。而してこの批評家に最も著しい特色は、その鑑賞の底を貫いて、藝術に對する戀の如き熱愛の横溢してゐることである。

#### 四

個性の自由の主張、褊狹な道德的傾向からの解放、これはロシア文學をその正道に引き出したものである。勿論この正道を歩んだものは、それまでのロシア文學に少からずある。プーシキンも、ゴーゴリも、フラト、チュチーフの二詩人も、ドストエーフスキーもトルストイも、皆おのづからこの正道を歩んで來た。しかし多くの批評家は、彼等の作に何等かの社會的理想を發見しようといふ力めたり、またはフラトやチュチーフに對してのごどく、或は默殺し或は嘲笑した。舊來の傾向的批評家の威嚇は、たとへばツルゲーニェフの如き大才をすら多少脅かした氣味がある。舊來の文壇の社會道德への奉仕の主張は、それが主義的であるだけ

に、たまたま一二の天才が出現しても、その事實だけでは動かかなかつた。ドストエーフスキーの出現が、その周囲の傾向的主張を弱めなかつたやうなものである。それにはやはり他の新しい主義主張であたる外はなかつた。而していまはその新しい主張が、在來の傾向的主張を壓して、文壇の空氣を自由にし、清新にした。今は何人も來たつて文壇に自由に呼吸し、製作することが出来る。しかし、自己の個性の表現は、ひとり自己の魂の力のみがこれを能くする。藝術は即ち人格であり、その作家の生活の深さである。

そこで十九世紀の末から現在へかけてのロシア文壇にも、その内心生活の深さから見て二三流以下の作家が著しく殖えた。いはば内心の生活に對する好奇心とでもいふべき心持ちから、讀者の方でも作家の心の告白を聴くことを求める。それは、一般の人々の前に、今までにない精神生活の新野が拓かれて、その光景を、自由に思ふままに貪り眺めてもよいことになつたわけであるから、未來派の詩人と一時謂はれてゐたイーゴリ・セーウエリヤニンのひと頃の人氣も、蔽ひかくさない人間内心の光景に對する欲望に基いてゐると見るべきではないか。彼の詩には、さほどの内心生活がうたはれてゐるとは思へない。多くの場合に於いて、空虚の寂しみをさへ感ぜさせられるものである。しかし、彼の歌ふところは、ともかくも彼自身の内心の生活である。しかも彼はそれを極めて自然に、少しの無理なく、打ちつけに安らかに歌つて行く。しかも、自からの内心の消息をあからさまに歌ふことは、何人も奪ふ可からざる彼の權利であるといふ十分の自信を以て。セーウエリヤニンの力は、實にその十分な自信に在ると言つてよい。作家も心の告白を欲し、讀者もまた心の告白を求める。その心は浅い軽いものであらうとも、ともかくも心である。與へられた社會理想ではない。一定の傾向道德ではない。そこに現代詩人の強みがある。

現代のロシア文學は、萬華鏡の如く多種多様である。しかし、これを一代前の文學と比べてみると、メレジュコフスキーの謂はゆる功利的批評家の暴威を脱して、個性の自由を限りなく許し、主観の自由を限りなく認めたところにその第一の基調がある。現代人の病弱、疲勞、不安、頹廢、興奮、恐怖、喜悅、憧憬、摸索、あらゆる内心の事實を、それが内心の事實であるが故に、統一のないままにおのおのをして表現せしめたものが、現代のロシア文學である。而してこの統一のない多種多様の主観の表現が、或はまた現代の世界の文學、世界の思想の特色であるかも知れない。

## 2 個性中心の批評

一 昨年暮から今年の正月へかけて、ロシア全國中等學校のロシア語及びロシア文學の教師の第一回大會が、モスクワで開かれたときには、その會議の席上でも、モスクワ及びベトログラードの新聞の論壇の上でも、文學教授の方針乃至方法に就いて、可なり盛んな論争があつた。この中へ、その教師會議へ爆彈を投じたものは批評家アイヘンワリドであつた。彼は「學校に於ける文學」といふ小論文で、文學は必修的課業と

すべきものではない、一定の教課規定に従つて生徒に課すべきものではない、文學は「魂の花」である、語學は教課として教へることが出来るし、また教へねばならぬが、文學を教へることは不可能である、文學はただともに楽しみ味ふべきであると言つた。これが彼の謂はゆる「教師會議」への爆彈であつた。

文學の社會的任務を重大視する在來の批評家は、今ではもう殆ど文壇にあとを絶つたと言つてよい。しかし、あの舊批評家の精神衣鉢を承け繼いでゐるのは、各大學を根城とする文學史の教授たち、乃至大學以外の多くの文學史家である。それも今は教學の方面に立てこもつて、文壇とは殆ど没交渉であると言つてよい。併し、何かの折には、その謂はゆる「社會派」の批評が、謂はゆる「唯美派」の批評と相搏つ。「社會派」の見かたには、傳統があるだけに、可なり執念き力があつて、まだ全くこれを無視することは出来ない。教師會議を機會としてのこの二主張の争ひなども、依然としてこの二つの力の對抗を示してゐる。大學教授中でも、ともかく一方の批評家として知られてゐるのは、たとへばベトログラード大學のロシア文學教授ウエングロフである。この編纂好きな、勤勞に於いてすぐれてゐる教授の、可なり得意であるらしい「ロシア文學の英雄性」などが「社會派」の代表と見られる。この教授の編纂に成る未完の「ロシア二十世紀文學史」の第一巻の序で、新代の批評家を論じた中に、アイヘンワリドが、「狩獵者の手記」を無視し、もしくは貶したといふ點を特にあげて難じてゐるのなども、この教授の立ち場からすれば至當のことである。

アイヘンワリドの批評上の代表作は、『ロシア文學者のシルーエツト』三卷である。而して、彼の批評上の立ち場を最もよく自ら説明してゐるものは、その第一卷の序論である。

文學を科學として研究しようとするやうな、大學教授たちの態度に對しては、アイヘンワリドは、この序論のはじめで、藝術の本質がそのおの作品に於いて唯一無二であり、藝術に主要なのは、それが互に類似してゐることではなくして、それが己れを他と區別する特色を有することであると説いてゐる。而して、もし謂はゆる文學の研究が、文學の社會的影響を主題とする限り、それは文學そのものの研究ではなくして、文學の社會に與へた影響の研究であるから、隨つてその研究は、文學の歴史ではなくして社會の歴史であり、作者の歴史ではなくして讀者の歴史であることになる。これは既に社會學であつて、文學ではなくなる。文學の批評は評價であつて、それは嗜好であり、證明すべからざる主觀的印象である――。

――テーマが文學を人種、環境、時代の三つの要素の所産であるとしたのはこれ等の影響を受ける深い動力、即ち個性を全く閉却したものである。文學といふ個性の力の所産を、社會的集團的勢力で蔽はうとしたものである。勿論一切のものは相影響する。ただ問題は、その影響するものが、藝術の本體を成り立てしめる必至の條件を成してゐるかどうかに在る。社會的勢力の下に藝術が生れ、藝術の本質は社會的教化に在る

として、専らその方面の研究にのみ往くものは、時代そのものをも藝術家の個性をも、確に把握することが出来ない――

――人間は生れながらに藝術家である。人間の心は、魂は、常に休むことなく何ものかを思ひ、描き、夢みつつある。魂は動力である。休みなき動力である。藝術はこの動力から生れる。もし藝術を通ずる法則が必要なら、藝術創作の心理状態――思ひ、描き、夢みる心理状態を知ることが出来る。しかも、魂が何故に如何にして一つの藝術を作り出したかは、到底語ることは出来ない。魂は依然として知られざる偉大なる偶然である。魂の法則はない。隨つてまた藝術の法則もない――

――言葉は行爲よりも先きである。藝術は人生を作る。人生の反映が藝術となるのではない。藝術は率ゐて進む將軍である。文學は常に前へ進む。文學は「永久の未來」である。文學の文學たる本質は、時處を絶し、作者は常にまた到るところに生きてゐる。作者は自己の同時代の人々に同時代の人でなく、自己の同國の人に同國の人でない。天才は不朽であり、また孤獨である。天才の悲みはそこに在る。もし天才が、その時と處との制限を離れては力を失つてしまふやうなら、それは天才ではない、藝術家ではない。ただ絶對のもの、永久なもの、それが作者の力と大いさを示す――

――いかに個性に及ぼした環境や時代や人種などの影響を精細に研究してもいかにそれ等を詳しく知つても、結局はやはり作者その人へまで往かねばならぬ。而して作者の個性は、解剖し證明することの出来ない最後のものである。個性は説明しがたい。いくら何故といふ疑問を出しても、個性の特質を説明して満足を得てはくれない。個性は絶對な單位であり根元である。何故かうであるかといふ不可決の問題を棄てて、



ただかくの如くあるといふことを、即ちその作者の何人であるかを説き語る外はない。勿論作者の個性に及ぼす影響のあることは否定するわけには行かない。しかし、問題はその影響にあるのでなくて、それを受ける本體の個性にある。何人が環境の影響を受け取るかが主であつて、その影響が如何なるものであるかが主ではない。

上のやうな考へかたは、いふまでもなく、藝術家の個性の絶對的尊貴、藝術家の個性の能力の無制限を意味する。而して、その個性は、アイヘンワルドの謂はゆる「小環境」、即ち時代とか土地とかの制限的環境と連結してそこに初めて存立の意義を得るのでは勿論ない。個性は、謂はゆる「大環境」即ち人間の本性と直ちに結び附く。時と處との制限に拘らない個性の底に、深き廣き「大環境」が開ける。藝術家自らが動かす力であり、その自己の力によつて「小環境」を支配し統制して、直ちに「大環境」に徹する。「藝術家はいつでも勝利者である。」

### 三

批評は科學的方法によつて藝術を分類統一することも出来ない、またその創造の魂の祕密を説明することも出来ない、ただその魂の所有者である作者が何人であるかを物語ることが出来る——この考へかたは、實に印象批評の態度に外ならない。既に個性の無二絶對を認めるが故に、これを取り扱ふ批評家の態度の上に

も、個性の無二獨自性を、遺憾なく受け入れることの出来るだけの用意がなくてはならぬ。藝術の上では、この中心たり根幹たるものは、藝術家の個性といふ理知の分解を絶した力である。作品及びその作者たる個性、それが最も肝要なものであり、疑ひを容れない事實である。「そこには傾向があるのではなくしてただ作者がある。言ひ換へれば、作者の數だけ、それだけ傾向がある。」個々の作者が自からの道を選み定める。彼の言葉によれば、作者は「生きた唯一無二のもの」であり、「例外」である。

一體ロシアでは、文學もその批評も、社會的興味のために毒せられて來た。アイヘンワルドに従へば、そのために美に感應する能力を失ひ、人間の本性に固有のものを狭めた。美しいものを無駄なものと思ひ、そこに罪惡と空虚とをのみ見た。奴隸は暴行者である。政治的の奴隸であつたロシア人は、藝術鑑賞の上では暴行者であつた。ピーサレフのやうな偏僻な立ち場の批評家——寧ろ時事評論家が出て、ブーシユキンやチヌフチエフやフエットなどを、むだ花か何ぞのやうに言つたのがそれだ。チエルヌイシエフスキーがツルゲーニエフの「アーシヤ」の批評と稱して書いた「あひびきするロシア人」といふ批評などがその暴行の好い證據だ。凡て社會的興味のために、藝術を見る眼がくらまされてゐたのである。集團の生活を以て個性の内心の生活を磨けることを畏れなかつたのである。

作者の個性の問題に關係して、作者の傳記の研究が往々過大に重要視される。この點に就いても、アイヘンワルドの考へかたは、どこまでも個性の力の主張に外ならない。彼の考へに従へば、傳記の研究が全然無用であると言ふのではないが、しかし作者の外生活の記録は、それだけではまだ何の意味をもなさない。重大なのはその内面の生活で、それは作者の意志に拘らず作品が語つてくれる。おのおのの作品はその創作

者の自傳に外ならない。外面の事實に意味を生ずるのは、それを如何なる個性が經驗するか、如何なる特殊の精神生活を藏する人がそれを觀照し經驗するかによつてである。作者の私生活を知るのは興味のあることであるが、多くの場合好奇心の満足を求めることになり易い。勿論傳記の研究が、作品の内容やその由来を説明するの助けになることは事實であるが、それによつて作品そのものの不朽な本體をどうすることも出来はしない。たださうかと言つて、傳記を知つてゐて強ひて知らぬふりを裝ふ必要はない。傳記をのみ土臺として作品を見ることを忌むのである。批評家はいつでも傳記よりはその作品を第一に重んじなければならぬ。文學は文學の範圍でその本體を現はす、必ずしも傳記の穿鑿にすがる必要はない。この意味では、ゴンチャロフがその私人としての生活、書簡類を一切秘して公けにすることを許さなかつたのは正當である。所詮「作者の生活は手段であり、目的はその作品である。」世間の歴史的文學研究は、とかく目的を遠く離れて手段にこだはる。傳記、諸種の影響、社會思潮、さういふものは第二であつて、中心はいつでも作品である。作品そのものに行くことが、——この内在的方法が、最も自然な正當な方法である——

——藝術の創作は、藝術家にとつて、その根柢に於いては無意識的である。批評は意識的である。批評家は第一の、最もよき讀者である。この意味で作品は何人のためにも批評家のためである。而してまた、「詩は詩人の爲めである。聽者にとつて言葉は啞である。」讀む者の心に藝術家的天分がなかつたら讀者は作品を了解することは出来ぬであらう。それ故に、讀むすべを知らない、即ち批評家であり得ないものが、文學の歴史の研究などをすべきではない。——實際ロシアでも、大學の教授とか、文學史の研究者といふやうな人は、多くは文學を讀むすべを知らぬ人で、アイヘンワリドの謂はゆる「小環境」の穿鑿に没頭して、

藝術の眞味を味ふ事は少しもしない。丁度日本の多くの國文學者たちがさうであるやうに、「文學の研究」のために「文學を味ふ」ことを輕蔑してゐる「言葉の響」が少くない。ロシアの大學の教授たちは、口ぐせのやうに文壇の批評家に學術的研究がないと言つて輕蔑する。恰かも文學の學術的研究といふものが、無條件的に可能でもあるかのやうに、また、文學の研究が、批評とは全く段の違つた立派なすぐれたことでもあるかのやうに。アイヘンワリドが、批評家であり得ないものが、文學の歴史の研究などに従事すべきではないと言つたのも、その邊の消息を指したのである。

## 四

アイヘンワリドに従へば、讀むといふことには限りがない、「一つの作者を讀み切つてしまふことは決してあり得ない、何故かといふに、作者はをはりを有つてゐないからである。眞の詩人には酌み盡すべからざるものがある、それ故に彼は常に吾等にとつて新しい。」作者は固定したものでもなければ、一定の印刷せられた本文だけを意味するものでもない、作者は魂である。精神生活の一個の渾然たる世界である。動く力であり動かす力である。日月星辰の動き照つて限りなきやうに、作者もまた無窮に動き照る。詩人は日に日に新しき光景を讀むものまへに展開する。しかしてこの事實は、讀むものの——批評家の主觀の發動を意味し、またそれを是認することになる。是認するばかりでなくして、批評家の主觀の發動がなくてはならぬ

ものであることを意味する。作者の主観と讀者（批評家）の主観との相逢ふことによつて、作品の眼に點が點せられる。「文學上の作品は常に對話である、作者と讀者との。後のものは初めのものに助力する。藝術家の創作は、丁度彼が世界に投げかける問ひのやうなものである。しかしして世界は、自己の印象を以てそれに答へる、響きに對して反響を與へる。」勿論この反響は、その反響を與へるものの主観に從つて、或は豊かに或は貧しく、或は高く或は低く、或は充ち或は空しい。實に作者と讀者との大小は相對的である。一は他なくして發動し得ず、一は常に他を定める。讀者は作者を作る。批評家は作者の潜む力を感じる。固定した、客觀的な、一定不變な作者といふものは實は存在しないと云つてよい。彼はいつでも獨りであり得ない。作者は吾等と共に住み、吾等の中に住む。作品の効果は、いつでもこの二つの魂の接觸から生ずる。藝術の鑑賞が主観を離れて不可能であることは、これでも分る筈である。批評上の問題は、その主観がどんなものであるか、誰が作品を受け入れるかに在る。この作者と讀者との主観の接觸融合によつて藝術鑑賞が行はれるといふ見かたは、藝術の批評に作者と讀者（批評家）との個性を中心とする意であつて、印象主義批評の重大な特色をなす。作品が永久に新しいといふのは、作者の動力の讀者の心にあたへる印象が、次から次へと變り行くからである。作品を讀み了へ讀み切るといふことのないといふ意味もこれに外ならない。印象はさまざまであつて、同一の讀者に於いても固定するといふことがない。第一の印象と第二の印象とは異なり、更に第三、第四の印象も異なる。個性の内容が固定しない限り、印象の縁はどこまで續いて行くか、何人も見定めることは出来ない。印象は深くなり、廣やかになり、新しくなり、新しい秘密をその作品のなかから見いだす。ただ、その印象はどこまでも眞摯誠實であらねばならぬ。主觀的印象によつて藝術の力、藝術の

味ひが見出される、これを指いて文學も藝術もないと言つてよい。——アイヘンワリドの印象的批評に對する解釋は、ほぼ以上に盡きる。

## 五

既に作者及び批評家の個性を重んじ、主観を重んじ、批評の方法としては印象主義であるが故に、アイヘンワリドは、文學の研究に時代的概観を試みるやうなことは全くしない。彼の代表作が「ロシア文學者のシルーエット」といふのも、またこの主張に裏づけられてゐる。しかししてその三卷の内容は、徹頭徹尾個々の文學者に就いての個人評論である。彼がツルゲーニエフを評して、「彼は單にロシア國の境を超えて外國へ行つたばかりでなく、ロシア的なもの境を超えて行つた（もし、現實精神、眞摯、及び精神的自由の心理的具體化として、自然さと素朴さとの同意語として、ロシア的といふ言葉を解するなら）」と言ひ、また、ツルゲーニエフが、あまりデリケートなヨーロッパ人になり過ぎ、ロシアを去り過ぎて、「原始的な深みも、神聖な素朴もなく、」なつたと言ひ、「狩獵者の手記」を貶したのなどは、當つてゐるところもあるが、可なり思ひ切つた批評である。ピエリンスキーに對する彼の見かたも、全く今までの評價を覆すやうな大膽な否定的な態度で、それが評論壇の問題となつて、彼自から別にその論難に報ゆるための小冊子を書いた位であつた。しかしてすべてこれ等の異常な見かたは、彼があくまでも個性の純藝術的表現を主として、時代の

背景乃至社會との交渉を、文學そのものの批評の上に必要なしとするがためである。アイヘンワリドは、モスクワ國民大學と女子大學とでロシア文學の講義をするにも、「ロシア文學史」といふ言葉は決して科目の名として用ひない、その講義も全く「ロシア文學者のシルエツト」と同じやうに、個々の文學者の評論の連続であると言つてよい。彼は「フランス文學史」の著者ランソンや、オスカー・ワイルドの「インテンションズ」に同感するところが多いやうである。彼は印象批評家乃至「唯美派」批評家として、藝術を人生の觀察と見るに拘らず、——藝術の實用を排するに拘らず、藝術の眞の價値を、人生の深さ貴さ——彼の謂はゆる「大環境」の表現に在りとして、その意味に於いての眞の藝術を愛すること戀するが如くである。彼の眞摯な、何となく稚醇な人柄、やや羞恥を帯びてゐるやうな、人をいたはる、デリケートな、しかしながら可なり大膽に自分の思ふところを表白する確信ある態度、それ等の人としての風格が、彼の論文に鮮やかに表現せられてゐる。彼の文章は縷々として細やかに、おのおのの言葉をいたはりつつ書かれたやうな味はひがあり、光澤がある。しかもその縷々たる文章は何となく勁く、隨處に思ひ切つた總括と飛躍とがあつて、緊張した一種の貴族的な律を成してゐるやうに感ぜられる。彼が最近に現在のロシアの社會思想上の問題を論じた短い論文の如きも、その見識の新鮮を以て群を抜いてゐる。彼が藝術を以て人生の慰めであり喜びであるとすするやうに、彼の批評もまた常に讀むものの心に慰めと喜びとの樂律を傳へる。

### 3 詩壇の不安

彼等は待ち望み、彼等は摸索する。

あを白む東を望んで、豫言者の來るのを待ち、太陽の昇るのを待つメレジュ・コーフスキーは、彼自から歌ふ如く「夜の子」であつた。この暗黒の子は、光りを見るときも、その「光のうちに死ぬる」のかも知れない。しかし、「凡ては異ならん」、新しい知られない世界の創成せられることは疑へない。現在を以て生きることは出来ないが、明らかならぬ未來のうちに、未だ言ひ現はされない願ひのうちに浸つて生きて行くことが出来る（バリモント）。どことも知らぬ遠い果てしないところに、全く別の土地があつて、そこにわが花嫁は住んでゐる（ソログレブ）。冥想と火とで織られた赤い帳のあなたは、吾等の待ちのぞむものが在る、喜びの姿が立つてゐる（アンドレイ・ピエールイ）。春の土からこそ世界を照らす光りを待ち、ただ一人の「彼の女」を思ひ描く（プロック）。混沌の中から、黒きものの中から星が生れる、かたくなな否定から、神聖な肯定を起たしめよ（イワーノフ）、夜をして果てしなく永からしめよ、闇よりこそ光りは生

るれ！（ギッピウス夫人）

彼等はすべてみな待ち望んでゐる。彼等はすべてみな東方のあを白むのを待つ「夜の子」である。何等か新しい光りの現はれ来ることを感じ、その面影をさへ幻に描く。しかし、彼等は「眞を知つてゐるやうに自分に思はれる、ただその眞を現はすべき言葉を知らない」のである。

待ち望みはある。東から来る光りに對する期待とその期待に伴ふ強い興奮とはある。ただ興奮には力が伴うてゐない。そこには空しき翹望と摸索と、しかしてまたヒステリカルな興奮とがある。東から光りは現はれても、その光りのうちに生くる力を有してゐるか否かは疑はしい。彼等自からはまだ闇の子である。眞を知つてゐると思ふ喜びの興奮があつても眞そのものを現はすべき言葉を知らない。

彼等はシムボリストであると言はれ、またデカダンであるとも言はれる。ロシア最近の詩壇の不安は、そこにある。

二

シムボリズムの特徴は、それがあくまでも豊富なリアリズムの精神に充ちてゐるといふことである。宗教的乃至神祕的生活の——最も深い強い人間内心の生活の實在を信じてゐることである。しかしてその信ずる心に於いて些かの不安もない。これに對してデカダンの傾向の特徴は、リアリズムの精神の空疎薄弱なこと

である宗教的乃至神祕的生活の——最も深い強い人間内心の生活の實在を信ずる心は不安に傷つき荒み、空しく寂れてゐることである。彼は充實した實在の感じに生き、これは空漠不安な幻影をまどろむ。シムボリズムは創造を意味し、デカダンの傾向は病患を意味する。シムボリズムとデカダンの傾向とは、この意味に於いて全く相反する性質を帯びてゐる。シムボリストは眞を知つてゐると思ふ喜びに興奮するばかりでなく、眞そのものを現はすべき言葉を知つてゐなければならぬ。興奮があつて表現のないヒステリカルな心の状態は、即ちこれをデカダン派の詩人に見る。

吾等が目に見る現實の世界は、さまざまの色の雜りあつた、離れ離れの現象の世界であるやうに見える。しかしシムボリストは個々の現象のあなたに全く異なる一つの世界を見る。そこではばらばらのものが有機的な完き一つを成す。そこでは個々の事實の混沌が調和ある渾一の世界を成す。そこでは一切の惱ましい矛盾がなく、悪も苦しみも、眞の太陽の光りのもとに灼かれ融けて、全く新しい意味と價値とを有つ。美も愛も、調和も、そこではあまるところなく實現せられ、味はれる。しかしてまた、このコスモス——渾一の世界は決して紛亂の現實の世界と全く別なものではない。ただ、現實の世界の實性に徹して觀る魂の力が、この渾一の世界を見出す。この魂の力こそ、個々の現象に妨げられ囚はれない眞のシムボリストの力である。まことの詩人——まことのシムボリストの命の深さ強さである。自由な、充實した、無礙な透徹した心のあるはれである。この心に浸潤することの出来た個々の事象は歡喜と調和との渾一の世界に甦つて行く。現實の世界では、皮相的な偽りの印象と刺激とが吾々を嚇かし惱ますあの動きのとれない息苦しい事實は、その膠着から解放されて、廣やかな豊かな限りない命の、自由に縦横に流れ互る光りの海へ生き伸びて行く。個

個は悉く全となり、断片はみな完き一つに甦る。

しかしてこの渾一の表現、渾一と現象の世界との関係の表現——要するに詩人が自己の最深處の生活の表現には、その内容と言葉との相伴はざる事が感ぜられる。いかに適當に遺憾なく表現しようとしても、言葉はその悉くを現はしつくさない。チュッチュフとともに、「現はされたる思想は偽りである」といふ感じがある。しかし、「適當に遺憾なく」現はさうとすることは、思ふことのすべてを一々の言葉に現はしつくさうとすることは、眞の詩人にとつてはまさに一つの誘惑である。さうするところからこそ「偽り」が生れる。眞の詩人はその誘惑を避けて象徴を造る、生活の内容を裸形にせずして、これに衣を與へて却つてその本質を示唆し表現する。即ちシムボリズムは二つの極めて密接に融合する要素から成り立つ。一つは神祕的な自由な生命の力であり、他は「衣を與へて本質を示唆する」技巧の力である。

### 三

ロシア最近の詩壇の不安は、渾一の世界を失へるところにある。詩人が渾一無礙の世界の秘密を確に支配し得ないところにある。自己の實在と力とを、また自己の統一を、深く強く自から感ずる事の出来なくなつたところにある。彼等は、「くすんだ紫のたそがれの中におぼろげな怪しげな見分けのつかない姿で」立つてゐる。彼等は現實の世界の實性に徹して觀る魂の力を失ひ、断片的な美しい物象を弄ぶやうになつた。彼

等の多くは、渾一の世界を見失ひ、神祕的な自由な無礙な生命の力に萎縮して、ただぼんやりした、不思議な幻のやうな美しきものの断片を見ることを、屢々繰り返すやうになつた。そこに何ものか無限の命がかくれてゐるらしくて、實は力のない空しい美しい霧のやうなものがあるに過ぎない。異様な曖昧な言葉が「衣を與へて本質を示唆する」ものの如くであつて、實は空しき美しき言葉以上に出でない、本質の空しさを蔽ひかくす衣であるに過ぎない。描かれ歌はれる物象は、蒼ざめた空しい幻であつて何ものをも表現しない。随つてまた何人にも解せられない。また解せられやうがない。シムボリズムに似て非なるデカダンスの藝術である。ソログープ、ブリューソフ、バリモン、イワーノフ、ビエールイ、ブロック、ギッピウスその他の現代の詩人に於いて、何人もこのデカダンスの匂ひを嗅ぐであらう、しかしまた同時に何人も彼等のうちにシムボリズムの閃めきと光りとを見るであらう。彼等はあるときはシムボリストであり、あるときはデカダン詩人である。ロシア現代の詩壇の不安はそこにある。

彼等は東方のあを白むのを待ち望み、眞を知り得たやうに思うて興奮する。ただその眞を現はすべき言葉を知らなかつた。彼等はみなその言葉を求めた。言葉を求めることをのみ念いで、彼等が自から知り得たと思つた眞そのもの——彼等が觀ることの出来る渾一の世界の、實はただ霧の如く幻の如く空しきものであることを思はなかつたところから、デカダンスが生じた。言葉を甘やかし過ぎるところから言葉は空しく美しく萎んだ。空しき生命を蔽うてなきものがあるが如くに見せようとするところから善良な無遠慮な、一所懸命なやうな、遊び半分なやうな、言葉の濫用、虐待が始まつた。しかしてこれ等はすべてみな眞を知つてゐるやうに自分では思ひつつ、その眞を現はすべきただ一つの命ある言葉を知らぬものである。謂はゆる未

來派の諸詩人もまたその範圍を出でない。彼等が未來派らしいときは彼等はデカダンである。ヒステリカルなもしくは無遠慮な興奮で、しきりにその「ただ一つの命ある言葉」を摸索する。彼等が興奮すればするほど、彼等の求めるものの狙ひが亂れる。彼等が鎮まつて、いら立たしさの少いときに、彼等の心の「みどり兒」が面影を現はす。ロシア詩壇の不安の最もいら立たしくまさまじきものを、即ちこの未來派の諸詩人に見る。

### 未來派の一種

今夜はロシア研究會の茶話會で、案内狀によるとロシアの未來派詩人ゴリツシュミット君といふ人の講演がある筈ですが、ゴリツシュミットとあるのは多分ウラディミール・ゴリツシュミット君のことです。この人の詩作も私はまだ讀んだことはありません。この人にも逢つたことはありません。しかしこのロシア研究會の案内狀を見たときに私の想ひ出したのは、一昨年の初めモスクワにゐた時分に、ポーランドのある女詩人から貰つた一枚の廣告ピラです。私はそのピラを新聞の切抜などを押んだ紙挟みの中から出してみました。これはこのゴリツシュミット君が千九百十七年の三月二十七日にモスクワの工藝博物館の大講堂で講演をした折ので、辻に立つてゐる廣告塔へ刷りつけるピラです。この廣告文が大體この未來派詩人の面目を説明してゐるやうですから、それをここへ紹介してみませう。

ピラは一尺五寸に一尺くらゐの小さなもので、左手にこの詩人の肖像があり、全體の文句は黒と赤と濃藍色とのぼかしの電氣版刷になつてゐて、いかにもけばけばしい感じのする、悪趣味なものです。先づ最初に

「有名なる人生の未來派詩人、ロシアの瑜伽、ウラディイミル・ゴリツシュミットの講演開かる」とあつて、その下に講演目録とあり、總題目は「いかに生くべきか、（新生活の探求）」としてあり、それが三部に分れてゐます。

### 第一部 肉體の太陽的歡喜

生命の源泉としての太陽に己の肉體を與へよ。自己の單純なることに於いて偉大なる純なる兒童たれ。都會的の衣服を棄てよ。事物の相對的配慮を忘れよ。自然に就いて生くる道を學べ。自己の動物的本能を發見することを知れ。その本能は諸君に健康の道を示さん。活氣ある呼吸、休息の藝術。自己の本能的方法によつて自然の體操を行へ。肉體の運動の調和と周圍の美とを律動的に調へよ。歡喜に充ち、全諧音を以て、美しく生きよ。諸君の生活は未來の日のために永久の祝福たらん。

### 第二部

第二部に於いてウラディイミル・ゴリツシュミットは、瑜伽（高き「自我」の人間の肉體に及ぼす影響）の

印度科學に關して數言を述べし。その後にてこの世界のレコードたる人は力、意志の集注の實驗を示すべし。彼は己の頭に數枚の板を打ちつけて割るべし。

### 第三部 人生の未來派

藝術より生活へ、完成へ。今日の生活は——明日のため。現代の影響の下に於ける感情の革新。新しき美、新らしき人。未來の創造的豫感。生ける藝術、衣服、住居、唯一の家庭。超人性。

この最後の第三部は變更せられて、「合法的結婚の奴隸狀態を廢せよ——眞の自由なる愛をして榮えしめよ」といふ題目の講演をやるといふことが、このピラの右側に刷り足してあります。講演の初まりは午後八時半。入場料は七十五カベクから五ループリまで、ルースコエ・スローワ新聞社、フリフ書店、カルバースニコフ書店、アワンツォ美術店、工藝博物館入口などで切符を賣ることは例の如く下の方に記してあります。左の側にはスラキャンスキー・バザールといふ寄席風のものも刷り込んであります。それよりもそのピラに刷り出してある詩人の半身の寫眞が——殊にその服裝が人目をひきます。それは婦人の部屋着のやうなもので、頸にはミニアチュールか何か掛けてでもあるのか、紐が見えます。容貌はユデヤ型に近く、勿論純ロシア型ではありませんがとにかく立派な體格で、神經質なやや反抗的な表情があります。これを一個の力士だと言つて見せても、さうらしく見えるでせう。「人生の未來派詩人、ウラディイミル・ゴリツシ



ユミット」と堅い力の入つた克明な筆蹟で自署してあります。ポーランドの女詩人は、このピラを一つの文壇のキユーリオとして私にくれたのです。

ロシアの謂はゆる未來派の詩人中には、曲馬師風の青色の服装で、ある曲馬師の一團と共に地方をまはつてゐるのなどもありました。曲馬師の操る馬の背に立つて、自作の未來派ぶりの詩を公衆に向つて朗讀するのが役目なのです。そんなことで多くは世間の冷嘲のたねになつてゐたやうですが、しかしその結果その作品の到達したところには不満であるがその意圖に於いては多くの善きものを有する、またその作品にも時にはよいものがあるといふのが一般の釋やかな批評であつたと思ひます。詩形、詩語、詩情に於ける舊來の打破、新語の鑄造、その精力的な壯んな突進力、それ等のものは先づすべての未來派に共通の特色でありませう。印度の瑜伽哲學はセオツツイストの一派を中心としてロシアの有識階級の一部の間に可なり興味を有たれてゐましたが、それが未來派の思想感情と結びついてゐるのはロシアらしいところであらうと思ひます。精力の集注といふやうなことがしきりに唱へられ、隨つて東方の思想が興味を持たれ、タゴールの重なる逸作の翻譯が二た通りもあり、そのあたりから導かれてか未來派だの何だのといふ新らしい文藝方面思想方面の人たちが、大抵皆印度に憧憬を懷いてゐるやうでありました。ロシアの未來派の特色は宗教的色彩を帯びてゐるところにあるといふことを言つてゐましたが、ゴリツシュミット君の講演目錄にも、ワイルドやニイチヤや印度思想やいろいろのものが混入してゐるやうにも見えますが、またどこか外部的強制を排斥するアナルヒーズムのにほひもします。その邊にもロシアらしいところがあるやうに思ひます。

舊來の打破、或る意味でのアナルヒーズムのにほひ、集注的、實行的、精力的なところ——文學の方の未

來派とゴリツシュミットとに、何となく相聯想せられるものがあるやうに思ひます。併しその事はまた別にゆつくり考へてみませう。今夜は折角ゴリツシュミット君の講演を聴きに行くわけに行きませんでした。またそのうちに折もあらうかと思ひます。

## 詩人ブロックのこと

アレキサンドル・アレキサンドロヴィッチ・ブロックの死が、若し「ゴースト」紙の報ずる通り事實であるならば、吾々は現代ロシアから多くの未來を有するすぐれた抒情詩人を失つたことを悼ますには居られない。ブロックは千八百八十年ベトログラードの生まれで、祖父はベトログラードの大學總長であり、父はワルシャワ大學の法學教授であつたやうに記憶してゐるが何れにしてもその生ひ立ちは幸福であつたやうに覺えてゐる。

彼が最初文壇に出たのは、千九百五年にその第一詩集である「麗人の詩」を公にした前後からであつた。彼のその頃の心は、當時の神祕的、宗教的哲學者ウラディミール・ソロキョフに影響せられてゐたのは事實で、「麗人の詩」も同じ立場から理想的、神祕的、豫言的のものであつて、何か世界には「永遠の女性」の生む力によつて全世界に一大變化が開かれる、即ち「永遠の女性」によつて新しい世界が作り出される——その神祕を期待する心、其處に「麗人の詩」の中心思想があつたやうである。

その次の時代は千九百七年に出した第二詩集「待ち設けざる喜び」がよくその心の歩みを語つてゐる。こ

の心の變轉は、麗はしき永遠の女性を待ち設ける心が次第に現實的になつて行つたことである。即ち理想的神祕的な永遠の女性から情熱煩惱の美しい具體的の女性を愛し求める心となり、その情熱と煩惱とは、皮肉な悪魔を讚美する心ともなつて行つたのである。千九百八年の前後の詩劇も大體同じ傾向のもので、神祕的、理想的のもの、即ち永遠の女性を待ち設ける心持と現實の情慾の中に耽り浸つて、自分の心の内の理想を嘲笑する心との矛盾を歌つた氣持がこれ等の作品の中から見出される。

つまり日露戦争後にいたつてブロックの詩のなかからは次第に豫言的要素の影がすくなくなり、夜の薄暗い灯の影で自分の肉體を窺く女の姿、さう云ふ方面の感懐が多く歌はれるやうになつた。千九百十一年の詩「夜の詩」の如きはよくこの現實生活の描かれたもので、従つてデカダンの惡魔的傾向の益々深くなつたものだと思はれる。

若しブロックを單にうるはしいロマンチックな詩人だとばかり思ふ人があればそれは間違ひで、彼の詩から言葉を借りて言へば、「天上にあつては永遠の女性を愛するが地上にあつてはその女性を裏切る」に至つた心の歴史が彼の詩の特色を語つてゐるのであつて、有名な劇詩「薔薇と十字架」がその代表作だと言つてよい。即ちアリスと云ふ女主人公が、未見の戀人である歌唱ひを理想の幻影に描いて戀してゐたのであつたが、實際その歌ひ手に逢つて見ると年寄つた醜い男であつた。アリスの心は忽ち美しい小姓のアリスカンの上に走つたと云ふのである。この作は千九百十八年モスクワの藝術座で上演するために稽古をしてゐた筈である。

最近レーニンの天下になつた後ブロックの作品として有名になつたのは「十二」で、スツールヴェの如き

は「これはロシア革命の最も記念すべき作品である」と言つてゐる。今のモスクワの貧しい悲惨な放縱な残酷な生活状態を描いて、一種の皮肉な態度で歌つてゐるが、矢張、破壊と残酷の内から新しい生活の芽が生れて來ることを暗示してゐるやうに思はれる。彼は千九百十七年頃、レーニン一派が擡頭し出した當初から、彼等に對して一種の同情を持つてゐたやうで、それがために當時の知識階級からは非難されてゐたが、とにかくプロックは單なるロマンチックな抒情詩人ではなく、自分の内心の煩悶の行くべき道を、革命の中に求めやうと云ふ心持が、可なり大膽に率直に歌はれてゐたと思はれる。

プロックの詩風は非常に音楽的で、年は若かつたがその技巧の優れてゐた點でプロック派とも云ふべきものも出來、多くの青年を周圍に持つてゐた位である。論文もあり詩集の編纂もした。ただプロックの天分はどこまでも純粹の抒情詩であつた。客觀的の物を描寫すると云ふよりも自分の心持で描くことが彼の技巧の特色であつたと言へよう。右の「十二」の他に「オキフ人」といふ作も評判になつてゐる。

最近着伯林發行の「ルースカヤ・クニガ」誌六月號によると、プロックは最近論文集「藝術の靈光」の出版と、劇詩「ラムゼス」の創作とを完成したとある。また壞血病にかかつてゐたこともある。もし彼の死が眞實なら、やはりさういふ病のためであつたらうかと思はれる。ポリシェキ革命以後のロシア文學——近い將來のロシア文學はいろいろの意味で深い興味を中心であるが、その中でも、詩壇が殊に新しい興味を中心とならうとする形勢にある中で、プロックの如きは、アンドレイ・ペールイなどと竝んで、多くの未來を有する最も興味ある立場にあつた人であるから、四十一歳の夭折は、それが眞實だとすると、まことに惜しむべきことである。

## 革命前後に於けるロシア文學の主潮

十九世紀末から二十世紀へかけて、千九百十七年の革命の起るまでのロシア文學の思潮を簡單にいつてみると、一つは人生の新眼角新部面を、つまりこれまでに着眼せられなかつたし取扱はれなかつた文學上の新題材としての人生のさまざまの部面を發見し、もしくはそれ等に新しい興味を見出した一派となり、今一つは題材の上では必ずしも從來未開拓であつた部面を取扱ふといふに限らないが、その表現の様式技巧の上で今までになかつた新境地をひらいた一派となつてゐる。この二流派は勿論その實際に於いては相交錯してゐるのであるが、しかし自ら個々の作者に就いてもこの二流派のおのの代表者をあげる事が出来る。たとへば「どん底」の生活を描いたゴーリキの如きは、これまでに取り扱はれなかつた新題材に興味を發見したものと云つてよい。アルツイバーシエフの「サーニン」に於ける性的問題、同じ作者の「ランデの死」に

於ける死の問題の如きもそれである。表現の様式技巧の上に新途を見出したものとしては何人も先づチエーホフをあげる。人生の平凡他岐なき些末な事象を捉へてそのうちに含むところの滋味——をかしさも哀れさもいとはしさもその他さまざまの心持から集まり成る滋味のあらんかぎりを歌はうとしたチエーホフの技巧は、片々たる事象のうちに徹底的にその眞の意味を探求して表現するといふ點であくまでも個性的表現である。唯一無二の、再び繰り返すことの出来ない氣分の個性的表現である。氣分と表現といふことがたしかにこの新技巧派の重要な特色である。複雑微妙な、容易にありふれない、特殊な、極めて獨自的な、心の奥底の隅々に涌き出て来る氣分、その明暗の交錯、要するに氣分の獨自性、個性的表現がこの傾向のおのづからたどり行く道である。しかしてこの道の上に相ついで來るところのものは、或はアンドリエフの神秘的運命觀の氣分であり、或はソログープの惡魔的氣分であり、或はザイツェフの印象派風な薄明的人世觀である。さらにデカダン派の詩人であるバリモントその他の代表する詩壇の自我中心的超人的唯美主義である。しかしてこのどこまでも自我を中心にして、個性的な、獨自のあるものを氣分の上に絶對視する傾きは、たまたまイタリーに起つた未來派の傳統破壊新自我主張の跳躍的精神と一致して、ここにロシアに於ける自我中心的超人的未來派の出現流行となるに至つた。千九百十七年の革命までのロシア文學は以上の諸流派諸傾向が相まじつて一つの混沌たる情勢を作り成してゐた。しかしそこには一部の固定と、疲勞と、漠然たる不満とが、拂ひのけがたいふうす霧の如くただようてゐたのである。

千九百十七年の十一月、ポリシエキキのロシアとなつてからは、世界大戦中やや下火になつてゐた未來派の運動が、にはかに世間の表面に浮び上つて來たのを見る。未來派詩人の講演がところどころで頻りに行はれる。未來派畫家の展覽會が開かれる。これまで一步もその内に入れることを許されてゐなかつた美術學校の内に未來派の勢力が非常な勢ひで入つて來る。美術學校の教授が未來派の中から任命せられる。未來派のカフェーといふものが政府の補助の下にモスクワ目抜の通りに開かれて、ここでは毎晩未來派の男女の詩人畫家たちが集まつて、未來派の新作がその作者によつてカフェーの客の前で朗讀せられる、未來派の畫家たちが集まつて、未來派の藝術委員といふやうな形で、五月一日の勞働祭の市中の裝飾の意匠は勿論、辻々廣場廣場の各種の革命的記念像記念碑なども未來派の藝術家の工案創作に委任せられる。未來派の傳統無視、過去の破壊——要するにどことなく革命的破壊的反抗的な調子がポリシエキキの藝術らしく第三者からも亦認められて、一時は未來派即ちポリシエキキ藝術といふ感じがあつた。未來派を中心とする現在派、ニチエラーキ（ニチエラー即ち何でもない、なんにもないといふ意味のロシア語から名づけられたもので、ニチエラー派の意味）ダグイスト、表現派、その他さまざまの分派があつて、それ等を引くるめて、何等かの點で異常怪奇不可解奇抜といふやうな特徴を有つてゐる諸派が、恰も新時代ポリシエキキ時代の新藝術であるか

の如く考へられたことがある。一ところウラディヤストークで出てゐた「創造」といふ文藝政治雑誌の如きも、大體はその傾向に與みし、その傾向の機關とも見らるべきものであつて隨つてその意味でポリシエキキの文化事業を報道することにもなつてゐたが、一ところの日本の官憲が考へたやうに、それ等の雑誌やそれに關係のあつた未來派の詩人畫家、たとへばモスクワでも相當に名を知られてゐたブルリユック君などが必ずしもポリシエキキそのものであつたのではないことは、ポリシエキキと未來派との眞の關係から考へてみれば明らかである。實際未來派を中心とするそれ等の諸流派の藝術は、眞にポリシエキキの藝術として發生したといふやうな必至自然の關係を有するものでなく寧ろそれ等何かの點で異常怪奇不可解奇拔を特徴とするやうな藝術は、極端な個性的表現、極端な自我の表現を志すところの、新技巧派の自我心の病的な主張と心理的に共通脈絡するものと見るべきところが多い。随つて、ポリシエキキ治下の今日のロシアでも、既にその流派の藝術をその精神に於いて前時代ブルジョワジのものに見、有閑階級の病的な自我慾の遊戯と見、進んで眞のプロレタリアートの藝術に往かうとする傾向が現はれて來てゐるやうである。

### 三

社會階級の争闘から導き出された變革が、それだけで新藝術を生み出す理由とならないことは勿論のことである。そこに新藝術が生れるためには必ずまづ藝術そのものの内部的理由が存立せねばならぬ。藝術その

ものが舊時代のものから新時代のものへ變るべきそれ自らの内から發するところの理由、原因、自然の勢ひを有してゐなくてはならぬ。それなくしては、いかに社會的の著しい變動があつたと言つても、直ちに新藝術がこれに呼應して生れるわけには行かない。もし藝術自身の變革の理由なしに、もしくはその理由が眞に具體的に藝術品の上に成熟し現出するまでに至らずして、社會的變動のためにもかくも或る新しい藝術がそれに伴ひそれに呼應して生れる事があるとすれば、それは即ち謂はゆるプロバガンダの藝術となり、一部階級の憎惡や反抗心の宣傳のために道具としての藝術となつて、藝術としては狭く、弱く、淺い、上つらの心持ちしか現はし得てゐないものとなる。藝術の變革を促す力としていかに社會的の變動が重大な役目を演じてゐるにもせよ、それが藝術そのものの上で、藝術とし成立したものである以上その社會的變革の精神意義を表現するのであるかぎり、どこまでもそこには藝術自身の内發的自發的變革とまで成つてゐなければならぬ。ロシアの未來派は一時表面的に新時代の藝術であるかの如く見え、またさうらしく振る舞うてゐたが、それは寧ろ過渡時代の變態的現象と見るべきことであつて、ロシアの革命が生み出すべき眞の新文學は、未來派の後、未來派に取つて代るものでなければならなかつたのである。未來派の有する極端な病的な自我主張、個性別主張の傾向、多くの場合空虚で實質的内容を有たない、獨自性を誇示する傾向、さういふところから脱して、平明確實な人生の事實のうちに、たとへば都會工場生活といふ如きものうちに、新しい内容意義を認めようとする。都會の生活を呪はずして、力の集注の場と見、新文明建設の一大増場と見る、工場を搾取の家と見ずして機械の旋律、力の交響樂のドームと見る。労働者をラフワエル、ダ・キンチの事業の参加者と見る。晦澁怪奇不可解な前の藝術の氣風に對して、これはただ平明である。何となく秘密的、内

房的、隱微な女性味を有してゐた前の氣風に對して、これはあくまで開放的、陽發的、男性的である。極端な自我主張に伴ふ極端な個性差別的な前の氣風に對して、これはあくまでも協力的集團的である。これ等の特色が現在のポリシェキキのロシヤの勞働者出身の諸詩人、たとへばゲラーシモフ、プロメーエフその他詩人に見られる著しき事實である。ロシヤ現在の文學で最も興味のある新事實は、これを文學そのものの變遷の意義から見ても、またこれを社會的變動の上から見ても、恐らくこの邊に集注すると謂ふべきであらう。

## 北歐文學の原理

今日これからお話しするのは「北歐文學の原理」と云ふことでありますが、一口に北歐と申しましてもその範圍が甚だ廣くありますが、その代表的の國家はロシヤと諾威とであります。しかしてロシヤの代表的の作者と申しますと先づトルストイを擧ぐべきであり、諾威の代表的作者はイブセンであると思ひます。今日は時間も少いことありますから、此の二人だけに就いて申し上げることに致します。

イブセンの書いたものは、申すまでもなくドラマでありまして、その内に最も廣く知られてゐる彼の代表的の作は、「人形の家」即ち女主人公の名を採つた「ノラ」と晩年の「海の夫人」とであります。イブセンのノラに於いてはイブセンは何を求めたか、ノラは、夫のヘルマンに對して絶對的の愛を求めてゐる。例へば社會的地位を失つても、法律上如何なることが起らうとも、夫婦の愛のみは絶對なものであつて、このためにその愛が薄らぐやうなものであつてはならぬと考へて居り、且つ之れに依つて生活して行かうと考へてゐたのであります。しかし、實際に於いては、ノラは此の絶對的の愛を得られず、夫のヘルマンを捨て、三人

の愛兒を捨てて、何處へと云ふ當もなく、暗い夜を廣い世界の果てに出て行つたのであります。ノラの夫に求めてゐたものは、奇蹟愛の奇蹟を見せられないので夫を捨てたのであります。このノラの求むる愛に就いては、歐洲のみならず日本などに於いても、それが上演せられた當時、非常に非難があり且つイブセンの家庭觀、乃至婦人觀に對して非難するものが多かつたのであります。「海の夫人」に於いては、エリーダとワングルとの愛に就いて書いて居ります。燈臺守の娘即ち廣い海を友とする自由な燈臺守の娘であつたエリーダが、二人の大きな子供の自分とは非常に年の違ふワングルの後妻となつて面白くない月日を送つてゐた。エリーダは、ワングルに嫁ぐ前に、米國人で或る不思議な強い眼を持つてゐる航海者と約束したことがある。その航海者は俺は必ずお前を連れ歸つて來ると云ひ置いて何處ともなく行つてしまつた。その後幾年か経つたが航海者は歸つて來ないので、エリーダはワングルに嫁いだのであつたが、面白くなくワングルの家庭にあつて、何時かは大きな自由な海を求めて、この狭い面白くない家庭を捨てねばならぬと考へてゐたのであります。その中エリーダの前にはかつて約束のあつた航海者が歸つて來て、お前は今度は行かねばならぬ、私は他の港へ行つて明後日歸つて來て連れて行くと命令的に云つて他の港へ向つた。エリーダは夫のある身なるにも拘らず、どうしてもその航海者と行かねばならぬやうな心地になつて來た。そこで、夫のワングルは、どうかしてエリーダを引止めねばならぬと考へたが、エリーダは暴力を以て如何に止めようとしても私は止らぬと拒絶した。其處で、ワングルは、どうしても止らぬことを知つたので、それではお前の自由にするやうに、止るなり行くなりお前の自由にするやうにと云つた。するとエリーダはそれはあなたの本心から云ふのですかと問ひ返した、それは本心からだ、なぜならば、それはお前を眞から愛してゐるからだ

と云つた。かくワングルに云はれた時、エリーダは今まで自分の眼の前に垂れてゐた或る黒い幕が取り去られたやうな氣がした。さうして私は行きません、米國の不思議な航海者が來ても私は行きませんと云つた。それは、夫とは非常に年が違ひ、その上二人の子供までもあるのに、要するに、この劇に現はれてゐるのは廣い自由な海の誘惑、即ち海の力よりも、愛の力の方が偉大なことが現はれてゐるのであります。

イブセンに現はれてゐる思想は、この二つの作物から考へても絶対無限の愛である。しかし若しそれが得られぬ時は、夫も何物も捨てて差支へない。その絶対的の愛のないものは駄目であると云ふのであります。しかし、實際生活でここには絶対無限の愛が實現せられ、それが家庭に行はれることを認めてゐるのである。しかし、イブセンは、それが實際に適すか如何に係らず眞理は絶対的のものであると云ふにあるのであります。それと同じ思想を、ロシアのトルストイに見ることが出來ます。ロシアの或る批評家がトルストイは美しい花園に放れた巨象の如きものである。この美しい花園を踏み躪ることが、象にとつてはなんでもないことで、唯平然と歩いてゐる。しかしそれが花園にとつては如何に大なる損害であらうか、それは少しも頭を勞しないのであると。

トルストイの思想に就いても諸君が既に御承知の通り極端だと云はれてゐる。その一例として、トルストイの無抵抗主義に就いて云はれてゐる。トルストイの無抵抗主義を唱へた時代は、ロシアが土耳其と戦つてゐる頃であつたが、或る皮肉な批評家の云ふには、亂暴な土耳其人が、ロシアの美しい子供を殺した際、ロシア人はこの暴虐を黙つて見てゐねばならぬか、若しトルストイがそれを見たとすれば勿論之れに抵抗することは出來ないし、しかし、あまりの殘虐に見てゐることも出來ないから、直ちにその場を逃げ出してしま

ふであらうと云つてゐた。

又トルストイの教へを受けて加奈陀に起つた新教徒のド・ホポール團は、トルストイの主義に依つて肉食は絶対にせぬことにしてゐたが、後には、パンも食はぬことにした。パンは大部分麥であるが、その麥も一粒が地に落ちても多くの實を結ぶのに、多くの麥を食つてしまふのは生物の増加目的を妨げるものであると云ふのである。しかして肉食は勿論せず、パンも食はぬとなれば何を食ふかと云ふに、野原にある草を食つて生命を保つてゐた。その草を食ふに際しても、不用の分までも手で取つてはならぬからと云ふので、手を縛つておき、草を口で食つてゐたが、その結果下痢を起すものが澤山出来、病人が多くなつて来た。それを、トルストイの反對者は、トルストイの思想が如何に極端であるか、如何に實際的でないかを皮肉つてゐる。しかしこのド・ホポールが極端であるからと云ふことを以て、トルストイの「惡に抗するなかれ」の無抵抗主義が直ちに悪いとは云へないのであります。

トルストイの作品は頗る多くありますが、その中で最もトルストイ的であり、トルストイの代表的作品とも云ふべきものは、短篇ではあるが「イワンの馬鹿」であります。

「イワンの馬鹿」は既にお読みになつた方が多いのでありませうが、三人の兄弟中でイワンが一番馬鹿で、イワンはどうすれば損であるとか、かうすれば不便であると云ふやうな事は少しも考へなかつた、即ちイワンの馬鹿は、實に徹底的の馬鹿であつたのであります。しかし、この馬鹿が最後には利口な他の兄弟よりも一番幸福を受ける事になつて居ります。「イワンの馬鹿」の中には、トルストイの無抵抗主義も、納税に對する意見も、徴兵に關する考へも、又その根本たる政府否定に關する態度も見られるのであります。トルス

トイにしてもイブセンにしても何れも極端な徹底的な態度を要求し、不徹底な、中途半端な妥協をせぬと言ふ思想を持つてゐたため各方面から非常に反對されてゐます。若し此の二人が北歐文學の代表者であることと、北歐文學の特徴は、究竟の事のみを求めて、目前の事をうまくやると云ふやうな態度が少しもないことである。しかしそれがために反對もされるが、絶対の眞理を求むる事、この眞理を求むる精神は、殆ど他の南歐人には見得ない特徴であります。現在のロシアを見ても、トルストイの究竟の眞理を求むると云ふ態度は、種々の非難と、種々の困難とあるにも拘らず、變ることなく、そのために力めてゐるやうに見られるのであります。現在のロシアには、革命前に比べて文學的作品は甚だ少い。しかし、現在のロシアを知る上に於いて最も必要と思はれるものを取つて見ると、アレキサンドル・プロックの「十二」と云ふ長い詩がある。プロックは昨年死にましたが、「十二」はプロックの最後の作であつて問題になつたものであります。舞臺は現在のロシアの都（恐らくはモスクワ）、時は冬の雪の降りしきる日であつた。その雪の降つてゐる暗い夜を、無知な婦人や、財産を失つた中産階級又は前には女中であつて今は立派な服装をして兵士と共に馬車に乗つてゐるやうな人々が暗い夜の街の上を歩いてゐる、其處には労働者上りの十二人の恐ろしい顔をした赤衛兵がアチラコチラと歩いてゐる事が書いてある、その中に或は街で女を殺したり、又は物を盗んだりすると云ふやうな血腥い場面が書いてある、その詩の最後に書いてある一つが、最も意味深いものであります。十二人のものが非常に亂暴した後一列に並んで歩いてゐると、その十二人の眞先に、白い着物を着た人が靜かに歩いてゐる。それはキリストであつた、キリストは白い着物を着て薔薇の冠を被つてゐた。着物は少し輝いてゐて、飛びしきる雪が眞珠のやうに見える。しかし十二人のものにはこのキリストは見えない。



この詩の意味は、恐らくは、赤衛兵が種々の破壊的の行つてゐるにも拘らず、その破壊は眞理を打ち出すため、即ち新しき世界を造り出すためには是非とも必要な建設的の仕事をしてゐるのであると云ふことは、恐らくはこの十二人の兵士の中では一人も知らないものである。しかし赤衛兵には少しもわかつては居らぬが、その前には光り輝いてゐるキリストが静かに歩いてゐるのであつて、その暗い、血腥い物凄ひ出来ごとの中にキリストはゐるのである。見えると見えないと、意識してゐるとゐないとに拘らず、新たな眞の世界を造らうとしてゐると云ふことは、プロックに依つて、よく現はされてゐると思ひます。

現在のロシアに對しては、何人も、失敗であると思ひ、破壊と極端と空想とであるといふのに、プロックの認めたやうな、生み出す悩みと云ふ大きな経験をしてみると云ふ事は、現在のロシア文學を見ても明かな事でありませぬ。現在ロシアに新しく出てゐる文學は、プロレタリアートの文學であります。この今までは一労働者であつた多くの詩人の中にはダラシモフ、ボレタリーエフその他勝れた詩人が少くありません、これ等の人々の詩は、呪ひや人を疵つけるやうな詩であるかと云ふに、これ等の人々の詩は何れも新しい光明的なものであります。ダラシモフの書いたものの中に、「我等」と云ふ短い詩があります。その中に昔からの世界的藝術品の中一として我々の力を借りずに出来たものはない。埃及のピラミット、スフィンクスにしても、伊太利のラファエル、ダヴィンチ、ミケランジェロなどの偉大な作品にしても、我々労働者の手を借りぬものは一つもない、そして將來も又、不朽の藝術品は、労働者の手になるべきものであるとて、新しき希望に燃えてゐる。又從來の都會は、華かな、美しい生活があると共に、その日の生活にも困ると云ふやうな貧しいものが多く、實に都會は魔物であると云つてゐるものがあつたり、工場は労働者の汗と血とを搾り取る

處であると云ふやうな呪の聲で充ちてゐたが、現在労働者の歌つてゐるものは、全然それと違つてゐるものであります。現在の都に於ける生活は、新しい光明を廣い野原へ送り出す源であると考へられてゐます。工場に於いても、從來は苦しみの場所であつたが、現在は新しい光明、即ち科學的文明を作り出す中心地であると考へてゐる。現在のロシアを見ると、プロックが言つてゐるやうに、暗い破壊的な血腥い中にキリストが静かに歩いてゐると云ふやうな、積極的光明的なものが働きつつあることが確で、しかして前に極端に見えてゐた中に、新しい芽が萌え出しつつあるのであつて、従つて前の極端であるとか、空想的であるとか破壊的であるとか云ふ非難の言は、淺薄であつたとの謗を免れぬのであります。極端であり、空想的であると云ふことは、常に實際的のことにのみ眼を向けてゐるものからは非難される傾向があるが、若し實際的でないために非難されねばならぬならば、凡ての眞理は非難されねばならぬ。即ち眞理は中庸や、妥協を好まぬ。眞理の現はれる時は、自分の獨得の力を現はすための場合のみであるからであります。ロシア人が前から持つてゐた、極端と見え空想的であると思はれてゐた思想がある。それは千八百三十年代に盛んに唱へられた、スラヴ族を愛するといふ思想である。スラヴを愛する思想とは何であるかと云ふと、これは一種の文明觀で、歐洲の文明は、一は西歐文明、一はスラヴ文明であつて、西歐文明は西ローマから起り、スラヴ文明は東ローマ、コンスタンチノブルから起つたものである。西歐文明の特徴は、現在の世界に生くる者、腕の力と劍の力で天下を支配すると云ふ事とその眞生命である、腕の力と劍の力で天下を支配するためには、法律が必要である。しかしてローマが天下を支配しようとするためには、法律が必要であつた。ローマの法典は西ローマの代表的産物である。しかしてその基礎は、理智である。この理智を基礎とする文明は、現實的、

科學的、物質的文明であつて、十九世紀は、是等の現實的、物質的、科學的文明の結果當然分裂争闘の時代となる。しかし、これを救ふのがロシアの文明である。

なぜロシア文明は此の實際的、科學的、物質的の文明が齟らす分裂争闘を救ふことが出来るかと云ふに、スラヴ文明は東ローマから發し、その根本生命は感情であつて西歐文明のやうに分裂的ではなく、凡てのものを融和せしめ一致せしむるものだからである。従つて現實的、科學的、物質的な文明が當然齟すべき分裂争闘に對し、これを救ふために活動するのであると云ふのであつて、西歐文明が大破綻を來した時、これを救ふと云ふ大規模なものであつたのであります。

この考へは非常に空想的であり、自ら大であるとするやうであり、ロシア人が果して歐洲を救ひ得るかどうかと危ぶまれてゐた。しかし、この千八百年代に考へられてゐたことが、その通りではないが、今これを著々と爲されつつあるのである。現在のロシアは、その全體の人々は、この思想と意志とを持つてゐるかどうかにか拘はらず、各國から非常に非難され排斥され不可思議視されてゐたのに、現在では、各國が種々の方法で接近を計らうとしてゐるのは、ロシアが各國に對して降つて來たのではなくて、各國がロシアに接近しようとして來たのであるといふことは、非常に意味深い現象であると云はねばならぬのであります。現在のロシアは非常に多くの失敗を経験し、多くの破壊をしたのであらうし、暗いこともしてゐるであらう。しかし、プロックの「十二」の中にあるやうに、この暗い血腥い中にキリストが靜かに歩いてゐるのであつて、この光明的創造的思想が極端な空想的に觀えてゐた處から現はれて來たとするならば、さうして、眞に進むためには是非とも此の道を経過せねばならぬのであるとするならば、この失敗の前には、光

明的創造的のものがあると云ふことが出来るのであります。

これは要するに、イブセン、トルストイ等の空想的で極端であると云ふのが價值があるのではなく、このためには如何に多くの破壊を爲し、如何に多くの失敗をしてもそれにも拘はらず眞理を求むるために、毅然と進むと云ふことが價值があるのである。若し北歐文學に價值があるとして、その價值は何處にあるかと云へば北歐文學を通じての價值は極端に趨くと云ふことに價值があるのではなくて、極端な行動をしても、眞理に導くことに價值があるのである。即ち凡ての實際の困難などを顧みて居られないと云ふ處に價值があるのである。恐らくはロシアのみではなく、世界人類は今大きな經驗の前に立つてゐるのである。其處には破壊も失敗も横たはつてゐるであらう。しかし、その破壊と失敗の大きな事は、祖先も未だそのやうな苦痛をば受けなかつたやうな大きなものでありませう。しかし吾々の恐れるのはこの苦痛ではなくて、この大きな苦痛を受けても、眞にこの眞理を求める心が、吾々の内心に燃えてゐるかどうかと云ふことであります。

若し人生全體に就いて考へたならば、一番失敗の多いのは青年時代である。この失敗と破壊とを吾々は恐れてはならぬ。この青年時代こそ、多くの失敗と破壊とがあるにも拘はらず、眞理を求むる點に於いては最も熱心である。又一方から考へて、何が一番大學の價值があるかと云ふに、知識が多くあるからと云ふのではなくして、眞理のためには如何なる經驗苦痛をも受けようと云ふ熱情と勇氣とに富んでゐる事である。勇氣と熱情とを持つてゐる大學は決して亡びず、又大學としての價值も十分にあるのである。しかしてこの勇氣と熱情に燃えてゐる大學に學ぶ人はこの國の青年であつて、その國の中心を爲すものであることは勿論であります。吾々が歐洲文學を學ぶのも、ロシア文學を學ぶのも、之れを知つて、知識を増して行かうと云ふ

ためではなく、歐洲北方の人例へばトルストイやイブセンなどは如何に眞理に對して考へてゐたか、吾々は如何に進まねばならぬかを考へることが必要なことである。かく考へて來る時、北京大學が、あらゆるものに屈服しない勇氣と情熱のあつたことは、大學の價値を十分に發揮してゐるのみではなく、支那を改革するものは北京大學であると私は信じます。しかして、今ロシアの話を致しましたのも、竝に眞理を求むるためには、かくの如き失敗と、かくの如き破壊とをも、したものがあつたと云ふことをお話したのであります。

## 「否定の文學」

—

否定は力である。

事實、なまなかの肯定に比べて、否定ははるかに深い強い力である。

否定の力のあらはれて來るのは、生命の動いてゐる證據である。否定は眞によく大切なものを生かす。否定は眞によく大切なものを育てる。

否定することによつて自己があらはれる。否定することによつて、心の泉が流れ動く。否定することによつて、眞に自から生きる道を見出だす。

少くとも、ロシアの文學に就いて見ると、このことは眞實である。ロシア文學はその源を否定に發してゐる。ロシア文學は否定の中から生れて來た。十八世紀以後、ロシア文學が成り立つてのちの事實は、さうで

ある。

ロシアの現實——その現實の見解はまたさまざまに分れた。現實として認めるもの内容や、それに対する解釋は、時により、人によつてさまざまに分れた。しかしながら、とにかくロシアの現實を對象として、これを肯定するか、もしくはこれを否定するかが、いつでも重要な問題であつた。平生はそんな問題には無頓着であるやうに見えてゐて、心の動搖が深くなつて行けば行くほど、その動搖の底から、形を異にしては、いつでもあらはれて来るのは、この問題であつた。誰でもよく知つてゐる例をあげるなら、トルストイもそれである。トールゲーニエフもそれである。ことにドストイエーフスキーがそれである。近くでは、ゴリキーも、プロックも、ソログープも、アンドリエイ・ビュルイも、その他一々名前をならべ立てるの煩に堪へない。

ロシアにとつては、西か東かの問題である。科學か宗教かの問題である。惡魔か神かの問題である。しかしそれは、ロシアの現實を如何に否定するかの問題である。また如何にそれを肯定すべきかの問題である。しかして、この問題の批評の前には、いつもよくピョートル大帝が立たされる。ピョートル大帝を否定するか肯定するかの問題とさへも、しばしば考へられることがあるのである。

君主が主導者となり中心となつて、國家的の見地から、一國の文明文化の改革を、性急に、大膽に、且つまた一徹に斷行しようとする。およそ、ものの分別があつて、多少でも批判を加へたり是非を辨へたりすることの出来るものは、その批判辨別の力を、悉くこの國家的見地に基く改革に向けねばならぬ。それ以外に、その當時に於いて、批判辨別の力を加へるに足る對象はあり得ないからである。ともかくも、そこで社會に批評が出る。輿論といふべきものの萌芽が出る。凡ての批判は時事評論である。國家的見地からの改革を主題としての時事評論である。

これがピョートル大帝時代のロシアである。——ただこの時代の時事評論には、力の對立が見られない。少くとも表面に現はれたところでは、力の對立が、その評論の上に見られない。不平もある、誤解もある、呪詛もある、怨言もある、——しかし一方には、改革の主導力として君主が立つてゐる。しかも非凡の斷行家である。精悍な、聰明な、奮進的な斷行家である。これに表立つて對抗することは即ち死である。そこで、表面にあらはれて來た時事評論は、いふまでもなくその主導力を中心として、その改革の意義を説明し辯護することであつた。時代の聰明な智力は、その時代の最高の智力は、また恐らく、改革の意義を説明し、辯護することに自己の本分を認めたであらう。改革の意義を認め得ないことは、その主導力たる君主に楯つくことであるとするとよりも、文明の自然の勢に、言ひかへれば正しき力に楯つくことであるとすに違ひない。さう見ないことは、その時代の最善最高の智力に對する侮辱である。

兎に角評論の對象は國家であつた。殊に時代の最善最高の智力が表明したところは「君主の意志の是認」であつた。文明改革の辯護であつた。そこに個人の心の影を投げ入れるべき餘地はなかつた。改革を正しと

することに於いては、一つであらねばならなかつた。時代の勢力に對する隨順である。

ピートル大帝から後、文學は専ら文明と、そのために心づかひする君主のための頌であつた。眞の意味での社會的根據を有してゐない當時の文學は、自然に宮廷のために作られるほかはなかつたのである。ものものしい、白々しい、臆する色もない阿諛は、女皇アンナにたてまつつたトレディアヤコーフスキーの、日本との通商を豫言した歌にも見られる。これ等の阿諛の作品が、しかもその宮廷の高貴の人々によつて、さまでに顧みられなかつたといふことも事實である。文學もしくは文學者といふものは、當時の高貴の人々からは、輕侮と戲笑との眼で見られてゐたに過ぎなかつたからである。

### 三

「君主の意志の是認」から、多く顧みられなかつた宮廷的阿諛の詞華を経て、エカテリーナ二世の時代に及んで、ロシアの文學は、ここにはじめて、個人心の濃き投影を見る。ロシアの現實に對する否定の表白があらはれて來たのである。ラディッシュチュエフが、その「ベティエールブルグからモスクワへの旅」(千七百九十年)の中で、「農民たちは、その自由を、地主たちから期待してはならぬ、寧ろ最も苛酷な奴隸状態の間からこそ期待すべきである」と言つてゐるのは、強き否定の間からこそ、眞の肯定が生れるといふ意味にほかならない。眞の肯定のためには、強き否定が行はれなければならぬ。エカテリーナ二世が、この書を一讀して、ラディッシュチュエフは、「農民からの叛亂に未來の希望を置いてゐる」ものであるとしたのは、

この書の眞意を正しく理解しなかつたためである。しかしながら、地主の好意や善意にかけられた幻影の消滅は、ラディッシュチュエフの心の影を濃くし、深くした。寧ろこの一篇は、ラディッシュチュエフの詩である。憤慨と、嗟嘆と、傷心と、自責との心の隅々から、おのづから溢れ出でた一篇の詩である。「吾等は主人であるが故に、吾等は奴隸である。吾等は吾等の同胞を拘束してゐるが故に、吾等は自から農奴である。」といふ後のゲルツェンの心は、既にラディッシュチュエフの言葉の中に隨處にこれを見出だすことが出来る。外部の觀察から轉じて、「わが内に目を向けて見れば、人間の不幸は、やはり人間から發してゐることをさとして」ラディッシュチュエフの言葉には、抑へがたき熱意があり、鮮かな感情の色彩がある。詩である。

ラディッシュチュエフの否定の詩は、ロシア文學の道を拓いた。少くとも、農奴制度との闘ひを中心として懷疑的な、批評的な、諷刺的な心持ちのうちに——現實に對する否定のうちに、ロシアの文學は、その往くべき道の出發點を、はじめて眞に見出だし得たのである。

ロシアは初めから、死ぬべき運命を有してゐた。自から破壊すべき運命を有してゐた。自から破壊し、自から殺すことによつて、はじめて自から甦り、自から建造するに至るのが、ロシアの運命であつた。ロシアの生活の全過程は、自己の破壊、自己の否定を出發點としなければならなかつたのである。自己を否定することが出来るやうになつて、ロシアは初めて自己を生かす道へ出たのである。否定による肯定、死による生、この徑路を、正直に、大膽に、一徹に、しかして驀地に進んで來たのがロシアである。どこを指して往くか分らないと言はれたトロイカ(三頭立ての轎)は、所詮生きるために死を急いだロシアの姿にほかならない。否定の道はもとより艱難であつた。死ぬべき運命を有してゐたロシアが、死ぬるために、どのくらゐの苦

惱を経て来たかと言ふまでもない。しかし、そのために、否定の力は更に強まり、更に深まつた。惱みと苦しみによつて、自己に對する要求は更に高まつた。ロシアの文學は、この否定の力と、矜持の心との表白である。生きんがために死なうとするもの地獄の巡歴の記録である。その色調の上に、おのづから一味の峻厳苦澁のあとを加へてゐるのは已むを得ない。陰惨幽暗の谷から出て、無邊際曠野を往くやうな時にさへ、廣闊のよろこびの間に、北方の白日に、影なき小鬼の躍るを見、風になびく千萬の草の聲なき嘆きを聞く。それは、生きんがために、死んでは死に、死んでは死にして来た、無抵抗の抵抗の姿にほかならない。ロシアの生きようとする力は、これほどまでも深く、逞ましく、豊富であつたのである。

#### 四

ロシア文學に於ける懷疑の胚胎は、恐らくラディッシュチュエフ以前、もしくはファンキージン以前に遡る。容易に表面にあらはれない力として、鬱屈のままに、根深い懷疑と否定との力が存在してゐたであらうことは、ブイビンの如きも、その「文學觀の品隋」のなかで論じてゐるのである。ファンキージンや、ラディッシュチュエフや、或は又ノキーコフの前に、諷刺劇詩人カンテミールの如きも、また時代の懷疑的傾向を表現したものと言ふべきである。受身の忍従を、スラヴ民族の最高美德として考へるくせのある人々は、それ等の早い懷疑的傾向を、外來のものとしてのみ見ようとする。しかし、十七世紀に於けるロシア教會を中心としてのギリシャ派とローマ派との争ひが、教會の分離が、果たして何を語つてゐるかを考へてみる

がよい。教會の分離、異端の發生、これ等の事象を一貫する精神は、即ち直ちに根深い懷疑的否定的精神にほかならないではないか。この精神は、やがてまた、文學に於ける現實否定の思想である。それはラディッシュチュエフの「ベティエルブルグからモスクワへの旅」となり、ファンキージンの喜劇となり、グリボエードフの「聰明の悲しみ」となり、リニールモントフ、ブーシユキン、乃至ゴゴリその他の作品ともなつたのである。懷疑と否定との精神が、如何にロシアの文學に重大な力となつて現はれてゐるかは、次第に説くところによつて明らかにせられるであらう。

懷疑と否定とは、要するに個人と社會との分裂を意味する。また更に、個人と國家との分裂を意味する。現實と妥協することの不可能、現實を是認することの不可能、それは本來の意味では生活の一種の變態である。苦惱はそこから生ずる。ロシア文學は、この苦惱のうちに沈淪する多くのすぐれた人々を描いた。現實生活の常軌から外れた「よけいもの」は、この分裂を根本的になくするため、更に苦しみ悩んだ。周圍の現實に對する輕侮と嫌惡との苦しみから、そこにはしばしば絶望自棄の色が見える。殊に、ロシアの懷疑は、科學の教へるところに従つて、たとへば國家經濟の見地から、農奴の問題を考察するといふ以前に、もしくはそれ等の考察よりも深く強く、その根柢には直接端的な感情があつた。懷疑と否定との底には、良心の憤りが、感情の傷みが、中心の力として動いてゐた。しかも、エカテリーナ二世の時代から、アリエクスサンドル二世の即位の頃に至るまで、殆ど百年に近い間、ロシアには、この傷心と憤激とをなだめ癒やすに足る改革が行はれなかつたのである。生活は百年の間に成長した。國家としての公けのロシアは成長した。思想も亦成長した。しかし、生活の形式は昔のままであつた。官僚政府の發達と共に、農奴制度もまた更に固く保

持せられて来た。そこで、思想はすべて反抗となつた。それはまた、苦惱と嗟嘆との聲とならざるを得なかつた。歎きの聲は、ひとりワルガの大河の上に流れわたるばかりではなかつたのである。ロシアの文學は、この歎きの歌である。この憤りの詩である。

## 五

ゴーゴリがかつて自作「死せる魂」の一節を取つて、プーシキンに讀みかかせたことがある。プーシキンは、ゴーゴリの朗讀を聴くと、いつもよくをかがつて笑つたのであつたが、その時ばかりは、聴いてゐるうちに、だんだんまじめになり、しまひには、幽愁にたへないやうな暗い顔をして来た。いよいよゴーゴリが讀みをへると、プーシキンは、いかにもさびしさうな調子で、「ああわれ等のロシアは、何といふ憂鬱なことであらう！」と言つた。

憂鬱なロシア！ その憂鬱の間から、一致しがたい矛盾の間から、ロシアに於ける否定の精神は生れて来た。諷刺の文學は生れて来た。十八世紀末から十九世紀へかけての、諷刺の文學は、笑ひの中に解放を求めた。をかしいものは恐ろしくない。少くとも、をかしいものの中には、潜伏することを必要としなくなる。笑ふものは、その笑ひの對象となつたをかしきものの上に立ち、をかしきものは、小さく、つまらないものやうに見えて来る。地主も、ゴーゴリに描かれて、その恐るべき力を失ひ、官僚も、ゴーゴリに描かれて、

その愚かさを暴露した。笑ひは、農奴制度と官僚政治との幻影を消滅せしめた。笑ひは破壊であつた。笑ひは否定の力であつた。

ゴーゴリは、ロシアの現實の空虚をまさまじと見せた。この空虚の中にあつて、苦しみ悩みつゝ生きることは、眞に物凄おそろしいことであつた。ゴーゴリは、その笑ひの中へ、物凄さを導き入れた最初の人である。笑ひを、諷刺を、悲劇的なものにしたのはゴーゴリである。

それはゲルツェンの言ふ「變な笑ひ」である。「物凄い笑ひ」である。「身の毛の竦立つやうな笑ひ」である。その笑ひの中には、自責羞恥の感じと、自から嘔む良心の悩みとがある。「をかしさあまつて涙が出る」のではなくして、「泣いて泣いてしまひに笑ふ」ところの泣き笑ひである。

或はまた、國家の偉業、英雄の功業のために、その臺石の下に踏みつぶされてしまつた、弱い見るかげもない平凡人の一生がある。或はまた、現實の羈絆を破つて、天馬空を往かうとして身を亡ぼす驕兒がある。プーシキンもリェールモントフも、それ等をただそれだけのものとして觀たのではあるまい。

何れもみな、否定の試みである。懷疑である。死ぬべき運命のロシアが、死ぬるために急ぐ道程の記録である。ピョートル大帝の銅像の下に踏みつぶされた平凡人の反抗が、天馬空を往くの概を地上に實現しようとした驕兒の破壊が、二十世紀の革命でなかつたとは誰が言ひ得よう。死ぬることによつて生きようとする否定の力は、革命である。ロシアの文學は、否定の力の發現としてのみ見るには、尙幾多の複雑な要素を有してゐるかも知れない。しかし、この力を中心として、この一角からロシアの文學を讀むことは、決してロシア文學を冒瀆することではあり得ない。否定の力は、——生きんがために死なしめるこの力は、豊富な復

雑な、頗る變化に富む力である。地に落ちて身を亡ぼす一粒の麥のうちに籠つてゐる力はいつかあらはれて来る。

否定の力としての文學は、やがて眞に生きる力としての文學にほかならない。繰り返して言ふが、ロシアは初めから、死ぬべき運命を有してゐた。自から破壊すべき運命を有してゐた。自から破壊し、自から殺すことによつて、はじめて自から甦り、自から生き、自から建造するに至るのが、ロシアの運命であつた。ロシアの文學は、自己の否定を出發點として、否定による肯定、死による生、この徑路を、正直に、大膽に、一徹に、しかして善地に辿つて來たのである。

そこにロシア文學の苦惱と悲哀がある。そこにロシア文學の力がある。地獄に下つて魂を救ひ來つたものの物凄さと、歎びと、力とがある。

## 平凡人の反抗

—

千八百三十三年の十月、プーシュキンの「青銅の騎士」は書かれた。これはプーシュキンの數多い敘事詩の中で、最後に書かれたものである。プーシュキンは、その年、ウラルからの歸途、十月の一日から十一月の半ば頃まで、凡そ一箇月半を、ニージュニー・ノヴゴロド縣の世襲の莊園ボルディノで暮した。「青銅の騎士」はこのボルディノ滞在中の作で、プーシュキンの苦心の作である。モスクワ歴史博物館に保存せられてゐる草稿によると、推敲に推敲を重ねたあとが明らかに見られる。ある部分は前後十度に互つて書き直してある。今日傳へられてゐるこの詩の本文は、結局四度目の改訂の後に成るものである。

千八百二十六年、ニコライ一世の反動政策の一つとして、文部省は新たに檢閲法令を定めた。これから後、プーシュキンの凡ての作品は、特にニコライ一世自からの希望によつて、印刷刊行に先だつて、皇帝の親閱



を経なければならなくなつたのである。千八百三十三年十二月六日、ポルディノから歸ると間もなく、プーシュキンは作品公刊の許可を願ひ出た。それは恐らくこの『青銅の騎士』であつたらう。十二月十二日には、『青銅の騎士』の原稿が、検閲を経てプーシュキンの手もとへ返されて來た。親閲の結果はプーシュキンに不利であつた。

プーシュキンがこの検閲の結果に對してどういふ心持を懷いたかといふことは、よく分らない。プーシュキンは、その晩年に於いて、内面的の生活の上では、殆ど孤獨を守つてゐたらしく見える點がある。その手紙の中でも、極めて用心深く、それまでのやうに、凡てを打ちあけて語るといふ風がなくなつてゐる。晩年書きつづけてゐた日記の中でさへ、事實を記すといふほかには、殆ど一語の批評らしい言葉などを加へてゐない。

千八百三十三年十二月十四日の日記には、——「十一日、ベンケルドルフより明朝訪問ありたしとの招きを受く。往く。皇帝陛下の書き入れある青銅の騎士を返さる。」とあつて、削られた言葉や詩の句を記し、「?」を附せられたる箇所多し。これ等は凡て余にとりては大きな相違を來たすもの。」と言ひ、従つて、出版書肆スミルディンとの約束條件變更の必要ある旨を記してある。それだけである。

同じ月のナッシュチャコーキンへの手紙に、「金錢上おもしろからぬこと有之候。實はスミルディンと約束すみのところ、青銅の騎士検閲不許可となりたる故、その話は取り消さねばならぬこととなり申候。この事小生にとりては損失に候。」とあり、また更に同じ人への後の手紙にも、「青銅の騎士は不許可——損失でもあり不愉快でもあり。」とある。ポゴディンへの手紙にも「青銅の騎士は刊行せられざるべし」とある。

ここでプーシュキンは金錢上の損失を繰り返して言つてゐるが、この作の量から見ても、寧ろこの作の受け検閲上の壓迫から來る不快を、損失に藉口して洩らしてゐる氣味が察せられる。プーシュキンはこの作の検閲を、實際ニコライ一世が親しく手を下したものと考へてゐたやうであるが、事實は、少くともこの作の場合では、吏僚の目を通したものを最後に皇帝が親閲して、多少の意見を加へた程度のものであつたらしい。プーシュキンも一時はその「親閲」の旨を重んじて、詞句の上に多少改削を試みかけたらしいが、結局それを思ひ止まつて、自作の原形を保留するとともに、刊行のことを思ひあきらめたやうである。

従つて、プーシュキンの生前には、この作の完本は公刊せられるに至らなかつた。僅かに作中の『序詞』の一部分が、『ベティエールブルグ』といふ標題で出たに過ぎない。プーシュキンの死後、ジュニコフスキーの手で改削を加へたものが出た。原作の本文を、保存せられてゐる草稿によつて校訂することは、アンニェンコフ以來、ロシア文學史家の仕事の一つであつた。完全な本文は、千九百九年のウェーリングダロフ監修版によつて、はじめて世に出でたといはれる。

## 二

『青銅の騎士』の序詞は、ロシアの新都ベティエールブルグの今昔を描いて、その創建者ピョートル大帝の勲業を歌つたものの如く見える。

ビョートル建都以前のベティエルブルグは、荒蕪たる北海に沿うて、ニエワ河の波速く、小舟の影もさびしかつた。じめじめした沼地の岸邊には、ここかしこにイズバ（丸太小屋）が黒ずみ、そこには、貧しいチュホーニエツツ（フィンランド人）が住んでゐた。霧にかくれた太陽の光りさへささぬ森は、あたりに鳴り騒いでゐた。

百年は過ぎた。森の間は劈りひらかれ、沮洳の地は堅められ、北方の新都は、きらびやかに、ほこらしく出現した。フィンランドの漁夫が貧しき漁りをなりはひとしたあたりには、宮殿や高塔が聳え立ち、あらゆる異國の船は集まり、ニエワ河の岸は花崗岩に装はれ、長橋は架けられ、鬱蒼たる林園は都のどこどころを飾つてゐる。夏の白夜の明朗な光り、冬の互寒の森厳な大氣、薔薇よりも紅な少女の頬の輝き、泡立つブシシュのほの蒼い水煙の色、——更に軍隊訓練の勇ましき美しさ、銅帽の閃き、祝砲の轟き。春の水を流すニエワ河の賑ひ。すべてこれ等は、ビョートルの新都の光彩であり、喜悅である。

ブーシキンは、この序詞の終りに於いて、ビョートルの都の、ロシアの如くゆるぎなく榮え誇らんことを願ひ、新都建造のために征服せられた自然も——ニエワ河の水も、すでに心をやはらげ、フィンランドの波も、その古き囚はれの苦しみと敵意とを忘れて、かひなき怨みによつてビョートルの永遠の夢をかきみださざらん事を願うてゐる。要するにこの序詞は、ビョートルの覇業を讀し、その成果をたたへ歌つたもの如くに見える。「ビョートルの創造せるものを愛するブーシキンの讚歌」の如く見える。ゲルツェンが言つたやうに、ビョートル大帝ロシアを呼び、ロシアは即ちブーシキンの歌を以てこれに答へたかのように見える。この限りに於いて序詞は一篇ベティエルブルグの歌である。

しかしながら、ブーシキンの望んだやうに、征服せられた自然は、果して永久に心をやはらげたであらうか。フィンランドの波は、その囚はれの苦しみと敵意とを忘れ、かひなき怨みによつてビョートルの永遠の夢をみだすことをしなかつたであらうか。

「青銅の騎士」の本筋となつてゐる物語の概は、千八百二十四年の秋の、ベティエルブルグの洪水である。それは「征服せられた自然」の反抗である。古き囚はれの苦しみと敵意とを忘れ得なかつたフィンランドの波の叛逆である。しかし、この作では、それは既に過ぎ去つたことである。この物語は、おそろしかつた過去のおもひ出を、今尙新しい記憶を辿つて讀者に語るに過ぎない。「わが物語は哀しからう」と言ふブーシキンの言葉によつて、序詞は終りを告げてゐるが、そこに語られる哀しい物語を最後として、ニエワの河波もフィンランドの海の潮も、再びビョートルの都を荒す勿れといふのが、作者の願ひであつたらしく見える。洪水は引いて往つた。ビョートルの都は再び何事もなかつたやうに、ゆるぎなく立ち、誇り榮えてゐたのである。作者の意は、この哀しい物語の後に、自然の反抗の後に、依然として残るビョートルの大都の壯麗と、そこに象徴せられた彼の覇業とを指し示すのに在つたかも知れない。作の仕組みはさう推測することを許しさうでもある。ただそこに多少の疑ひがある。

十一月のベティエールブルグは、陰暗の空に秋の寒さが迫り、ニュワ河の波は荒れたち、雨は窓をうち、風は悲しげに唸る。若いエウゲーニーは、夜遅くよそから歸つてきた。昔は由緒ある家柄であつたかも知れないが、今では世間から忘れられて、晴ればれしい世間をも遠ざかりながら、忘れられた昔を悔むでもなく、何處かの役所に勤めてゐた。外套を投げかけ着物を脱いで、寢床に入つたが、いろいろのことを考へて、永い間寝つくことができなかった。——自分は貧乏だ、だから勤勉によつて、一身の獨立をも人の尊敬をも得なければならぬ。それにしても、少し智慧と金とがあればよいのだが、一體餘り賢くもないなまけ者でつと樂に遊んで暮してゐる仕合せ者が、世の中には随分ゐるではないか、自分はもうまる二年も勤めてゐる……それはさうと天候は鎮まらず河水は増し、ニュワの橋も大方落ちたらう、ここ二三日はバライシャとも會ふことができない。そんなことを考へてゐるうちに、何時のまにか眠りにおちた。やがて嵐の夜の霧はうすれ、ほの白い朝はしらみ、もの凄しい日がきた。ニュワ河は海から吹き上げる風に逆つて泡だち、しぶき狂つて風に吹き戻されつつ、河中の島々を沈め、沸きたち渦巻きつつ、見るみる町の上に押し寄せてきた。物見高い見物どもは逃げ散つた。水は地下室に流れ入り、下水道は栓の口まで溢れた。水は包圍進撃する如く怒り狂うて、木材商品家具橋梁、さては棺までも街の上に押し流した。人々はここに神の怒りを見、その神罰

をまつばかりであつた。

アリェクサンドル一世は、憂愁と困惑との色を浮べて、バルコンの上に出で、洪水の様を眺めて、「神の支配する自然に對しては皇帝も亦せんすべはない」と言つた。町は河のごとく、廣場は湖のごとく、宮殿はその中にあつて孤立せる島のごとく見えた。アリェクサンドル一世は、將士を四方に遣はして、溺るるものを救はしめた。折からピョートルの廣場には、その片隅に、新しい家が水上に浮き上り、その階段の上には、片足をあげて、生けるごとくに一對の獅子が門を守つて立つてゐた。この大理石の獅子の上に跨つて、帽子もなしに、手を十字に組み、身動きもせず、恐ろしく蒼褪めたエウゲーニーがゐた。雨も、風も、波も、彼の恐るるところではなかつた。彼の思ひこめたるまなざしは、遠くひとところを見詰めて動かなくなつた。山のごとき大波の逆巻く遠い入海の眞際に、垣根と柳の木と古い小さな家とが見えた。そこにバライシャとその母とが住んでゐた。エウゲーニーは、つきものしたやうに、大理石の獅子にとりつけられたやうに、そこを離れることができなかった。見渡す限りまはりには水または水である。ただ荒れ狂ふニュワ河の上に高く、泰然と、彼に背を向けて、右手を差し立てて立つてゐるのは、青銅の馬に跨れる偶像のピョートル大帝であつた。

嵐は去つた。破壊と狂暴とに倦み疲れて、さながら盜賊の群の、追跡を恐れて、獲物を遺しつつ引上げを急ぐがごとく、荒し奪うて水は引いた。エウゲーニーは望みと恐れとわびしさを心に抱いて、まだ鎮まらぬニュワ河の方へと急いだ。河波は勝利に勝ち誇つて、その底に火の燃えたぎるがごとく沸き立つた。戰場から駆け戻つた軍馬のごとく、ニュワ河は重く喘いでゐた。エウゲーニーはそこに浮ぶ小舟を見ると、いき

なりかけよつて、船頭を呼ぶ。たづきのためには、それほど波を氣にもかけぬ船頭は、十錢一つでよろこんで、高波を押し切つて乗り出す。さすが馴れきつた船頭も、大分永く荒波と闘ひ、小舟はしばしば今にも二人を乗せて、波底深くかくれるかと思えたが、やがて、向う岸についた。見馴れた町の姿は變りはてて、家は歪み、或は壊れ、或は波にさらはれて、あたりは戰場のごとく、死骸がそここに横たはつてゐる。エウゲーニーは前後も忘れて、まつしぐらに駈けて行く。入海まで来てみても、それらしい家の影もない。ただ柳ばかりが立つてゐる。彼はそこら中を歩きまはり、聲高くひとり言を言つてゐたが、にはかに片手で額をたたいて、大聲を出して笑ひだした。

夜の霧は、不安の都に降りた。人々は夜更けまで、寝もせず、昨日のことを話し合つた。朝の光りは、疲れた蒼白い雲の中から、靜かな都の上にさしそめた。昨日の不幸のあとは既になく、何事も平常に返つた。町には、平氣な顔をして人々が往き來した。官吏は勤めに行き、商人は洪水に見舞はれた地下室を開いた、損亡を取り返すために、せいぜい高く賣りつけようとしてゐた。家々の裏戸からは、小舟がおろされ、氣の早い詩人は洪水に遭つた不幸な人々のことを、もう詩に歌つてゐた。しかし、エウゲーニーの耳には、ニエワ河の嵐に狂ふ波風の音が響き渡つてゐた。彼は黙つて、恐ろしい思ひを胸一ぱいに抱いて、さまよつてゐた。一週間は過ぎ、一月も過ぎた。彼は自分の宿へは歸つて來なかつた。期限が切れたので、宿ぬしは、彼の部屋を、賃しき一人の詩人に貸した。エウゲーニーは、荷物を取りにも來なかつた。間もなく彼は、世間から忘れられて、一日歩きさまよひ、夜は波戸場で眠つた。窓から投げられるパンきれに飢をしのぎ、着てゐる古びた着物は破れくちた。悪童はあとを追うて石を投げ、駈者の鞭が、彼を打つことも珍らしくはな

かつた。道を歩くにも、見わけがなかつたからである。しかし彼は、それを氣にもとめなかつたやうである。彼は心のうちの不安動搖に氣を奪はれて、外部のことは耳にも入らなかつた。かやうにして、動物とも人間とも、この世の人ともあの世の人とも分からぬやうな、不幸な生活を送つてゐた。

ある時彼は、ニエワ河の波戸場に眠つてゐた。はや、秋に近く、風は吹き騒ぎ、ほの暗い波は泡をたて、水に洗はれて滑らかな石段をうちつつ、波戸場にうち寄せてゐた。エウゲーニーは目が覺めた。あたりは暗く、雨がおちてきた。風は悲しげに吹き、遠くの方には夜の闇の中に歩哨が合圖を呼びかはしてゐた。エウゲーニーは、はつとして、まさまざと、過ぎし日の恐ろしさを憶ひ起した。彼はあわてて起きて、歩きかけたが、またふいと立ち止つて、そつとあたりを氣味悪さうに見廻した。彼は大きな家の圓柱の下にゐた。入口には片足をあげて、生けるがごとく、門を守る一對の獅子が立つてゐた。見あげる闇の空には、圓ひを繞らした岩の上に、右手をさしのべて、ピョートル大帝の偶像が青銅の馬に跨つてゐた。

エウゲーニーは身慄ひをした。考へが、もの凄いとぞやえてきた。洪水のあつた場所の見分けがついてきた。自分や、獅子や、廣場や、闇の中にゆるぎもせず昂然として立つてゐるあの偶像のまはりに、波の荒れ狂うたその場所の見分けがつくやうになつた。その偶像のピョートルの宿命的な意志によつて、この都は海のとりに建てられた。取圍む霧の中にも凄くたてる彼の智力よ！彼の意力よ！またその馬の勢は！馬よ、何處に向つて駈け、何處に往いて止らうとするのか。運命の力強き支配者よ、斷崖の上、深淵に臨んで、鐵の轡を引き緊めて、ロシヤを後脚で立ち上らせたのも、この通りではなかつたか。

ピョートルの偶像の臺石のまはりを、狂へるエウゲーニーはめぐりつつ、物凄きまなざしを、この半世界

の支配者の顔に向けた。彼の胸は、押しつけられる思ひがして、額を冷たい柵におし當てた。兩眼はかすみ、心臓には、炎が燃えわたり、血は沸きかへつた。彼は、傲然たる巨人の前に、心暗み、暗黒の力につかれたものごとく、齒をくひしぱり、手を握りしめ、「よし、不可思議なる建造者よ！ おのれ！……」と、憎しげに身を慄はせて呟いた。そして、にはかに一目散に逃げだした。もの凄き皇帝の顔が、囁と憤怒に燃えて、靜かにこちらを向いたやうに思はれたのである。彼は人氣のない廣場を駈けて行く。その後から、あたたかも雷鳴のごとく、——地響きする鋪道のうへを、カッパ、カッパと重く駈けて来る建音が聞える。蒼白い月の光に照らされて、馬上に右手をさしのべ、蹄の音高く、青銅の騎士はエウゲーニーを追ひかける。かくしてこの哀れな狂人は、夜もすがら、何處へ行つても重き蹄の音をたてた、青銅の騎士に追はれた。

この時以來、その廣場を通る度に、彼の顔には恐怖の色が浮び、痛みを抑へるやうに、急いで胸を手を當てた。着古しの帽子を脱ぎ、きまり悪げに目を伏せ、こそこそと脇を行つた。

海の岸近く小島が見える。折々漁夫が歸りにおくれで、そこで晩飯を煮たきしたり、官吏が日曜の舟遊びに、人氣もないこの小島を訪うた。そこには草の葉一つ生えなかつた。洪水はそこへ古びた小屋を打ち上げた。それは水の上に黒い葦の茂みのやうに浸つてゐた。去年の春、それを筏に載せて運び去つた。小屋の中には何もなく、すつかり毀れてゐた。實際にあの狂人を見つけた。そこでその冷たい死骸を、菩提のために葬つた。

プーシユキンがその序詞の終りで、「わが物語は哀しからう」と言つた一篇の哀史はこれで終りを告げてゐる。まへに説いた序詞の意味と、この物語の展開とをあはせてかんがへると、そこにはさまざまの解釋が

成り立つ。

四

「青銅の騎士」に描かれたエウゲーニーを中心とする「哀しき物語」は單純である。しかし、その物語の楔になつてゐるベティエールブルグの洪水に關聯して、一面に於いてプーシユキンは序詞の中でピョートルの新都創建を歌ひたへ、他面に於いて、その「哀しき物語」の中では、青銅の騎士ピョートル大帝を、エウゲーニーに對立する人物として描いてゐる。エウゲーニーの戀人バラシーヤのことなどは殆どわづかにその名を擧げてゐるに過ぎないが、ピョートル大帝の銅像については、生あるものの如くに描き出してゐる。蒼白い月の光に照らされて、馬上に右手をさしのべ、あたたかも雷鳴のごとく、おもひ地響きを立てて、鋪道の上をカッパ、カッパと追つ駈けて来る青銅の騎士の姿は、單にエウゲーニーの目に映つた幻影としてのみは見られないところがある。物語の本筋は、哀れな見るかげもない一小官吏エウゲーニーの哀史に過ぎないのであるが、そのささやかな平凡人の哀史の上に、ベティエールブルグの都が、従つてピョートル大帝の姿が、つきまとひ、のしかかつてゐるやうに感ぜられる。ピョートル大帝とエウゲーニーと、この二つの姿は甚だ均衡の取れないながらに、ある對立の位置に置かれてゐるやうにも思はれる。物語の結末としては、いふまでもなくエウゲーニーの死であり、ピョートル大帝の雄圖の頌榮であるとしか見えぬのだが、しかし

この作品を通じての印象は、さういふ表面の経過の中から、一種の疑いと不安とを残す。

ピョートル大帝の新都創建は、その結果として、多くの犠牲を出だした。新都の創建はニエワ河の水をせき止め、その流れを狭めた。洪水の氾濫は、一つはその結果である。ここに新都をさだめることさへなかつたなら、洪水に伴ふ多くの不幸もなかつたであらう、エウゲーニーの哀史も、所詮ピョートル大帝の雄圖が生み出だした、ささやかな犠牲の一つに過ぎない。しかし、ピョートル大帝の新都創建には、雄大な國家的生命を創造せんとするもの意志がある。そのささやかな部分的なもの犠牲に對する吾等の同情をやめてしまふことは出来ないが、「部分的なものに對する一般的なもの勝利」をしづかに認めることはせねばならぬ。「國民と國家との運命を安泰にするためには、この青銅の巨人は、個々人の運命をいたはつてゐられなかつた」のである。その新都創建者の背後には、「歴史的の必然」がひかへてゐたのである（ペリエリンスキーの『プーシキン論』、第十一章、一八四六年）。——かういふペリエリンスキーの見方によると、この物語は、要するに集合的の意志と個々の意志との衝突を意味する。個人と歴史の必然的な過程との衝突を意味する。集合的の意志の代表者はいふまでもなくピョートル大帝である。個々の意志の代表者は、いふまでもなくエウゲーニーである。しかしてこれ等の二つの意志もしくは原理の衝突の結果は、歴史的必然の代表者ピョートル大帝の勝利である。歴史的必然、一般的集合的なる力の前には、個々の人間の意志は、もろくも踏みこたへられて行く。「この詩は所詮ピョートル大帝の頌榮である。ロシアの偉大なる改革者を歌ふにふさはしい詩人の頭に、凡そ浮び得るかぎり最も大膽な、最も壯大な頌榮の詩である。」——これがペリエリンスキーのこの詩に對する解釋である。

## 五

メレジュエーフスキーは、この詩に於いて、ヨーロッパ文明の歴史の上で相闘ふところの二つの根本的な力の對立を認めてゐる。即ちその一つは異教思想である。今一つはキリスト教思想である。一つは自己を滅却して結局神にいたるの思想であり、今一つは自己を神の如くに擴大して、覇者英雄の偉業を達成せんとするの思想である。ピョートル大帝は即ちこの個人主義的英雄主義思想の權化であり、エウゲーニーは、即ち没個人的集合的意志の表現である。

一方には、ゴゴリの『外套』のアカキー・アカキエキツチや、ドストイェーフスキーの『貧しき人』のマカール・ディエウシキンのやうな、ロシア文學に於ける古典的な人物の中にかぞふべきエウゲーニーがある。そこには「ささやかなものささやかな幸福」があり、「かざりなき心のかざりなき戀」がある。その一方では、「ロシア國民の中に潛みかくれてゐて、世界に未だ知られてゐない力を宣揚する」超人的な英雄ピョートルがある。しかし、荒れ狂ふニエワの河の上に高く、泰然と、背を向けて、右手をさしめて立つてゐる、青銅の馬に跨れるピョートル大帝にとつて、「ささやかなもの」の亡びが、何である。「ロシアの如くゆるぎなき」新都の創建者にとつて、バラシヤとその母との住んでゐた柳のほとりの古びた小さな家の流失が、何である。巨人の意志はそれ等の一切をあげて押し流し沈めてしまふ。無數の、同じ

やうな、役にも立たなうな人間は、ただそれ等の枯骨の上を踏み越えて、偉大な選ばれたものが、その目的に到達するためにのみ生れて来るのではないか。亡び行く「ささやかなもの」は、「運命的な意志によつて、海のほとりに都」を建てた人の前にぬかづくべきではないか。

「しかし、最もささやかなものの中の最もささやかなもの、土より出でしそよげる草の弱き心の中に——彼のかぎりなき戀の中に、英雄の意志の生れ来りしところにも劣らぬ無限の深みが開かれたら？ もし地の蟲おのが神に叛いて起たば何とする？ 狂人のほかなき威嚇が、果たして巨人の青銅の心を刺し、彼を戦慄せしめることがあるであらうか。」（メレジュコーフスキーの「ブーシュキン論」）

偶像の臺石のまはりを、

あはれな狂人はひとめぐりして、

物すごいまなざしを

半世界の君主の顔に向けた。

彼の胸は壓し通り、

顔を冷たい霧におし當てた。

両眼は霧にかすみ、

心臓には炎が燃え走り、

血は沸きかへつた。

傲然たる巨人の前に、

彼は心も暗くなつた——

齒をくひしぱり、手を握りしめた

暗黒の力につかれたもののやうに。

「よし、不可思議な建造者よ！

おのれ！」憎々しげに

身を顛はせて吠いた……

そしてにはかに一目散に逃げ出した。

おそろしき皇帝の顔が、

嚇と憤怒に燃え立つて、

靜かにこちらを向くと見えた……

メレジュコーフスキーの説くところによると、おとなしきささやかなものが、己れの心の中に開かれた反抗の深みに自から慄然としたのである。わが心の底の聲の物凄さにおびえたのである。しかし手套は投げられた。微小無力なるもの偉大なるものに對する判決は下された。「よし、おのれ！」といふエウゲーニーの言葉は、吾等微小にして無力なるものも、ピートル汝とともに、尙よく闘ふべし、しかして勝敗は神のみぞ知るといふ意にほかならない。手套は投げられ、「傲然たる巨人」の靜安はやぶられた、青銅の騎士は狂人のあとを追ふ。物語の最後は狂人の水死に終つてゐるが、しかしその狂人の幻想は前兆的である。彼の傷つけられた心のかすかな眩きは、全く消えてはしまはないであらう。雷鳴の如く地響きする青銅の馬の蹄

の音に、かき消されてはしまはないであらう。しかししてプーシユキン以後のロシア文學は、凡てこの「ロシアを後脚で立たせた」巨人に對するガリレヤ思想の反抗である。ゴゴリ、ドストイェーフスキー、トルストイ、それ等の神秘的傾向の人々は勿論であるが、トルゲーニェフ、ゴンチャロフの如きも、表面こそは西ヨーロッパ派に屬する如く見えて、その實本質的には同じく西ヨーロッパ文化の敵である。凡てこれ等の人は、ロシアをピョートルから呼び戻すであらう。即ちロシアの日の光りに照らされロシアの大地の母胎へ、神の信願へ、農民のかぎりなき心へ、或はまた天使の如き白痴の微笑へ、しかしして、彼等も亦、異口同音に、この微小なるものの偉大なるものに對する反抗、「怒れる蟲」の叫びに聲をあはせるであらう。メレジュコーフスキーはかやうな意味に於いて、微小無力なるものの反抗を是認し、異教思想の理想に對するキリスト教思想の反抗を是認し、從つてエウゲーニーを是認してゐるのである。

## 六

プライローフスキーの「プーシユキンとその同時代の人々」の第七冊の中に記されてゐるところの、ジ・ゼフ・トレチャク教授のプーシユキンとポーランドの詩人ミツケイキッチとの交遊關係を論じたもの、イワノフ・ラズウームニクの「ロシア社會思想史」第一巻にプーシユキンを論じたものなどは、ピョートルを國家の權威の補佐と見、エウゲーニーの怒れる吠きを専制政治に對する個人々の反抗と見て、この二つの對立

にこの詩の意味を求めようとしたものの如くである。トレチャク教授の解釋によると、プーシユキンは、ミツケイキッチの詩の中に、あたかもプーシユキンが一時頃の自由思想を棄ててしまつたものやうに非難してゐる意味を見出した。君主のために頌榮の詩を作り、萬民の苦しみをよろこぶかの如きものに對するミツケイキッチの非難を、プーシユキンはわがこととして受け取つたのである。しかし、プーシユキンは、これに答ふるに愛國の情に充ちた詩を以てすることは好まなかつた。ロシアの君主獨裁とその意義に關するプーシユキンの考へは、別の形で答へられねばならなかつた。それがこの「青銅の騎士」であるといふのである。トレチャク教授の言ふところによると、ミツケイキッチの「ピョートル大帝の記念像」もプーシユキンのこの詩も、ともにヨーロッパ風の個人主義とアジア風の國家思想との闘争を意味する。ただミツケイキッチは個人主義の勝利を豫想し、プーシユキンはその全き敗北を豫言してゐる。即ちプーシユキンがこの詩で言ひ現はさうとしたところのものを、トレチャク教授の解釋によつて言つてみると、「なるほど、自分は自由の宣揚者暴虐の敵であつて、また今も尙さうである。しかし、公然と専制政治に戦ひを宣したとすれば、自分は發狂したものと見えはしないであらうか。ロシアで生活しようと思へば、どうしても國家全能思想に服従しなければならぬ。さうしなければ、國家全能思想は、發狂せるエウゲーニーと同じやうに、自分をも追跡するであらう。」といふ意味に歸着するといふのである。イワノフ・ラズウームニクの言ふところでは、「個人は國家の力によつて身を亡ぼすばかりでなく、征服せられてしまふ。」プーシユキンは青銅の騎士によつて代表せられてゐる國家の力の前に、個人が妥協隨順すべきことを提議してゐるらしく見えるといふのである。



ビートル大帝とエウゲーニーとの對立に、何等かの意味を求めようとした以上諸家の考察は、それぞれに内容を異にしながら、その目のつけどころに於いては一つである。それがベティエルブルグの新都そのものであるにせよ、ビートル大帝その人であるにせよ、もしくはまた、青銅の騎士としての巨人の偶像であるにせよ、その一方に於いて、エウゲーニーに對立するものが、ビートル大帝乃至その力の象徴表現と見るべきものであることに於いては一つである。そこで考察批評の要點は、凡そ二つにわかつことが出現と見るべきものであることに於いては一つである。そこで考察批評の要點は、凡そ二つにわかつことが出来る。即ちビートル大帝乃至その力の象徴表現と見るべき一方の原理が何を内容とするか、またそれに對立するエウゲーニーの象徴表現の原理の内容が何であるか、——即ちこの相對立する二者の内容が何であるかといふ問題がその一つである。しかし、その何等かの内容を有して相對立する二者の關係が、結局どういふ結末に達してゐるか、——少くとも、この詩がその對立の將來の運命に就いて、如何なる暗示と豫想とを與へてゐるかといふ問題が残る一つである。

ビートル大帝乃至その力の象徴表現が、一般的なもの、國家國民の安泰、乃至歴史的必然といふやうな原理を代表すると見るビューリンスキーの考へは、それを國家思想の權化と見るトレチャク教授の解釋と、必ずしも本質的に異なるものではないやうである。ビューリンスキーがやや哲學的に、抽象的に、歴史の必然性とか、一般的なものとかいふ言葉を用ひてゐるのに對して、トレチャク教授やイツノフ・ラズウムニクが、端的に國家思想乃至國家全能思想と言つてゐるところは、前者の解釋が廣汎に過ぎ、後者の解釋が狭いながらこの場合にびつたりはまるといふ相違を示してゐる。しかし、ビューリンスキー自身國家國民の安泰といふやうな言葉を用ひてゐるところを見れば、事實に就いては少くともこの場合結局同一のものを指し

てゐると見てよい。次に、このビートル大帝乃至エウゲーニーの對立關係に就いて、ビューリンスキーもトレチャク教授等も、結局國家的必要が個人の幸福を顧慮してゐられないで、個人の幸福は無遠慮に蹂みじられて行くことを認めてゐる。しかし、前者の解釋では、それ故にこの詩はビートルの偉業の讚歌であるが、後者の解釋では、個人は已むを得ずその強き力に隨順して行かねばならぬといふ意を含めてあるとする。この二つの異なる解釋を比べてみると、後の解釋に、何となく一脈の不安が溜み、抑塞の氣が流れてゐる。ビューリンスキーの批評が、千八百四十六年に出たものであり、トレチャク教授等の批評研究が、千九百六年乃至十二年頃に出たものであるのを考へ合はせてみると、そこには時代の空氣の差が、批評家の考へかたの上に、少くとも表現の上に、多少は働きかけてゐると言へないでもない。

## 七

ビートル大帝乃至その象徴とエウゲーニーとの對立を、直ちに異教思想とキリスト教思想との對立争闘と見るメレジュコフスキーの觀察には、幾多の無理があり、不自然がある。ビートルを異教思想の代表と見ることに、まだしも相當の理由根據があるとしても、エウゲーニーをキリスト教思想の代表と見ることは、はるかに多くの疑問があり得る。

メレジュコフスキーのこの解釋は、ロシア文明史の二つの相對立する思想傾向としての西ヨーロッパ主

義思想とスラヴ國粹主義思想とを、直ちに異教思想とキリスト教思想とに改名せしめたものの如くにも見える。ビョートルは、西ヨーロッパ主義思想の先達として、その最大の指導者として、ひろくロシアの評論家の間に認められてゐるからである。勿論、ビョートル乃至その象徴に、多分の西ヨーロッパ主義的乃至異教思想的傾向のある事は事實である。しかし、エウゲーニーにあるものは、果してビョートル以前にかへれと主張するスラヴ國粹主義思想であらうか。エウゲーニーのうちに、ゴゴリの『外套』や、ドストイェフスキの『貧しき人々』などの主人公に共通するもののあるのも事實である。しかし、『外套』のアカキーヤ、『貧しき人々』のマカールやが、多くのロシア的、スラヴ的キリスト教思想の匂ひを有してゐることも亦事實である。しかし、それだからと言つて、エウゲーニーが、直ちにまたスラヴ的キリスト教思想の匂ひを同じやうに有してゐると言ひ難い。エウゲーニーを、アカキーヤやマカールと比べると、そこに見出されるものは、エウゲーニーのみひとり有するところの特異な一つの點である。或はまたアカキーヤやマカールも、いつかは感じもしたであらうし、また必ず感ずるに至るであらうところの、ある一つの心持ちである。それが、エウゲーニーに於いて、明らかに描き出されてゐる。彼等は凡て、「ささやかなものささやかな幸福」を奪はれたものである。ただ、そのささやかな幸福を奪つたものが、エウゲーニーに於いてはビョートル大帝乃至その象徴であつた。國家の名に於いては獨裁君主の「運命的な意力」であつた。少くとも、エウゲーニーにはさうだと思はれた。そこで、メレジュコフスキの謂はゆる「怒れる蟲」の叫びが、かすかながら、きれげながら聞えて來た。その言葉は終つてゐない。その未完了の言葉に、句切りを附けるものは後の時代である。しかし、とにかくその言葉は發せられた。「手套は投げられた。傲然たる

巨人の靜安はやぶられた。」狂人の幻想ではあるが、それは前兆的である。雷鳴の如く地響きする青銅の馬蹄の音にも、その狂人の傷ついた心の微かな吐きは、全くかき消されてはしまはない。この點に關するメレジュコフスキの解釋は正しい。即ち、エウゲーニーの反抗乃至抗議が、そのままに消え失せてしまはないものと見た點に於いて、私はこの批評家の解釋に同意を表す。これはその後における歴史上の事實によるといふよりも、このプーシユキンの敘事詩そのものの結構内容が、おのづから暗示するところによるのである。とにかく、メレジュコフスキが微小無力と見えるものの反抗を是認し、エウゲーニーの反抗を是認してゐる點に於いて、この詩に對する解釋上、一つの重要な暗示を與へた事は見のがすわけに行かぬ。しかしながら、上のやうに考へて來れば來るほど、エウゲーニーの反抗を以て、ビョートル乃至その象徴に對するガリレヤ思想の反抗と見る、メレジュコフスキの解釋には、疑ひが生ずる。プーシユキン以後のロシア文學が、神の信順へ、或はまた天使の如き白痴の微笑へ、ロシアをビョートルから呼び戻さうとしたものであるといふ、メレジュコフスキの解釋には、少からぬ疑ひが生ずる。「怒れる蟲」のさげびは果してガリレヤ思想の反抗のみ終始すべきであつたらうか。天使のごとき白痴の微笑へ、ロシアをビョートルから呼び戻すことだけで満足すべきであつたらうか。私は決してさうは思はない。この解釋には、いかにも普通にいふところのロシアくさいところがある。しかし、それこそは、「ロシア國民の中に潜みかくれてゐて、世界に未だ知られてゐない力」を、眞に徹底的に認めよとしないセンチメンタルな考へかたである。天使の如き白痴の微笑を目ざして、ロシアをその本源の姿に見るとするが如きは、その白痴の微笑の表面をのみ見て、——若くはそれを神祕的センチメンタリズムの眼からのみ見て、その底にさか卷

く眞の叛逆破壊の意志を読み取らないものである。また、およそ、否定破壊の精神が有する、根本的な創造の意志を洞察し得ざるものである。メレジュコフスキーが、その神秘的、ガリレヤ的センチメンタリズムを脱し得ないで、最近の革命の後、著しく反動的になつて行つたことは、彼の従來の思想傾向から観て、自然の順序といはねばならぬ。

## 八

ピョートル大帝乃至その象徴が、この詩に於いて、國家全能の思想をあらはし、君主獨裁の威力の表現であると見るのは尤もである。これはこの詩に現はれた明白な事實であつて、これ以上の解釋は、この詩を離れたものとなる。この詩の解釋に於ける問題は、その國家の威力に對するエウゲーニーの關係であらねばならぬ。

ピョートルの銅像は、ピョートルの表現する威力の象徴と見られる。ピョートルの威力は初めにベティエールブルグ建都の雄圖となつて、先づ自然の力を征服した。時は百年を過ぎても、なほその威力を誇示することの出来るものは、象徴としての銅像であつた。生けるピョートルが、かつてフィンランドの海の波を征服して、この都を建てたやうに、威力の象徴としての銅像は、時の前に、自然の暴威の前に、超然として聳え立つた。それはあたかも「運命の支配者」であつた。この「哀しき物語」は、この「運命の支配者」の前

に、自然の反抗の無力であつたことを語つてゐる。

朝の光りは

疲れた蒼白い雲の中から

鮮かな都の上にさしそめた。

もう昨日の朝の

あとさへも見えず……

何事もみな平常に返つた。

しかし、この自然の反抗は、その「盗人の如くに」過ぎ去つたあとに、人間の心の反抗を残して行つた。「よし、不可思議な建造者よ、おのれ！」と言つたエウゲーニーの言葉は、くはしくは果してなにを意味するか、——微小無力のものと雖も、自分の運命の上に加へられた暴力に對しては、やがて復讐することがあり得るといふのであるか。聲もなく、意志もなき、白痴の微笑のロシヤも、自己の意志を強ひんとする支配者に向つて、やがて既に手をあげて来るであらうといふのか。それ等はすべて明白でない。しかし、この場合、この言葉の明白であるなしは、必ずしも重大な問題ではない。重大な意味を有するのは、あの、「もすこし智慧と金とがあればよいのだが」といつてゐたほどのエウゲーニーが、にはかに國家の威力の象徴、ピョートルの銅像に向つて、對等の立ち場に在るが如く、この「半世界の支配者」を威嚇するほどの力と勇氣とを感得して來たといふこと、即ちこの一事である。

一年前の洪水の折には、ピョートルの銅像は荒れ狂ふニエワ河の上に高く、泰然と、エウゲーニーに背を

向けて、右手を差しのべて立つてゐた。しかし、今は、そんなに平然と、エウゲーニーを無視してはゐられなかつた。あの微小無力なエウゲーニーを、國家の威力の象徴たる青銅騎馬のビョートルが、無視輕蔑してばかりはゐられなくなつた。「おそろしき皇帝の顔が、嚇と憤怒に燃え立つて、靜かにエウゲーニーの方を向くと見えた。」この一事既に多くを意味する。

メレジュコーフスキーは、エウゲーニーが自から言葉を發するや否や、にはかに一目散に逃げ出したのはおとなしくささやかなものが、己れの心の中に開かれた反抗の深みに自から慄然としたのである、わが心の底の聲の物凄さにおびえたのであると言つてゐる。エウゲーニーを主として心理的に説明すれば、或は正にさうでもあらう、しかしながら、巨人の銅像は、エウゲーニーの心の中に開かれた反抗の深み、心の底の聲の物凄さに、果たして慄然としなかつたであらうか。ビョートルの銅像が、嚇と憤怒に燃え立つて、靜かにエウゲーニーの方をふり向いたのは、もはやその言葉を無視してゐられなくなつた證據である。「狂人はかなき威嚇が、巨人の青銅の心を刺し、彼を戰慄せしめることが」出來たからである。エウゲーニーは、たしかにビョートルを動かした。微小無力な凡人の反抗の聲は、國家の威力を戰慄憤怒せしめるに足りたのである。

巨人の銅像は、憤怒の面を向けるだけで安心してはゐられなかつた。「考へが物凄いと互えて來た」その刹那に、エウゲーニーの念頭をかすめたところのものは何であつたか。その電光の如く閃めき走つた一念こそは、青銅の巨人があたかも雷鳴のごとく地響きさせて、鋪道の上を、カッパ、カッパと蹄の音高く、蒼白い月の夜のベティールブルグの町々を、夜もすがら、追跡してやまなかつたところのものではないか。

そこには追跡しても追跡しても捕へることの出來ない、逃げても逃げてもふり棄ててしまふことの出來ない一念の閃めきがあつたのである。この哀しき物語の中でこそ、人間の反抗も、この一夜の追跡を最後としてエウゲーニーの水死に終つてゐるが、あの物凄く追跡は、果たしてあの一夜で終りを告げたであらうか。少くとも、ブーシュキンは、その簡勁な言葉で、吾等の前に、皇帝とその臣民との争闘の一場を描き出したのである。人はこの一事を見のがしてはならない。

## 九

ブーシュキンはその青年期に於いて、政治上の解放運動に加はつてゐた。十二月黨の人々とも親しかつた。彼が南ロシアに流竄せしめられたのも、政治上の解放を歌つた詩がその主要な一原因となつてゐた。彼の解放思想は、しかしながら、概して終始溫和であつたのが事實である。革命の廣場の上こそ、偉大なる自由の日は昇るといふやうな意味を歌つたものもないではないが、法は凡て支配者がこれを與へるといふやうな考へは棄て切らなかつた。

しかし、千八百二十五年十二月十四日の十二月黨の叛亂以前に於いて、彼は既に革命に對する態度を著しくあらためた。自由は政治組織の強制的變革によつては來たらず、ひとりの精神の教養によつて得られるといふやうな考へに傾いてゐた。つまり、眞の自由、眞の革命にとつて、最も力強い根據となるものは、外面的の力よりは、人間の心の力であるといふのが、その當時のブーシュキンの考へであつた。この考へが、や

は「青銅の騎士」に於いてもその根柢を成してゐるところがある。

ビョートル大帝は地上絶大の支配者として、自然の反抗、自然力の革命には少しも動かさなかつた。しかし微小な平凡人の自由な心の反抗は、さしもの地上絶大の支配者を憤怒せしめた。その雷鳴の如き重い蹄の音によつて、この一狂人の心の眩きをかき消さうと、青銅の巨人は、終夜ベティールブルグの町々を、追跡した。しかし、メレジュコーフスキーの言つたやうに、その眩きは、蹄の音にかき消されてはしまはなかつた。追跡するところに、逃げるところに、その眩きは——またその蹄の音は、夜もすがら聞えた。

暴虐に對する暴力の反抗はこれを信じない。しかし、青銅の騎士が、いかに高くゆるぎなく立つてゐようとも、それは決して永遠の生命を有してはゐない。自由は、平凡な、微小な人間の心の底から求められる。一旦その心の無限の底が開かれると、そこから發する眩きは、如何なるもの音を以てしても、もうかき消すことは出来ない。その眩きは、必ず聴かれなければならないのだ。少くとも、その眩きは、到るところに、人の耳を追ひ、人の心を追ふ。——ブーシュキンの意は、おそらくかういふところに在つたであらう。一人のエウゲーニーは、一夜の追跡で終るかも知れぬ。しかし、エウゲーニーは、一人でない。あまりに多過ぎるほどのエウゲーニーがゐる。しかししてこれを追跡するビョートルは、——國家の威力の象徴は、いつでも一人だ。つまりこの一平凡人の反抗は、一切の端緒である。地獄に下つて救ひを求め來たらうとする心の最初の發動である。狭い、しかし深い心の洞から吹いて來る冷たい風の、遠い、かすかな音である。

舊世界の組織を兩肩に支へてゐた巨人アトランドの上に、雷鳴と嵐とがつづきさまに襲つて來た。雷鳴は世界の大戦である。嵐は革命である。世界大戦の雷火は、國と國との「友誼」のセメントを焼きつくして

憎みと敵意とを、——征服意を、果てしなく人の心に燃え立たせた。

そこへ革命の嵐が來た。

民の怒りの革命が來た。

生命の力は豫言的である。文學は豫言である。それは破壊を豫言する。少くとも、新しき創造のための破壊を豫言する。

民の怒りの革命は、結局エウゲーニーの怒りのよみがへりではないか。それはビョートルの異教思想に對するガリレヤ思想の反抗でもなければ、天使の如き白痴の微笑に窮極の安定を見出すものでもなかつたのである。況んやそれは、國家の威力の前に妥協隨順するものでは勿論なかつた。ブーシュキンはブリュソフの説いてゐる如く、心の革命を最も重く見てゐたであらう。しかし、その心は、既に早く、巨人の銅像をして終夜ベティールブルグの町々を奔馳せしめた。その心が、革命の嵐を呼びおこしたのは、決して不思議ではなかつた。

繰り返して言ふ。一人のエウゲーニーは、一夜の追跡で終るかも知れない。しかし、エウゲーニーは一人でない。あまりに多過ぎるほどのエウゲーニーがゐるのだ。しかしして、これを追跡するビョートルは、——國家の威力の象徴は、いつでも一人だ。つまりこの一平凡人の反抗は、一切の端緒であつた。地獄に下つて甦り來たらうとする心の最初の發動であつた。狭い、しかし深い心の洞から吹いて來る冷たい風の、遠い、かすかな音であつた。それは、雷鳴の如く地響きさせる重い蹄の音と雖も、到底かき消すことの出来ないものであつた。

## 生命感の點火

プーシュキンの「青銅の騎士」に於いて、讀者は二つの力の發動の姿を見る。一つは自然の力である。今一つは人間の心の力である。自然の力は、反抗して、やがておのづから静まり、人間の心の力は、自然の暴力の鎮靜するに伴つて、その荒廢の中から、かすかに反抗の眩きを洩らす。しかしてその眩きは、夜もすがら、青銅の騎士の蹄の音に追はれて、消えがちになりながら、いつまでも消えてしまはない。青銅の騎士の耳には、そのかすかな眩きがこびりついて、氣になる。その眩きには、かすかながら、打ち棄てて置けないものがあるからである。不安である。遠く通り来る不安の聲音である。そこに、あの詩の緊迫せる力が集注せられる。

あの詩の解釋評論を試みて後、丁度一箇月を隔てて、大震と大火災とが來た。自然の暴力が一時に怒り狂

ひ、地水火風四元の變が一時に來た。人間にとつては變災であるが、自然にとつては、合理的な必要に基くその力の發動にほかならなかつたのである。複雑な都會生活の中に、自然のエレメンタルな力が、微妙に織り込められ、おとなしく従へられてゐるやうに、人々は思つてゐた。しかし、自然の力は、依然としてエレメンタルであつて、その根本的な必要と要求とを忘れてはゐなかつたのである。自然の力は、その根本に於いて、依然として單純にして強烈であつた。自然の單純強烈なエレメンタルな力は、その力を盡して、赤裸裸に人間に肉迫した。一面は自然の生命の極度の緊張である。他面は即ち人間の生命の極度の切迫である。この二面の現象が、一時に掃蕩的に人間生活の大破壊となつて出現した。

しかして、ここでもまた、自然の單純強烈な力は、その極度の緊張から、次第に鎮靜し、弛緩して行つた。自然の暴力が襲ひ通つて來るのは、實に急激猛烈であるが、その引き上げて行くのも、また實に速い。眞に「盜人の如く」に去つて行く。

自然の生命が極度に緊張して、單純強烈なエレメンタルな力となつて發動するのは、自然の力が、その根本的な必要を異常の程度に於いて、謂はば痛感した場合である。その根柢的な要求に、謂はば目ざめて來た場合である。更に言ひかへて見れば、自然が命がけになつた場合である。自然はいつでも命がけだともいへるであらう。本質的にはさうであらう。しかし、自然は平生その本質的な力を、明白に人間の眼の前へ突きつけては來ない。或は、人間がさう感じないでゐる。少くとも、人間は、自然が單純強烈なエレメンタルな力で發動して來るときに、はじめて自然の命がけな力を痛感する。

そこで、自然の單純強烈なエレメンタルな力の發動は、——自然の命がけになつた力は、人間をも亦命が

けにせずには指かない。人間の心もそれに呼應して、單純強烈なエレメンタルな力で動き出す。命がけになるといふのは、根本的な生命の必要乃至要求を、痛切に感得して、そこから心の力の發動して來ることを意味する。人間の心の力が、全力的に、赤裸々になるのである。人間の心がそのどん底へ引きつけられて行き、一切の意志が、そのどん底の要求に還元せしめられるのである。

大震と大火災とは、人々を、果してかくの如き心境に徹せしめなかつたであらうか。少くとも、かくの如き心境に向はしめなかつたであらうか。

## 二

自然の力の人間に對する肉迫は、一時のものに過ぎなかつたが、「青銅の騎士」のエウゲーニーは、そのために戀人と母とを奪はれ、自からも亦その分別正氣を失つた。彼にとつて、最も貴き殆ど凡てのものを失ひつくして、なほ且つ殘るところは果して何であつたか。それは、愛と、愛の對象を奪ふに至つた根本原因に對する憎みと、この二つの根本的な感情にほかならなかつたのである。これこそは、あらゆる自然の暴力も、到底破壊し奪ひ去ることの出來なかつたところのものである。彼の生命の根柢の必要であつたのである。

大震と大火災とによつて、多くの人々は、平生保ち守らうとするところのもの殆どすべてを失つた。失はざるものと雖も、生活乃至生命にとつて、何が眞に重要緊切であるかを痛感せしめられたのである。單純

強烈な自然の力の、赤裸々な肉迫に直面して、人間の感じは、極度に緊張し逼迫せざるを得なかつたのである。自然の力が、命がけで逼つて來るのに對しては、人間の力も亦その生命の根本的な必要を、異常の程度に於いて、痛感せざるを得なかつたのである。

人間の心の動きは、よくも悪くも、正しくとも間違つてゐても、とにかくそれぞれ本氣で、命がけで、あけすけに現はれて來た。生命の感じの切迫は、そこまでに人間の心を誘うて行つたのである。あらゆる過度の恐怖、それに伴ふ警戒、殺傷、殘虐、——それは單に生命財産の保留といふことのためであらうとも、謂はゆる國家の存榮、主義主張の貫徹といふやうなことのためであらうとも、すべてそれ等の極端な現はれは、皆いづれも生命の感じの緊張切迫に基づいて、人間の心が、露骨に發動した形である。またその他面に於いて、共存共済の事實が、あの危急の直中に在るものの間にも行はれ、平生に於いて到底經驗しがたいほどの相互扶助の心持ちの溢れ充ちてゐたところのあつたのも、生命の感じの緊張切迫が、おのづから取らしめた道であつた。とにかく、自然の力の肉迫は、人間の心に、生命の感じを緊張せしめた。最も根柢的なもの、最も必要なもの、最も價値あるもの——少くとも、それぞれの人がさう考へるところのものに向つて、奮地に突進した。人々は、何等かの意味で、何等かの程度で、生命の感じの緊迫を深く經驗した。即ち、自然の力の肉迫によつて、人々の心は、何等かの意味で、何等かの程度で、一層強くリヤリズムの傾向に往かざるを得なかつたのである。

ブーシュキンの「青銅の騎士」で、青銅の騎士が、エウゲーニーを夜もすがら追ふといふのは、文字通りの意味でリヤリズムの描寫ではないかも知れぬ、しかし、あの半ば幻想的な描寫の中に、動かすべからざる

リヤリズムの精神が儼存してゐる。それが、エウゲーニーの心理と、その対象となつてゐるピートルの心理との交渉に於いて、眞に深く、相互の生命の感じに、切迫してゐるところのものがあるからである。その雙方の心理の交渉に、眞に命がけな、眞に根柢的に必要なものを、明らかに強く含んでゐるからである。

およそ生命の感じは、それが緊迫した境に在れば在るほど、直接的な、鋭敏な、必死なものとなる。即ちリヤリスティックな心持になる。本来リヤリズムの精神は、必ずしも生命の切迫した境からのみ發生するといふわけではない。しかしながら、人間の生活の歴史が示すかぎりにおいて、生命に何等の窘束切迫の刺激を與へないで、しかも尙リヤリズムの精神に徹することの出来るやうな世界は、まだ築き上げられてゐない。即ち何等の逼迫なしにリヤリスティックになるほどに、人間と人間の社會とは、まだ十分に成長してゐないのである。これを文學の歴史に就いて見ても、リヤリズムの精神の起るのは、そこに何等か生命の感じに窘束切迫の刺激の生じた場合である。リヤリズムはいつでも多少に拘らず苦澁である。憂鬱である。悲哀である。少くとも、それ等の暗影を壓倒するほどの官能的な歡喜快樂である。或はまた争闘であり、反抗である。否定でも、肯定でも、思ひ切つて、本気で、そのいづれをもそれぞれに容れるのがリヤリズムの確さ廣さである。ロシヤの文學が、十九世紀の初めから、寧ろ主としてリヤリズムの精神をその主潮としてゐるのも、ブーシュキンの如きがその父祖であるのも、ロシヤに於いて、生命の窘束切迫を感じべき事情の多かつたといふことと、それを感じる人々の心の力の強烈鋭敏豊富であつたといふことが、相助けて作り出だした結果ではないであらうか。

## 三

何等かの力による生命の窘束切迫を、直接的に、痛感するところに、眞の生命の感じが點火せられ、従つてリヤリズムの精神が深まり強まつて來ると言ひ得るなら、これをロシヤ最近の文學に就いて見ても、その種の事實を見出だすことが出来るのである。

千九百五、六年のロシヤの革命は、ロシヤの文學にとつて、生命の窘束切迫を、端的に痛感せしめたところの異變であつた。

いふまでもなく、革命の精神は、既定の價値の顛倒である。生活に對する新見地からの大膽な根本的な批評である。千九百五、六年の革命は、事實の上で失敗に終つたが、しかし、革命の精神氣分は、これによつて弘く流布せられた。革命を中心として、これに對する程度の問題が、人々の必至の興味となつた。就中當時のインテリゲンツィヤは、實際の事實として生起した革命に對する自己の態度を、從來の立場からも、明確に決定すべき必要に逼られた。革命の實際運動に、参加するとせざるとにかかはらず、これを自己の切實な問題として、この一大事實と交渉するところの自己に、何等かの意味では是認の道を見出だすべき必要に逼られた。そもそも革命の意義は如何、革命による多くの犠牲の意義は如何、或は理想のためといひ、或は未來の新社會のためといふものと、自己の、再び繰り返さるまじき生命との關係は如何、多數のための個人



の生命の意義は如何、——これ等はすべて新たな疑問となつて人々の心を打つた。即ち人生そのものの價值乃至意義について、自他の交渉關係について、何等かの根本的な解決を求めざるを得なかつた。その或るものは宗教に往き、宗教の基礎に於いてのみ革命を是認し、魂の解放としての革命を唱へ、靈の復活の新时代を開き來たるものとして革命に賛成した。メレジュ、コーフスキー一派の求神派の思想がそれである。またあるものは、革命が、豫期の結果を達成しがたきことに失望し、革命運動の大渦巻の中に在つては、自己の弱少微細なる一分子に過ぎざることを發見し、決定的な力を有せざることを感じて、社會的協力運動の興味よりは、寧ろ退いて個人の問題、自己の問題、しかしてまた人生根本の運命の問題に専念するに至つた。即ちその意味での革命の否定者、少くとも革命への背反者である。アンドリュエフの如きがそれである。

アンドリュエフによれば、人生は運命であり、神祕である。狂氣と恐怖とは到るところに在つて、人間は悉く自由を有せない。或るものは情愁煩惱の深淵に陥つて、到底浮び出ることには出来ない。思想そのものさへ人間に反く。個人の意識にもおのづから限りがあつて、他の人間の心は到底不可知の世界である。自から作り出だしたものでなく、變へることも出来ない固定の思想の力がのしかかつて来る。人間は生存の理法の奴隷であつて、しかも自から宇宙を擁護すると迷信してゐるのだ。それは四方八方に高く天を刺つて聳え立つ壁のあることを知らないからである。そこには自然の法則の壁がある。心理の法則の壁がある。また運命の壁がある。不可知の恐怖の壁がある。或は近代文明の壁があつて、個人の創造力を粉碎する。更に人間のさまざまの制度の壁が並び立つてゐる。憎悪や壓迫や争ひの壁である。更に老衰の壁があり、最後に壁の中の壁なる死の壁がある。アンドリュエフの短篇「壁」は、この運命觀の象徴である。「深淵」も、「ア

ナテマ」も、「人の一生」も、「思想」も、「黒い假面」も、「知事」も、乃至「大洋」も、すべてアンドリュエフの思想態度を鮮やかに示すところの作品である。

自我の執着、自我の欲望の充足、自我の生存の主張から、革命を否定するのはアルツイバシエフである。革命の英雄主義、その興奮、その惨苦悲痛、乃至その殘虐、それ等もすべて空である。希望と現實との矛盾を觀來たれば、犠牲の死の怖ろしさ空しさを感じられる。他のため乃至理想のためといふのは夢にひとしく、ただ自我の獨自の生存があるのみである。自我の生命の緊張充實があるのみである。そのためにも、一切は認容せらるべきである。死の恐怖否定と、生の高唱。肉の力による現實生活の享受、その享受力の豐滿の讚仰。この思想は「サーニン」にも「ランダの死」にも明らかに見える。

アンドリュエフとアルツイバシエフとは、わづかに一部分の例に過ぎない。これ等は何れもそれぞれの意味で結局革命を否定してゐる。少くとも革命に對して冷淡無頓着になつてゐる。一つは運命觀的であり、一つは自我中心であるが、とにかく自己の生活が中心題目となつてゐることは共通である。ただ一つは運命乃至心の力といふ方面が主であり、一つは肉の生活が主であるところに相違がある。いづれも革命乃至その氣運の刺激が、生命に異常の警束切迫を感じしめて、生命の感じが鋭く點火せられ、おののけの往くべき生命のリヤリティーに到達したものであると見られる。いづれも、切迫した生命の感じに出發して、何等か命がけな力を含んでゐる點に於いては一つである。いづれも、二十世紀のロシア文學に於けるリヤリズムの精神に根深く立つところのものである。生命に直接して、その深き實感から、何等かの生の中心意義を把握して來たらうとしてゐる點に於いて、十分なリヤリズムの根據に立つものであると言ひ得るのである。

エウゲーニーの幻想的な主観の中に、彼の生命にとつての眞のリアリティーが見出だされる。自然の暴力の切迫が、生命の感じを、そこまで突き詰めて行つたのである。

アンドリュー・エフは人間の魂の世界、運命の世界に、アルツイバーシフは性と死との問題に、特に生命の焦點をもとめた。革命といふエレメンタルな力の切迫が、生命の感じを、そこまで突き詰めて行つたのである。

大震と大火災とも、たしかに生命の緊束を感じしめる力の切迫であつた。もし、その力の切迫が、文學の方面にもやがてまた影響するとすれば、それはやはり、生命の感じを、更に突き詰めて行くための力とならねばならぬ。一層強く生命の焦點を求め、一層深く眞のリアリティーに徹する心として現はれて來べきである。それはリヤリズムの精神の高調に達することである。生命感の點火、リヤリズムの徹底、そこに生命に逼る破壊力の、否定による肯定の力がある。

## 新時代の豫感

われはこの世に來れり、太陽を見んがために、また青き地平線を。

われはこの世に來れり、太陽を見んがために、また山の頂を。

われはこの世に來れり、海を見んがために、また谷の咲きよこる花を。

われは一陣の中に世界を救めたり、われは王者なり。

われは灯を創造して、冷たき忘却を征服したり。

われはおのおのの刹那に啓示に充ち、常にうたふ。

わが灯を苦難は呼びさませり、されどわれはその故に愛せらる。

誰かわが歌ふ方に並ぶものぞ、

何人もなし、何人もなし。

われはこの世に來れり、太陽を見んがために。  
されど、もし日消えなば、

われはうたはん……われは太陽のうたをうたはん、臨終の時まで！（太田義照氏の譯）

この詩は、パリモントの作として、よく知られてゐるもの一つである。この詩を読む人は、それが現實の政治問題や社會問題とは全く没交渉であることを斷るまでもなく知るであらう。この詩の中には、人を教へようとしたりするところは見えない。現實を何とかして改革しようとか破壊しようとかいふやうな社會運動家らしい考へなどは歌つてゐない。この詩は、現實の物質的な生活の惡を憤る心持を歌つてもゐない。現實の惡を憤らしめることを詩人の仕事とは考へてゐない人の作つた詩である。そこには明らかな自己讚美がある。自己の力による創造の歡びと誇りとがある。自己を王者とし征服者として最高の位置に置く自負心がある。要するに自然と人生とに於ける勝利者としての詩人の自己讚美である。この詩の心持は、勞働者の生活や、その運動や、革命などのことを考へる心持からは、甚だかけ離れたものやうである。さういふものは、全く視野の外に置いてゐる心持である。

パリモントには、「われ等太陽の如くあらん」といふ有名な詩がある。太陽は、彼にとっては、世界の創造力の根源である。一切の生命を與ふるものである。日本は、パリモントに於いては、日の本即ち太陽の根源である。太陽を崇拜讃仰するのと同じやうな心持で、パリモントはよく火をうたひ焔をうたふ。火は淨める力である。美しく、耀かしく、生きてゐる。しかし同時に、それは運命的な力を有してゐる。抵抗すべ

からざる支配力を有してゐる。またそれは、無限の不斷の變化の姿である。およそパリモントに従へば、詩はそもそも無限の不斷の變化の象徴である。パリモントは刹那を愛する。その生活は急速であつて、變化してやまない。おのおのの刹那に自己の一切を投げ出す。刹那はまた次から次へと新しい世界を展開する。「新しき花はとこしへにわが前に花さきつつある。」「昨日」は永久にわかれ去つて、知られざる「明日」へ「明日」へと無限に進む。

パリモントのよく歌ふのは空である、太陽である。沈黙である。透明な光りである。過ぎ去り行くものの姿である。しかして要するに、すべての限りあるものの限りを超えた世界である。その象徴は生命の根源としての太陽である。炎である。しかしてまたじ首である。

二

もの倦い、いち悪い大地、

だが私にとつてはやはり生みの母だ！

おんみを愛します、おお母の母よ、

もの倦い、いち悪い大地！

大地に身をかがめ、五月のまどはしの中に、

大地を抱くはいかにころよきことよ！  
もの他に、いち悪い大地、  
だが私にとつてはやはり生みの母だ！

愛せよ、人々よ、大地を、——大地を、  
温つばい草の縁の秘密の中に、  
ひめられた啓示を私はきく。  
愛せよ、人々よ、大地を、——大地を、  
またそのすべての毒のあまさを——  
土なるもの、蒙くらきもの、すべてをうけ入れ、  
愛せよ、人々よ、大地を、——大地を。  
温つばい草の縁の秘密の中に。（黒田辰男氏の譯）

これはソログロフの詩の一節である。これこそは、ロシアの詩人プリーツフの言つてゐるやうに、現實と想像との二つの世界の間に、目に見えるものと夢との間に、實人生と空想との間に、一線を劃することの出来ない境地である。吾等が想像と考へなれてゐたところのものが、世界の最高の實在であるかも知れず、何人も現實として確に受け入れられてゐたところのものが、最もひどい迷妄幻想に過ぎないかも知れないや

うな——さういふ世界に住むものの心持ちである。そこにはまさまじい分りきつた現實の代りに、複雑な特殊の現實が造り出されてゐる。しかもその見なれない聞きなれない現實が、却つてはるかに眞實の現實であるやうにさへ感ぜられる。しみじみと、自然にさう感ぜられる。

この詩を読むと、人が詩によつて人生の神秘的な現實を求めるといふ意味が思ひ出される。詩の目的が、人間の心と、眼に見える可現の世界の上にただよふ神秘の方に近づかしめるところに在るといふのが思ひ出される。詩のうちに人生の永遠の實相があるといふのが思ひ出される。

## 三

詩は直接に社會問題のために、その宣傳のための軍歌となるものではない。またもとよりただの快樂のためのものでない。また單に人間の思想感情をうたふといふだけのものでもない。詩は常に必ずどこかに神聖な光りを帯びてゐる。人間の魂の解放のための戦ひに於いて（そのために人生の凡ての營みが行はれてゐるのだが）その最も鋭敏な力強い光りとなつてくれるものが詩である。人間の魂は、いつでも地上の土に反いて戦つてゐる。詩はその戦ひの上に勝利の道を示す光りである。あくまでも内面の法則のための光りである。未知の生活の現實を照らす光りである。——バリモントヤソログロフの詩に對する心持はかういふところにある。